

日蓮大聖人御書全集

しゅごこつかろん

守護国家論

新版
379
〜
440

しゅごこつかろん
守護国家論

しょうげんがんねん

正元元年（'59）

38 歳

さい

そ おも

じつぼうみじん

さんあく

み のが

夫れ以んみれば、たまたま十方微塵の三悪の身を脱れて、

まれ えんぶにほん

そうじよう

しよう

う

えんぶにちいき

そうじよう

希に閻浮日本の爪上の生を受く。また閻浮日域の爪上の

しよう す

じつぼうみじん

さんあく

み

う

うたが

生を捨てて十方微塵の三悪の身を受けんこと、疑いなき

しよう

す

あくしゆ

お

えん

ひと

ものなり。しかるに、生を捨てて悪趣に墮つる縁は一つに

さいし

けんぞく

あいれん

せつしよう

あらず。あるいは妻子・眷属の哀憐により、あるいは殺生・

あくぎやく じゆうじう

こくしゆ

な

みんしゆう

なげ

悪逆の重業により、あるいは国主と成つて民衆の歎きを

し ほう じやしいう し

知らざるにより、あるいは法の邪正を知らざるにより、あ

あくし しん

なか

せけん ぜんあく

るいは悪師を信ずるによる。この中において、世間の善悪は

がんぜん

あ

ぐにん

わきま

ぶつぼう

じゃしよう

し

眼前に在り。愚人もこれを弁うべし。仏法の邪正、師の

ぜんあく

しようか

しようにん

し

善悪においては、証果の聖人すら、なおこれを知らず。い

まつだい

ぼんぷ

わんや末代の凡夫においてをや。

ぶつにちせいざん

かく

よこうとういき

て

しかのみならず、仏日西山に隠れ余光東域を照らしてよ

このかた

しえ

えとう

ひ

げん

さんぞう

ほうる

つき

にご

り已来、四依の慧灯は日に滅じ、三蔵の法流は月に濁る。

じつきよう

まよ

ろんじ

しんり

つき

くも

そ

ごんきよう

しゆう

実教に迷える論師は真理の月に雲を副え、権経に執する

やくしや

じつきよう

たま

くだ

ごんきよう

いし

じよう

訳者は実経の珠を砕いて権経の石と成す。いかにいわん

しんたん

にんし

しゆうぎ

あやま

な

や、震旦の人師の宗義、その誤り無からんや。いかにいわ

んや、日本辺土の末学、誤りは多く実は少なきものか。

したがって、その教えを学する人、数は竜鱗よりも多けれ

ども、得道の者は鱗角よりも希なり。あるいは権教に依る

が故に、あるいは時機不相応の教えに依るが故に、あるい

は凡聖の教えを弁えざるが故に、あるいは権実二教を弁

えざるが故に、あるいは権教を実教と謂うによるが故に、

あるいは位の高下を知らざるが故なり。凡夫の習い、仏法

に就いて生死の業を増すこと、その縁は一つにあらず。

中昔、邪智の上人有って、末代の愚人のために一切の

しゅうぎ は せんちやくしゅういつかん つく な らん しやく どう さんし
宗義を破して選択集一卷を造る。名を鸞・綽・導の三師

か いちだい にほん わ じつきよう ろく ごんきよう い
に仮りて一代を二門に分かち、実経を録して権経に入れ、

ほつけ しんごん じきどう と じょうどさんぶ あいろ ひら じょうど
法華・真言の直道を閉じて浄土三部の隘路を開く。また浄土

さんぶ ぎ したが ごんじつ ほうぼう じよう なが ししよう
三部の義にも順わずして権実の謗法を成し、永く四聖の

しゆ だん あび そこ しず びやつけん
種を断じて阿鼻の底に沈むべき僻見なり。しかるに、世人

したが たと おおかせ しようじゆ えだ ふ
これに順うこと、譬えば大風の小樹の枝を吹くがごとく、

もんてい ひと おも てんしゆ たいしやく うやま に
門弟この人を重んずること、天衆の帝釈を敬うに似たり。

あくぎ やぶ おお しよあ
この悪義を破らんがために、また多くの書有り。いわゆ

じようどけつぎしよう だんせんちやく ざいじやりんとう しょ つく ひと
る浄土決疑抄・彈選択・摧邪輪等なり。この書を造る人、

みな せきとく ないつてん わた

おそ

皆、碩徳の名一天に弥るといえども、恐らくは、いまだ

せんちやくしゆう ほうぼう こんげん あらわ ゆえ かえ あくほう る ふ

選択集の謗法の根源を顕さず。故に、還つて悪法の流布

ま たと さか かんぱつ とき しようう ふ そうもく

を増す。譬えば、盛んなる旱魃の時に小雨を降らせば草木い

か つわもの う とき じやくへい さき ごうてき

よいよ枯れ、兵者を打つ刻に弱兵を先んずれば強敵ますま

ちから う

す力を得るがごとし。

よ なげ いっかん しよ つく せんちやくしゆう

予このことを歎くあいだ、一卷の書を造つて選択集の

ほうぼう えんぎ あらわ な しゅごこつかるん ごう ねが

謗法の縁起を顕し、名づけて守護国家論と号す。願わくは、

いっさい どうぞく いちじ せじ とど えいごう ぜんびよう う いま

一切の道俗、一時の世事を止めて永劫の善苗を種えよ。今、

きようろん じゃしよう ただ しん ぼう べっせつ まか

経論をもつて邪正を直す。信・謗は仏説に任せ、あえて

じぎ そん

自義を存することなし。

わ しちもん

分かちて七門となす。一には如来の経教において権実

いち によらい きようぎよう

ごんじつ

にきよう さだ

二教を定むることを明かし、二には正像末の興廢を明かし、

あ に しようぞうまつ こうはい あ

さん せんちやくしゆう ほうぼう えんぎ あ し ほうぼう もの

三には選択集の謗法の縁起を明かし、四には謗法の者を

たいじ しようもん い あ ご ぜんちしき

対治すべき証文を出だすことを明かし、五には善知識なら

しんじつ ほう あ がた あ ろく ほつけ ねはん

びに真実の法には値い難きことを明かし、六には法華・涅槃

よ ぎようじや ようじん あ しち と したが こた

に依る行者の用心を明かし、七には問いに随つて答うる

あ

ことを明かす。

だいもん だいいち

によらい きようぎよう

ごんじつにきよう さだ

大文の第一に、如来の経教において権実二教を定むる

あ

ことを明かさば、これにおいて四つ有り。一には大部の経

しだい い

るるい おさ

よつ あ

いち

だいぶ

きよう

の次第を出だして流類を撰むることを明かし、二には諸経

せんじん

あ

さん

だいしようじよう

さだ

あ

し

の浅深を明かし、三には大小乗を定むることを明かし、四

ごん

す

じつ

つ

あ

にはしばらく権を捨てて実に就くべきことを明かす。

だいいち

だいぶ

きよう

しだい

い

るるい

おさ

第一に、大部の経の次第を出だして流類を撰むることを

あ

明かさば、

と

い

ほとけ

さいしよ

きよう

と

問うて云わく、仏は最初にいかなる経を説きたもうや。

こた

い

けごんぎよう

答えて云わく、華嚴経なり。

と い
問うて云わく、その証いかん。

こた い
答えて云わく、六十華嚴經の離世間淨眼品に云わく「か

くのごときを我聞きき。一時、われき いちじ ほとけ まかだいこくじやくめつどうじよう 仏、摩竭提国寂滅道場に

いま はじ しょうがく じよう 在して、始めて正覺を成ず」。

ほけきよう じよほん ほうこうずい とき みろくぼさつ じつぼうせかい しょぶつ 法華經の序品に、放光瑞の時、弥勒菩薩、十方世界の諸仏

ごじ くだい み とき もんじゆしりぼさつ と い の五時の次第を見る時、文殊師利菩薩に問うて云わく「ま

しょぶつ しょうじゆしし きようてん みみようだいいち えんぜつ た諸仏・聖主師子、經典の微妙第一なるを演説したまい

みこえ しょうじよう じゆうなん みこえ い もろもろ ぼさつ て、その声は清淨に、柔軟の音を出だして、諸の菩薩

おし むしゅおくまん み ほうべんぼん ほとけ を教えたもうこと、無数億万なるを睹る」。また方便品に仏

みずか しょじようどう とき と のたま われ はじ どうじよう ざ

自ら初成道の時を説いて云わく「我は始め道場に坐し、

じゆ かん きようぎよう ないし とき もろもろ ぼんのう もろもろ

樹を觀じまた經行す乃至その時に 諸 の梵王および 諸

てんたいしやく ごせ してんのう だいじぎいてん よ

の天帝釈、護世の四天王および大自在天、ならびに余の

もろもろ てんしゆ けんぞくひやくせんまん くぎよう がつしよう らい われ ほうりん

諸 の天衆、眷属百千万は、恭敬・合掌し礼して、我に法輪

てん しょう せつ ほけきよう けこんぎよう とき

を転ぜんことを請ず」。これらの説は、法華經に華嚴經の時

さ もん ゆえ けこんぎよう だいいち い びしやもんでんのりやく

を指す文なり。故に、華嚴經の第一に云わく「毘沙門天王略

がつてんしりやくにつてんしりやくしやくだいかんいんりやくだいぼんりやくまけいしゆらとうりやく

月天子略 日天子略 釈提桓因略 大梵略 摩醯首羅等略」

いじよう

已上。

ねはんぎよう けこんぎよう とき と い すで じようどう お

涅槃經に華嚴經の時を説いて云わく「既に成道し已わつ

ぼんてんかんじよう

ねが

によらい

まさ

しゅじよう

て梵天勸請すらく『ただ願わくは、如来よ、当に衆生の

ひろ かんろ もん ひら

ないしぼんのう

もう

ために広く甘露の門を開きたもうべし』乃至梵王また言さ

せそん

いつさいしゅじよう

さんしゅあ

りこん

く『世尊よ。一切衆生におよそ三種有り。いわゆる利根・

ちゅうこん

どんこん

りこん

よ

う

ねが

と

中根・鈍根なり。利根は能く受く。ただ願わくはために説

ほとけのたま

ぼんのう

あき

き

あき

きたまえ』。仏言わく『梵王よ。諦らかに聴け、諦らかに

き

われ

いままさ

いつさいしゅじよう

かんろ

もん

ひら

聴け。我は今当に一切衆生のために甘露の門を開くべし』

さんじゅうさん

けこんぎよう

とき

と

のたま

と」。また三十三に華嚴経の時を説いて云わく

じゅうにぶきよう

しゅたら

なか

みさい

ぎ

われ

さき

もろもろ

「十二部経・修多羅の中の微細の義を、我は先にすでに諸

ぼさつ

と

の菩薩のために説くがごとし」。

かくのごとき等の文は、皆、諸仏世に出でたまいて、

いっさいきよう はじ かなら けこんぎよう と しょうもん

一切経の初めには必ず華嚴経を説きたもう証文なり。

と い むりようぎきよう い はじ したい と

問うて云わく、無量義経に云わく「初めに四諦を説いて

ないしつぎ ほうどうじゆうにぶきよう ま かはんにや けごんかいくう と

乃至次に方等十二部経・摩訶般若・華嚴海空を説く。この

もん はんにやきよう のち けこんぎよう と そうい

文のごとくんば、般若経の後に華嚴経を説くと。相違いか

ん。

こた い せんじん しだい ごぶん けこんぎよう

答えて云わく、浅深の次第なるか、あるいは後分の華嚴経

ほけきよう ほうべんぼん いちだい しだいせんじん つら い

なるか。法華経の方便品に一代の次第浅深を列ねて云わく

よじよう けこんぎよう に はんにやきよう

「余乗〈華嚴経なり〉の、もしは二〈般若経なり〉、もし

さん ほうどうきよう

あ

ところ

は三〔方等経なり〕有ることなし」と、この意なり。

と い けこんぎよう つぎ きよう と

問うて云わく、華嚴経の次に、いずれの経を説きたもう

や。

こた い あこんきよう と

答えて曰わく、阿含経を説きたもうなり。

と い なに し

問うて云わく、何をもつてこれを知るや。

こた い ほけきよう じよほん けこんぎよう つぎ きよう と

答えて云わく、法華経の序品に華嚴経の次の経を説いて

い ひと く あ ろう びよう し いと

云わく「もし人、苦に遭つて、老・病・死を厭わば、ため

ねはん と ほうべんぼん い すなわ はらな おもむ ないし

に涅槃を説く」。方便品に云わく「即ち波羅奈に趣く乃至

ごびく と ねはんぎよう けこんぎよう つぎ きよう さだ

五比丘のために説きぬ」。涅槃経に華嚴経の次の経を定め

い すなわ はら なこく しようほうりん てん ちゆうどう

て云わく「即ち波羅奈国において正法輪を転じて中道を

せんぜつ きようもん けこんぎよう のち あこんきよう と

宣説す」。これらの経文は、華嚴経より後に阿含経を説く

なり。

と あこんきよう のち きよう と

問うて云わく、阿含経の後に、いずれの経を説きたもう

や。

こた い ほうどうきよう

答えて曰わく、方等経なり。

と い なに し

問うて云わく、何をもつてこれを知るや。

こた い かりようききよう い はじ したい と

答えて云わく、無量義経に云わく「初めに四諦を説いて

ないしつぎ ほうどうじゆうにぶきよう と ねはんぎよう い しゆたら

乃至次に方等十二部経を説く」。涅槃経に云わく「修多羅よ

ほうどう い
り方等を出だす」。

と い ほうどう てんじく ことば

問うて云わく、「方等」とは天竺の語なり、ここには大乘

い けこん はんによ ほつけ ねはんとう みな だいじようほうどう

と云う。華嚴・般若・法華・涅槃等は、皆、大乘方等なり。

なん ひと ほうどうぶ かぎ ほうどう な た

何ぞ独り方等部に限つて方等の名を立つるや。

こた い じつ けこん はんによ ほつけとう みな ほうどう

答えて曰わく、実には華嚴・般若・法華等は、皆、方等な

いま ほうどうぶ べつ ほうどう な

り。しかりといえども、今、方等部において別して方等の名

た わたくし ぎ むりようぎきよう ねはんぎよう もん

を立つることは、私の義にあらず、無量義經・涅槃經の文

けんねん あこん しようか いつこうしようじよう つぎ だいじよう と

に顯然たり。阿含の証果は一向小乗なり。次に大乘を説

ほうどう い ご みなだいじよう い だいじよう はじ

く。方等より已後をば皆大乘と云うといえども、大乘の始

ゆえ

はじ

ほうどうぶ

ほうどう

い

めなるが故に、初めなるによつて方等部を方等と云うなり。

れい

じゅうはつかい

じつばん

しき

はじ

例せば、十八界の十半は色なりといえども初めなるによつ

しききよう

な た

て色境の名を立つるがごとし。

と い

ほうどうぶ

しききよう

のち

きよう

と

問うて曰わく、方等部の諸経の後に、いずれの経を説き

たもうや。

こた

い

はんにやきよう

答えて曰わく、般若経なり。

と い

なに

し

問うて曰わく、何をもつてこれを知るや。

こた

い

ねはんぎよう

い

ほうどう

はんにや

い

答えて曰わく、涅槃経に云わく「方等より般若を出だす」。

と い

はんにやきよう

のち

きよう

と

問うて曰わく、般若経の後には、いずれの経を説きた

もうや。

こた

い

むりようぎきよう

答えて曰わく、無量義経なり。

と

い

なに

し

問うて曰わく、何をもつてこれを知るや。

こた

い

にんのうきよう

い

にじゅうくねん

なか

答えて曰わく、仁王経に云わく「二十九年の中」。

むりようぎきよう

い

しじゅうよねん

無量義経に云わく「四十余年」。

と

い

むりようぎきよう

はんにやきよう

のち

けこんぎよう

つら

問うて曰わく、無量義経には般若経の後に華嚴経を列ね、

ねはんぎよう

はんにやきよう

のち

ねはんぎよう

つら

いまた

涅槃経には般若経の後に涅槃経を列ぬ。今立つるところの

しだい はんにやきよう

のち

むりようぎきよう

つら

そうい

次第は般若経の後に無量義経を列ぬ。相違いかん。

こた

い

ねはんぎようだいじゅうし

もん

み

ねはんぎよう

い

答えて曰わく、涅槃経第十四の文を見るに、涅槃経より已

ぜん しょきよう つら ねはんぎよう たい しょうれつ ろん

前の諸経を列ねて涅槃経に対して勝劣を論じ、しかも

ほけきよう あ だいく まき ほけきよう ねはんぎよう い

法華経を挙げず。第九の巻において、法華経は涅槃経より已

ぜん さだ ほけきよう じよほん み

前なりとこれを定めたもう。法華経の序品を見るに、

むりようぎきよう ほけきよう じよぶん むりようぎきよう はんによ つぎ

無量義経は法華経の序分なり。無量義経には般若の次に

けこんぎよう つら けこんぎよう しょじ や はんによきよう のち

華嚴経を列ぬれども、華嚴経を初時に遣れば般若経の後は

むりようぎきよう

無量義経なり。

と い むりようぎきよう のち きよう と

問うて曰わく、無量義経の後に、いずれの経を説きたも

うや。

こた い ほけきよう と

答えて曰わく、法華経を説きたもうなり。

問うて曰わく、何をもつてこれを知るや。

こた

い

ほけきよう

じよほん

い

もろもろ

ぼさつ

答えて曰わく、

だいじようきよう

むりようぎ

な

ぼさつ

おし

ほう

法華經の序品に云わく「諸の菩薩のた

めに、大乘經の、無量義と名づけ、菩薩を教うる法にし

ほとけ

ごねん

と

ほとけ

きよう

て、仏の護念したもうところを説きたもう。仏はこの經

と

お

けつかふぎ

むりようぎしよざんまい

い

を説き已わつて、結跏趺坐し、無量義処三昧に入りたもう」。

と

い

ほけきよう

のち

きよう

と

問うて曰わく、法華經の後に、いずれの經を説きたもう

や。

こた

い

ふげんぎよう

と

答えて曰わく、普賢經を説きたもうなり。

と

い

なに

し

問うて曰わく、何をもつてこれを知るや。

こた い ふげんぎよう い さ のちみつ き われ
答えて曰わく、普賢經に云わく「却つて後三月あつて、我

まさ はつねはん ないしによらい むかし ぎしやくせん よ

は当に般涅槃すべし乃至如来は昔、耆闍崛山、および余の
じゅうしよ ひろ いちじつ どう ふんべつ いま

住处において、すでに広く一実の道を分別せしかども、今

ところ

この処において」。

と い ふげんぎよう のち きよう と
問うて曰わく、普賢經の後に、いずれの經を説きたもう

や。

こた い ねはんぎよう と
答えて曰わく、涅槃經を説きたもうなり。

と い なに し
問うて曰わく、何をもつてこれを知るや。

こた い ふげんぎよう い さ のちみつ き われ
答えて曰わく、普賢經に云わく「却つて後三月あつて、我

まさ はんねはん

ねはんぎょうさんじゅう

い

によらい

なに

は当に般涅槃すべし」。涅槃經三十に云わく「如来は、何が

ゆえ ふたつき ねはん

い

によらい

しよしよう

故ぞ二月に涅槃したもうや」。また云わく「如来は初生・

しゅつけ じようどう てんみようほうりん みなようか

なん ほとけ

出家・成道・転妙法輪、皆八日をもつてしたもう。何ぞ仏

ねはんひと じゅうごにち

の涅槃独り十五日なるや」。

だいぶ きよう おおむね

いげ

もろもろ

大部の經、大概かくのごとし。これより已外の諸の

だいしようじようきよう しだいふじよう

あごんきよう

いご

大小乗經は次第不定なり。あるいは阿含經より已後に

けごんぎよう と

ほけきよう

いご

ほうどう

はんにや

と

みな ぎるい

華嚴經を説き、法華經より已後に方等・般若を説く。皆、義類

おさ

いつしよ

お

をもつてこれを収めて一処に置くべし。

だいに

しよきよう

せんじん

あ

第二に、諸經の浅深を明かさば、

むりようぎきよう

い

はじ

したい

あごん

と

つぎ

無量義経に云わく「初めに四諦〈阿含〉を説いて、次に

ほうどうじゅうにぶきよう

まかはんにな

けごんかいくう

と

ぼさつ

方等十二部経・摩訶般若・華嚴海空を説いて、菩薩の

りやつこうしゆぎよう

せんぜつ

い

しじゅうよねん

歴劫修行を宣説す」。また云わく「四十余年にはいまだ

しんじつ

あらわ

い

むりようぎきよう

そん

かじような

真実を顕さず」。また云わく「無量義経は、尊にして過上無

もん

しじゅうよねん

しよきよう

むりようぎきよう

し」。これらの文のごとくんば、四十余年の諸経は無量義経

おと

うたが

に劣ること疑いなきものなり。

と

い

みつごんぎよう

い

いつさいきよう

なか

すぐ

問うて曰わく、密嚴経に云わく「一切経の中に勝れた

だいうんぎよう

い

しよきよう

てんりんじようおう

こんこうみようきよう

り」。大雲経に云わく「諸経の転輪聖王なり」。金光明経

い

しよきよう

なか

おう

もん

み

に云わく「諸経の中の王なり」。これらの文を見るに、

しよだいじようきよう つね なら なん いちもん み むりようぎきよう

諸大乘経の常の習いなり。何ぞ、一文を瞻て、無量義経は

しじゅうよねん しよきよう すぐ い

四十余年の諸経に勝ると云うや。

こた い きようしゆしやくそん しよきよう

答えて云わく、教主釈尊、もし諸経において互いに

しようれつ と だいしようじよう さべつ ごんじつ ふどうあ

勝劣を説かずんば、大小乗の差別、権実の不同有るべか

じつ さべつな たが さべつ せんじんとう と

らず。もし実に差別無きに互いに差別・浅深等を説かば、

じようろん こんげん あくごうきざい いんねん

諍論の根源、悪業起罪の因縁なり。

にぜん しよきよう だいいち えん したが ふじよう

爾前の諸経の第一は、縁に随つて不定なり。あるいは

しようじよう しよきよう たい だいいち ほうしん じゆ と

小乗の諸経に対して第一、あるいは報身の寿を説くに

しよきよう だいいち ぞくたい しんたい ちゆうたいとう と だいいち

諸経の第一、あるいは俗諦・真諦・中諦等を説くに第一な

いつさい だいいち

いま むりようぎきよう

り、と。一切の第一にはあらず。今の無量義經のごときは、

しじゅうよねん しよきよう たい だいいち

四十余年の諸經に対して第一なり。

と い ほけきよう むりようぎきよう すぐ

問うて云わく、法華經と無量義經と、いずれか勝れたる

や。

こた い ほけきようすぐ

答えて云わく、法華經勝れたり。

と い なに し

問うて云わく、何をもつてこれを知るや。

こた い むりようぎきよう にじようさぶつ くおん

答えて云わく、無量義經には、いまだ二乗作仏と久遠

じつじよう あ ゆえ ほけきよう きら こんせつ なか い

実成とを明かさず。故に法華經に嫌われて今説の中に入る

なり。

と い ほけきよう ねはんぎよう すぐ
問うて云わく、法華經と涅槃經と、いずれか勝れたるや。

こた い ほけきようすぐ
答えて云わく、法華經勝れたるなり。

と い なに し
問うて曰わく、何をもつてこれを知るや。

こた い ねはんぎよう みずか ほつけ なか とう
答えて曰わく、涅槃經に自ら「法華の中のごとし」等と

と しよき な い ほけきよう とうせつ さ なんしん
説き「さらに所作無し」と云い、法華經に当説を指して難信

なんげ い ゆえ
難解と云わざるが故なり。

と い ねはんぎよう もん み
問うて云わく、涅槃經の文を見るに、涅槃經已前をば「皆

じゃけん い
邪見なり」と云う、いかん。

こた い ほけきよう によらい しゆつせ ほんかい ゆえ いま
答えて云わく、法華經は如来の出世の本懷なるが故に「今、

まんぞく

いままさ

とき

ぜん

すでに満足しぬ」「今正しくこれその時なり」「しかるに、善

なんし

われ

じつ

じょうぶつ

このかた

とう

と

男子よ、我は実に成仏してより已来」等と説く。ただし、

しよきよう

しやうれつ

ほとけみずか

わ

と

諸経の勝劣においては、仏自ら「我が説くところの

きようてん

むりようせんまんおく

あ

お

すで

と

いまと

經典は無量千万億なり」と挙げ了わって「已に説き、今説

まさ

と

とう

と

とき

たほうぶつ

ち

ゆげん

き、当に説くべし」等と説く時、多宝仏、地より涌現して

みな

しんじつ

さだ

ふんじん

しよぶつ

ぜつそう

ぼんてん

つ

「皆これ真実なり」と定め、分身の諸仏は舌相を梵天に付け

しよきよう

ほけきよう

しやうれつ

さだ

お

たもう。かくのごとく諸経と法華経との勝劣を定め了わ

ほか

しやかによらいいちぶつ

と

せんご

んぬ。この外は釈迦如来一仏の説くところなれば、先後の

しよきよう

たい

ほけきよう

しやうれつ

ろん

ゆえ

諸経に対して法華経の勝劣を論ずべきにあらず。故に、

ねはんぎよう しよきよう きら なか ほけきよう い ほけきよう しよきよう

涅槃經に諸經を嫌う中に法華經を入れず。法華經は諸經

すぐ よし あらわ ゆえ じゃけん もん

に勝るる由、これを顯すが故なり。ただし、「邪見」の文に

いた ほけきよう かくち いちるい ひと ねはんぎよう き さと

至つては、法華經を覺知せざる一類の人、涅槃經を聞いて悟

う ゆえ かしようどうじじしん しいん さ

りを得るが故に、迦葉童子自身ならびに所引を指して、

ねはんぎよう いぜん じゃけん とう い きよう しようれつ ろん

涅槃經より已前を「邪見」等と云うなり。經の勝劣を論ず

るにはあらず。

だいさん だいしようじよう さだ あ

第三に、大小乗を定むることを明かさば、

と い だいしようじよう さべつ

問うて曰わく、大小乗の差別いかん。

こた い じようず せつ あごんぶ しよきよう

答えて云わく、常途の説のごとくんば、阿含部の諸經は

しようじよう

けごん

ほうどう

はんにや

ほつけ

ねはんとう

だいじよう

小乗なり。華嚴・方等・般若・法華・涅槃等は大乗なり。

ろっかい

あ

しようじよう

じっかい

あ

だいじよう

あるいは六界を明かすは小乗、十界を明かすは大乗なり。

ほか

ほけきよう

たい

じつぎ

ろん

とき

ほけきよう

ほか

その外、法華經に對して実義を論ずる時、法華經より外の

しじゆうよねん

しよだいじようきよう

みなしようじよう

ほけきよう

だいじよう

四十余年の諸大乘經は皆小乗にして、法華經は大乗な

り。

と

い

しよしゆう

わた

わよ

きよう

問うて云わく、諸宗に亘つて、我が拠るところの經を

じつだいじよう

い

よしゆう

よ

きよう

ごんだいじよう

い

実大乘と謂い、余宗の拠るところの經を權大乘と云うこ

つね

なら

まつかく

ぜひさだ

がた

と、常の習いなり。末學においては是非定め難し。いまだ

ほけきよう

たい

しよだいじようきよう

しようじよう

しyou

もんち

法華經に對して諸大乘經を小乗と稱することを聞知

しようもん

せず。証文いかん。

こた

い

しゅうじゅう

りゅうぎ

たが

ぜ ひ

ろん

答えて云わく、宗々の立義、互いには是非を論ず。なか

まっぼう

せけん

しゅつせ

ひ

さき

ぜ

んずく末法において、世間・出世について非を先とし、是を

のち

みずか

ぜ ひ

し

ぐしや

なげ

後とす。自らは是非を知らざるは愚者の歎くべきところなり。

われ

ち

しじゅうよねん

げんもん

み

ただし、しばらく我らが智をもつて四十余年の現文を看る

もん

は

もん

ひと

ぜ ひ

しんよう

に、この文を破する文無ければ、人の是非を信用すべから

うえ

ほけきよう

たい

しよだいじようきよう

しようじよう

ざるなり。その上、法華経に対して諸大乘経を小乗と

しよう

じとう

そん

ほけきよう

ほうべんぼん

称することは、自答を存すべきにあらず。法華経の方便品

い

ほとけ

みずか

だいじよう

じゅう

ないしみずか

に云わく「仏は自ら大乘に住したまえり乃至自ら

むじようどう

だいじようびようどう

ほう

しよう

しようじよう

無上道・大乘平等の法を証して、もし小乗をもつて

ないしいちにん

け

われ

すなわ

けんどん

だ

こと

乃至一人をも化せば、我は則ち慳貪に墮せん。この事は

ふか

もん

こころ

ほけきよう

ほか

しよきよう

みな

不可となす」。この文の意は、法華経より外の諸経を皆

しようじよう

と

じゆりようほん

い

しようぼう

ねが

小乗と説けるなり。また寿量品に云わく「小法を樂う」。

もん

ほけきよう

ほか

しじゆうよねん

しよきよう

みな

これらの文は、法華経より外の四十余年の諸経をば皆

しようじよう

と

てんだい

みようらく

しやく

しじゆうよねん

小乗と説けるなり。天台・妙楽の釈において四十余年の

しよきよう

しようじよう

しやく

たし

ゆる

ゆえ

諸経を小乗と釈すとも、他師これを許すべからず。故に、

きようもん

い

ただ經文を出だすなり。

だいし

ごんきよう

さしお

じつきよう

つ

あ

第四に、しばらく権経を閣いて実経に就くことを明か

さば、

と しょうもん

問うて曰わく、証文いかん。

こた じゆう しょうもん あ

答えて曰わく、十の証文有り。法華經に云わく「ただ樂

だいじようきようてん じゆじ

つて大乘經典を受持するのみにして、乃至、余經の一偈を

う いち

も受けざれ」へこれ一。

ねはんぎよう い りようぎきよう よ

涅槃經に云わく「了義經に依つて不了義經に依らざれ」

しじゆうよねん ふりようぎきよう い

へ四十余年をば不了義經と云うへこれ二。

ほけきよう い きよう たも がた

法華經に云わく「この經は持ち難し。もししばらくも持

われ そく かんぎ しょうぶつ

たば、我は即ち歡喜す。諸仏もまたしかなり。かくのごと

ひと　しよぶつ　ほ

すなわ　ゆうみよう

きの人は、諸仏の歎めたもうところなり。これは則ち勇猛

すなわ　しろうじん

かい　たも

ずだ　ぎよう

なり。これは則ち精進なり。これを戒を持ち、頭陀を行

もの　な

まつだい

しじゅうよねん

じかい　な

ずる者と名づく」〈末代においては、四十余年の持戒無し。

ほけきよう　たも

じかい

さん

ただ法華經を持つを持戒となす〉〈これ三〉。

ねはんぎよう

い

じよう

かん

もの

すなわ

な

涅槃經に云わく「乗において緩なる者は乃ち名づけて

かん

かい

かん

もの

な

かん

ぼさつ

緩となす。戒において緩なる者は名づけて緩となさず。菩薩

まかさつ

だいじよう

こころけまん

ぶかい

摩訶薩よ。この大乘において心懈慢せずんば、これを奉戒

な

しろうほう

まも

だいじよう

みず

みずか

と名づく。正法を護らんがために、大乘の水をもつて自

そうよく

ゆえ

ぼさつ

はかい

げん

な

ら澡浴す。この故に、菩薩は破戒を現ずといえども、名づ

けて緩かんとなさず」もん〈この文は、法華經の戒ほけきようを流通かいする文るつうなり〉もん

〈これ四し〉。

ほけきようだいし

い

みようほけきようないしみな

しんじつ

法華經第四に云わく「妙法華經乃至皆これ眞実なり」〈こ

もん

たほう

しょうみよう

ご

の文は、多宝の証明なり〉〈これ五〉。

ほけきようだいしはち

ふげんぼさつ

ちか

い

によらいめつ

のち

法華經第八の普賢菩薩の誓いに云わく「如来滅して後に

えんぶだい

うち

ひろ

るふ

だんぜつ

において、閻浮提の内に、広く流布せしめて、断絶せざらし

ろく

めん」〈これ六〉。

ほけきようだいしち

い

われめつど

のち

のち

ごひやくさい

うち

法華經第七に云わく「我滅度して後、後の五百歳の中、

えんぶだい

だんぜつ

しやかによらい

ちか

閻浮提に断絶せしむることなけん」〈釈迦如来の誓いなり〉

しち

〈これ七〉。

ほけきようだいし

たほう

じつぼうしよぶつ

らいじゅう

いしゆ

と

法華經第四に多宝ならびに十方諸仏の来集の意趣を説

い

ほう

ひき

じゅう

ゆえ

いて云わく「法をして久しく住せしめんが故に、ここに

らいし

はち

来至したまえり」〈これ八〉。

ほけきようだいしち

ほけきよう

ぎよう

もの

じゅうしゆ

と

い

法華經第七に法華經を行ずる者の住处を説いて云わく

によらいめつ

のち

まさ

いっしん

じゆじ

どく

じゆ

げせつ

「如来滅して後において、応当に一心に受持・読・誦・解説・

しよしや

せつ

しゆぎよう

あ

こくど

ないし

書写し、説のごとく修行すべし。在るところの国土に乃至

きようかん

じゅう

ところ

おんちゅう

もし經卷の住するところの処ならば、もしは園中にお

りんちゅう

じゆ

もと

いても、もしは林中においても、もしは樹の下においても、

そうぼう

びやくえ いえ

でんどう

もしは僧坊においても、もしは白衣の舎にても、もしは殿堂

あ

せんごくこうや

なか みなまさ とう た

に在っても、もしは山谷曠野にても、この中に皆応に塔を起

くよう

ゆえん

まさ し

ところ

てて供養すべし。所以はいかん。当に知るべし、この処は

すなわ

どうじよう

しよぶつ

即ちこれ道場なればなり。諸仏はここにおいて

あのくたらさんみやくさんぼだい

え

く

阿耨多羅三藐三菩提を得たもう」へこれ九。

ほけきよう

るつう

ねはんぎよう

だいく

い

われねはん

のち

法華經の流通たる涅槃經の第九に云わく「我涅槃して後、

しようほう

めつ

はちじゅうねん

あま

とき

きよう

正法いまだ滅せず。八十年を余す。その時、この經、

えんぶだい

まさ

ひろ

る ふ

とき

まさ

もろもろ

あく

閻浮提において当に広く流布すべし。この時、当に諸の悪

びく あ

きよう

しよりやく

わ

たぶん

な

よ

比丘有つて、この經を抄掠し、分かちて多分と作し、能

しようほう しきこう み めつ

もろもろ あくにん

く正法の色香味美を滅すべし。この諸の悪人、またかく

きようてん どくじゆ

によらい じんみつ ようぎ めつ

のごとき經典を読誦すといえども、如来の深密の要義を滅

じよ せけん しょうこん もんじき むぎ ことば あんち さき と

除して世間の莊嚴の文飾・無義の語を安置す。前を抄つ

あと っ あと と さき っ ぜんご なか っ なか

て後に著け、後を抄つて前に著け、前後を中に著け、中を

ぜんご っ まさ し もろもろ あくびく

前後に著けん。当に知るべし、かくのごとき諸の悪比丘は、

ま ばんりよ ないしたと もくごによ おお みず にゆう くわ

これ魔の伴侶なり乃至譬えば牧牛女の多く水を乳に加う

もろもろ あくびく まじ

るがごとく、諸の悪比丘もまたかくのごとし。雑うるに

せご あやま きよう さだ おお しゆじよう

世語をもつてし、錯つてこの経を定む。多くの衆生をし

しょうせつ しょうしゃ しょうしゆ そんちよう さんだん くよう くぎよう

て正説・正写・正取・尊重・讃歎・供養・恭敬するこ

え

あくびく

りよう

ゆえ

きよう

とを得ざらしむ。この悪比丘は、利養のための故に、この経

こうせんるふ

あた

ぶんる

すく

を広宣流布すること能わず。分流すべきところ、少なきこ

いた

か

もくご

びんぐ

によにん

てんでん

にゆう

う

と言うに足らず。彼の牧牛の貧窮の女人、展転して乳を売

ないしかゆ

な

にゆうみ

だいじようきようてん

り、乃至糜と成すに乳味無きがごとし。この大乘經典の

だいねはんぎよう

てんでん

はくたん

きみあ

大涅槃経もまたかくのごとし。展転して薄淡にして気味有

きみな

よきよう

すぐ

ることなし。気味無しといえども、なお余経に勝るること

いっせんばい

か

にゆうみ

もろもろ

くみ

せんばいすぐ

これ一千倍なること、彼の乳味の諸の苦味より千倍勝る

なに

ゆえ

だいじようきようてん

となすがごとし。何をもつての故に。この大乘經典の

だいねはんぎよう

しyouもん

きよう

もつと

じようしゆ

大涅槃経は声聞の経において最も上首となせばなり」

〈これ十〉。

と

い

ふりようぎよう

す

りようぎきよう

つ

問うて云わく、不了義經を捨てて了義經に就けば、

だいえんかくしゆたらりようぎきよう

だいぶつちようによらいみっちんしゆしよりようぎきよう

大円覚修多羅了義經・大仏頂如来密因修証了義經、か

しよだいじようきよう

みな

りようぎきよう

えゆう

くのごとき諸大乘經は皆、了義經なり。依用となすべき

や。

こた

い

りようぎ

ふりようぎ

しよたい

したが

ふどう

答えて曰わく、了義・不了義は、所対に随つて不同なり。

にじよう

ぼさつとう

しよせつ

ふりようぎ

たい

いちだい

ぶつせつ

みな

二乗・菩薩等の所説の不了義に対すれば、一代の仏説は皆

りようぎ

ぶつせつ

しようじようきよう

ふりようぎ

だいじようきよう

了義なり。仏説について、また小乗經は不了義、大乘經

りようぎ

だいじよう

しじゆうよねん

しよきよう

は了義なり。大乘について、また四十余年の諸經は

ふりようぎきよう ほつけ ねはん だいにちききようとう りようぎきよう

不了義經、法華・涅槃・大日經等は了義經なり。しかる

えんかく だいぶつちようとう しよききよう しようじよう りやつこうしゆぎきよう

に、円覚・大仏頂等の諸經は、小乗および歷劫修行の

ふりようぎきよう たい りようぎききよう ほけききよう りようぎ

不了義經に対すれば了義經なり。法華經のごとき了義には

あらざるなり。

と い けごん ほつそう さんろんとう てんだい しんごん いげ

問うて曰わく、華嚴・法相・三論等の、天台・真言より以外

しよしゆう こうそ おのおの えびよう きようぎきよう よ

の諸宗の高祖、各その依憑の經々に依つて、その

きようぎきよう じんぎ きわ ほつ

經々の深義を極めんと欲す。これしかるべしや、いかん。

こた い けごんしゆう けごんぎききよう よ しよききよう

答えて云わく、華嚴宗のごときは、華嚴經に依つて諸經

はん けごんぎききよう ほうべん ほつそうしゆう

を判じて華嚴經の方便となすなり。法相宗のごときは、

あごん はんをやとう いや けごん ほつけ ねはん じんみつきよう

阿含・般若等を卑しめ、華嚴・法華・涅槃をもつて深密經

どう おな ちゆうどうきよう た ほつけ ねはん

に同じて同じく中道教と立つといえども、また法華・涅槃

いちるい いちじよう と ゆえ ふりようぎきよう じんみつきよう

は一類の一乗を説くが故に不了義經なり、深密經には

ごしようかくべつ そんな ゆえ りようぎきよう た さんろんしゆう

五性各別を存するが故に了義經と立つるなり。三論宗の

にぞう た いちだい おさ だいじよう せんじん

ごときは、二藏を立てて一代を摂め、大乘において浅深を

ろん はんをやきよう えびよう

論ぜず。しかるに般若經をもつて依憑となす。これらの

しよしゆう こうそ たぶん し え ぼさつ さだ しよぞんあ

諸宗の高祖、多分は四依の菩薩なるか。定めて所存有らん。

ぜ ひ およ

是非に及ばず。

じしん うたが は

しかりといえども、自身の疑いを晴らさんがために、し

にんし いげ さしお しよしゅう えびよう きょうぎよう ひら み
ばらく人師の異解を閣いて諸宗の依憑の経々を開き見
るに、華嚴経は旧訳は五十・六十、新訳は八十・四十な
り。その中に、法華・涅槃のごとく一代聖教を集めて方便
となす文無し。四乗を説くといえども、その中の仏乗にお
いて十界互具・久遠実成を説かず。ただし、人師に至つて
は五教を立てて、先の四教に諸経を収めて華嚴経の方便と
なす。

ほつそうしゅう

さんじきよう た

とき ほつけとう

法相宗のごときは、三時教を立つる時、法華等をもつて
じんみつぎよう どう

じんみつぎようごかん ひら み まった

深密経に同ずといえども、深密経五卷を開き見るに、全

ほつけとう

ちゅうどう

うち

い

く法華等をもつて中道の内に入れず。

さんろんしゅう

にぞう

た

とき

ぼさつぞう

三論宗のごときは、一二藏を立つる時、菩薩藏において

けごん

ほつけとう

おさ

はんにやきよう

どう

しんこ

華嚴・法華等を収めて般若経に同ずといえども、新古の

だいはんにやきよう

ひら

み

まった

だいはんにや

ほつけ

ねはん

大般若経を開き見るに、全く大般若をもつて法華・涅槃に

どう

もんな

けごん

とんぎよう

ほつけ

ぜんきよう

とう

にんし

同ずる文無し。「華嚴は頓教、法華は漸教」等とは、人師

いぎよう

ぶっせつ

の意樂にして仏説にあらざるなり。

ほけきよう

じよぶん

むりようぎきよう

しじゅうよねん

法華経のごときは、序分の無量義経に、たしかに四十余年

ねんげん

あ

けごん

ほうどう

はんにやとう

だいぶ

しよきよう

だいまよう

の年限を挙げ、華嚴・方等・般若等の大部の諸経の題名を

よ

しんじつ

あらわ

さだ

しやうしゅう

ほけきよう

呼んで「いまだ真実を顕さず」と定め、正宗の法華経に

いた いちだい しょうれつ さだ とき わ と きょうてん

至つて一代の勝劣を定むる時「我が説くところの經典は

むりようせんまんおく すで と いまと まさ と きんげん

無量千万億にして、已に説き、今説き、当に説くべし」の金言

は なか ほけきよう もつと

を吐いて「しかもその中において、この法華経は最もこれ

なんしんなんげ と とき たほうによらい ち ゆじゆつ

難信難解なり」と説きたもう時、多宝如来、地より涌出し

みようほけきようないしみな しんじつ しょうじよう ふんじん しょうぶつ

て「妙法華経乃至皆これ真実なり」と証誠し、分身の諸仏、

じつぼう いっしょ あつ した ぼんてん っ

十方よりことごとく一処に集まつて舌を梵天に付けたもう。

いま ぎ よすいさつ くわ とうど にほん わた

今この義をもつて余推察を加うるに、唐土・日本に渡れ

ごせん しちせんよかん しょうきよう いげ てんじく りゆうぐう し

るところの五千・七千余巻の諸経、以外の天竺・竜宮・四

おうてん かこ しちぶつとう しょうきよう あなん みけつじゆう きよう

王天・過去の七仏等の諸経、ならびに阿難の未結集の経、

じつぽうせかい ちり どう しょきよう しょうれつ せんじん なんい しょうちゆう

十方世界の塵に同ずる諸経の、勝劣・浅深・難易、掌中

あ むりようせんまんおく なか しゃかによらい と

に在り。「無量千万億」の中に、あに釈迦如来の説くところ

しょきようも いせつ こんせつ とうせつ ねんげん い

の諸経漏らすべけんや。已説・今説・当説の年限に入らざ

しょきよう あ ねが まっだい しょにん

る諸経これ有るべきや。願わくは末代の諸人、しばらく

しょしゆう こうそ じゃくもん むぎ さしお しゃか たほう じつぽう

諸宗の高祖の弱文・無義を閣いて、釈迦・多宝・十方の

しょぶつ ごうもん うぎ しん しょしゆう まつがく

諸仏の強文・有義を信ずべし。いかにいわんや、諸宗の末学

へんしゆう さき まっだい ぐしや にんし ほん きようろん

の偏執を先となし末代の愚者の人師を本となして経論を

なげう もの えびよう ゆえ ほつけ るつう そうりんさいご

抛つ者に依憑すべきや。故に、法華の流通たる双林最後の

ねはんぎよう ほとけ かしようどうじぼさつ ゆいごん のたま ほう よ

涅槃経に、仏、迦葉童子菩薩に遺言して言わく「法に依つ

て人にんに依よらざれ。義ぎに依よつて語ごに依よらざれ。智ちに依よつて識しきに

依よらざれ。了義經りようぎきように依よつて不ふ了義經りようぎきように依よらざれ」云々。うんぬん

予よ、世間せけんを見聞けんもんするに、自宗じしゅうの人師にんしをもつて「三昧さんまい発得はつとく・

智慧第一ちえだいいち」と称たたうれども、無德むとくの凡夫ぼんぷにして実經じつきように依よつて

法門ほうもんを信しんぜしめず、不ふ了義りようぎの觀經等かんぎようとうをもつて時機じき相応そうおうの教おし

えと称たたえ、了義りようぎの法華ほつけ・涅槃ねはんを閣さしおき譏そしつて理深解微りじんげみの失とがを

付つく。如來にょらいの遺言ゆいごんに背そむいて「人にんに依よつて法ほうに依よらざれ。語ことば

に依よつて義ぎに依よらざれ。識しきに依よつて智ちに依よらざれ。不ふ了義經りようぎきよう

に依よつて了義經りようぎきように依よらざれ」と談だんずるにあらずや。請こい願ねが

わくは、心有らん人は思惟を加えよ。

によらい にゆうめつ すで にせんにひやくよ せいそう おく もんじゅ

如来の入滅は既に二千二百余の星霜を送れり。文殊・

かしよう あなん きよう けつじゆう いご しえ ぼきつ かき

迦葉・阿難、経を結集してより已後、四依の菩薩は重ね

よ い ろん つく きよう こころ の まつ ろんじ いた

て世に出でて、論を造り、経の意を申ぶ。末の論師に至つ

ようや あやま しゅつたい やくしや ぼんかん

て漸く誤り出来す。また訳者においても、梵漢にいまだ

たつ もの ごんきよう しゆくじゆう ひとあ じつ きようろん ぎ ま

達せざる者、権教の宿習の人有つて、実の経論の義を曲

ごん きようろん ぎ そん っ とうど

げて権の経論の義を存せり。これに就いて、また唐土の

にんし かこ ごんきよう しゆくじゆう ゆえ ごん きようろんこころ かな

人師は、過去の権教の宿習の故に権の経論心に叶うあ

じつ きようろん もち すこ じぎ たが もんあ

いだ、実の経論を用いず。あるいは少し自義に違ふ文有れ

ば、理りを曲まげて会通えつうを構かまえ、もつて自身じしんの義ぎに叶かなわしむ。

のち どうり おも

みょうり

たとい後に道理だんなと念きえうといえども、あるいは名利ごんしゅうにより、

す

じつしゅう

い

あるいは檀那だんなの帰依きえによつて、權宗ごんしゅうを捨てて実宗じつしゅうに入いら

せけん どうぞく

むち

ゆえ

りひ

わきま

にん

ず。世間の道俗よ ほう、また無智よの故に理非あくほうを弁あえず、ただ人たにんに

よ ほう

あくほう

たにん

じやぎ

依よつて法ほうに依よらず。たとい惡法あくほうたりといえども、多人たにんの邪義じやぎ

したが

いちにん

じつせつ

よ

に随したがつて一人いちにんの実說じつせつに依よらず。

しゅじょう

き

おお

るてん

したが

しゅつり

しかるに、衆生しゅじょうの機き、多くは流轉おほに随るてんう。たとい出離しゅつりを

もと

たぶん

ごんきやう

よ

うら

あくごう

求もとむとも、また多分たぶんは權經ごんきやうに依よる。ただ恨うらむらくは惡業あくごうの

み ぜん っ あく っ しょうじ はな が

身み、善ぜんに付け惡あくに付け生死しょうじを離はなれ難がきのみ。しかりといえ

ども、今の世の一切の凡夫、たとい今生を損ずといえども、

かみ い ねはんぎようだいく もん よ

上に出だすところの涅槃經第九の文に依つて、しばらく

ほつけ ねはん しん ゆえ せけん あき てんでん

法華・涅槃を信ぜよ。その故は、世間の浅きことすら、展転

おお とき きよ おお じつ すく ぶつぼう じんぎ

多き時は、虚は多く実は少なし。いわんや仏法の深義にお

によらい めつごにせんよねん あいだ ぶつきよう じゃぎ そ きた

いてをや。如来の滅後二千余年の間、仏經に邪義を副え来

まん いち しょうぎな いちだい しょうぎよう たぶん あやま あ

れり。万に一も正義無きか。一代の聖教、多分は誤り有

しんじかんぎよう ほうにむろしゆじ しょうほけきよう ぞくるい

るか。ゆえに、心地觀經の法爾無漏種子、正法華經の嘱累の

きようまつ ばしやろん いちじゅうろくじ しょうろん しき はち く わ

經末、婆沙論の一十六字、撰論の識を八・九に分かつ、

ほつけろん みようほけきよう そうい ねはんろん ほつけ ぼんのう けが

法華論と妙法華經との相違、涅槃論の「法華は煩惱の汚す

ところなり」の文、法相宗の定性・無性の不成仏、

しょうろんしゅう ほけきよう ひと なむ とな べつじいしゅ

撰論宗の法華経の「一たび南無と称う」の別時意趣、こ

みな やくしや にんし あやま ほか

れらは皆、訳者・人師の誤りなり。この外に、また四十余年

きようぎよう おお あやま あ ほつけ ねはん

の経々において多くの誤り有るか。たとい法華・涅槃に

あやま あ あやま な しじゅうよねん しよきよう す

おいて誤り有るも誤り無きも、四十余年の諸経を捨てて

ほつけ ねはん したが しょう かみ い お

法華・涅槃に随うべし。その証、上に出だし了わんぬ。

あやま あ しよきよう しんじん いた もの しょうじ はな

いわんや、誤り有る諸経において信心を致す者、生死を離

るべしや。

だいもん だいに しょうぞうまつ ぶつぼう こうはい あ

大文の第二に、正像末について仏法の興廃有ることを明

かさば、これについて二つ有り。一には爾前四十余年の内の

しよきよう

じようどさんぶきよう

まつぼう

くじゆう

ふくじゆう

あ

諸経と浄土三部経との末法における久住・不久住を明かす。

に

ほつけ

ねはん

じようどさんぶきよう

しよきよう

くじゆう

二には法華・涅槃と浄土三部経ならびに諸経との久住・

ふくじゆう

あ

不久住を明かす。

だいいち

にぜんしじゆうよねん

うち

しよきよう

じようどさんぶきよう

まつぼう

第一に、爾前四十余年の内の諸経と浄土三部経との末法

くじゆう

ふくじゆう

における久住・不久住を明かさば、

と

い

によらい

きようほう

だいしよう

せんじん

しやうれつ

ろん

問うて云わく、如来の教法は、大小・浅深・勝劣を論

じき

よ

ぎよう

さだ

りやくあ

ぜず、ただ時機に依ってこれを行ぜば、定めて利益有るべ

げんごう

だいいじゅつ

だいいじゅうとう

しよきよう

み

きなり。しかるに、賢劫・大術・大集等の諸経を見るに、

ほとけ めつごにせんよねんいご ぶつぼうみなめつ

仏の滅後二千余年已後は仏法皆滅して、ただ教のみ有つ

ぎよう しょう あ

て行・証有るべからず。したがって、伝教大師の

まつぼうとうみようき

ひら

わ

えんりやくにじゅうねん かのとみ

末法灯明記を開くに「我が延暦二十年辛巳まで

いっせんしちひやくごじゅうさい

いっせつ

えんりやくにじゅうねん

いご

一千七百五十歳なり」へ一説なり。延暦二十年より已後、

しひやくごじゅうよさい

すで

まつぼう

い

きようほう あ

また四百五十余歳なり。既に末法に入れり。たとい教法有

ぎよう

しょうな

ぶつぼう

りといえども、行・証無けん。しかるにおいては、仏法を

ぎよう

もの

まん

いち

とくどう あ

がた

そうかんぎよう

行ずる者、万が一も得道有り難きか。しかるに、双観経の

とうらい

よ

きようどうめつじん

われじ ひ

あいみん

ひと

「当来の世、経道滅尽せんに、我慈悲・哀愍をもつて、特

きよう

とど

しじゅう

ひやくさい

りこの経のみを留めて、止住せんこと百歳ならん。それ

しゅじようあ

きよう

あ

こころ

ねが

したが

衆生有つてこの経に値わば、意の願うところに随つて

みなとくど

とう

もん

み

しやかによらいちだい

しようぎようみな

皆得度すべし」等の文を見るに、釈迦如来一代の聖教皆

めつじん

のち

ひと

そうかんぎよう

ねんぶつ

とど

しゅじよう

滅尽して後、ただ特り双観経の念仏のみを留めて衆生を

りやく

み

お

利益すべしと見え了わんぬ。

いしゅ

よ

じようどけ

しよし

しやく

かんが

この意趣に依つて、ほぼ浄土家の諸師の釈を勘うるに、

こころな

どうしやくぜんじ

とうこんまつぼう

ごじよくあく

その意無きにあらず。道綽禅師は「当今末法はこれ五濁悪

せ

じようど

いちもん

あ

つうにゆう

みち

世なり。ただ浄土の一門のみ有つて通入すべき路なり」と

か

ぜんどうおしょう

まんねん

さんぼうめつ

きよう

じゆう

書き、善導和尚は「万年に三宝滅し、この経のみ住する

ひやくねん

の

じおんだいし

まつぼうまんねん

よきよう

こと百年なり」と宣べ、慈恩大師は「末法万年に余経こと

ごとく滅し、めつ みだ いっきよう 弥陀の一教のみ、物を利することひとえに増ま

さん」と定め、日本国の叡山の先徳・恵心僧都は、一代聖教

の要文を集めて末代の指南を教うる往生要集の序に云わ

く「夫れ、往生極樂の教行は、濁世末代の目足なり。

道俗・貴賤、誰か歸せざる者あらん。ただし、顕密の教法、

その文、一つにあらず。事理の業因、その行これ多し。利

智・精進の人はいまだ難しとなさず、予がごとき頑魯の者、

あにあえてせんや」。乃至、次下に云わく「なかんずく念仏

の教えは、多く末代に経道滅尽して後の濁悪の衆生を利

はか

そう

しよしゆう

がくしや

むね

そん

する計らいなり」。総じて諸宗の学者もこの旨を存すべし。

こと

てんだいいっしゆう

がくしや

たれ

ぎ

そむ

殊に天台一宗の学者、誰かこの義に背くべけんや、いかん。

こた

い

にぜんしじゆうよねん

きようぎよう

おのおのじき

したが

答えて云わく、爾前四十余年の経々は各時機に随つ

こうはいあ

ゆえ

たぶん

じようどさんぶきよう

いぜん

めつじんあ

て興廃有るが故に、多分は浄土三部経より已前に滅尽有る

しよきよう

おお

さんじようげんしん

とくどう

と

ゆえ

べきか。諸経においては多く三乗現身の得道を説くが故

まつだい

げんしんとくどう

もの

すく

じつぼう

おうじよう

に、末代においては現身得道の者これ少なし。十方の往生

じようど

おお

まつだい

き

こうむ

さいほう

浄土は、多くは末代の機に蒙らしむ。これについて、西方

ごくらく

しやば

りんごん

ゆえ

さいげ

じようど

ゆえ

にちりん

極楽は娑婆に隣近なるが故に、最下の浄土なるが故に、日輪

ひがし

い

にし

ぼつ

ゆえ

しよきよう

おお

すす

東に出で西に没するが故に、諸経に多くこれを勧む。し

たがつて、浄土の祖師のみ独りこの義を勧むるにあらず、

てんだい みようらくとう にぜん きよう よ ひ すじ

天台・妙楽等もまた爾前の経に依る日はしばらくこの筋

あ ひと にんし りゆうじゆ てんじん こころ あ

有り。また独り人師のみにあらず、竜樹・天親もこの意有

いちぎ にんのうきようとう じようどさんぶきよう

り。これ一義なり。また仁王経等のごときは、浄土三部経

ひさ まつぼうまんねん のち はっせんねんじゆう

よりなお久しく、末法万年の後、八千年住すべしとなり。

ゆえ にぜん しよきよう いちじよう

故に、爾前の諸経においては一定なるべからず。

だいに ほつけ ねはん じようどさんぶきよう くじゆう ふくじゆう あ

第二に、法華・涅槃と浄土三部経との久住・不久住を明か

さば、

と い ほつけ ねはん じようどさんぶきよう さき

問うて云わく、法華・涅槃と浄土三部経と、いずれか先に

滅すべきや。^{めつ}

こた い ほつけ ねはん いぜん じようどさんぶきよう めつ
答えて云わく、法華・涅槃より已前に浄土三部経は滅す

べきなり。

と い なに し
問うて云わく、何をもつてこれを知るや。

こた い むりようぎきよう しじゅうよねん だいぶ しよきよう あ
答えて云わく、無量義経に四十余年の大部の諸経を挙げ

お しんじつ あらわ い ゆえ そうかんぎようとう
了わつて「いまだ真実を顕さず」と云うが故に、双観経等

ひと きよう とど ことば みな ほうべん こもう
の「特りこの経のみを留む」の言は皆、方便なり虚妄な

けこん ほうどう はん にや かんぎようとう そくしつ りやつこう おうじよう じようぶつ
り。華嚴・方等・般若・観経等の速疾・歴劫の往生・成仏

むりようぎきよう じつぎ かんが むりようむへん ぶ
は、無量義経の実義をもつてこれを檢うるに、「無量無辺不

かしぎあそうぎこう す

つい むじようぼだい じよう

可思議阿僧祇劫を過ぐるとも、終に無上菩提を成ずること

え ないしけんきよう い

るなんおお ゆえ きよう

を得ず乃至險逕を行くに、留難多きが故なり」の経なり。

おうじよう じようぶつ

べつ じいしゆ

だいじゆう そうかんぎようとう じゆうめつ

往生・成仏ともに別時意趣なり。大集・双観経等の住滅

せんご みな ずいぎ いっせつ

ほけきよう きた

まえ

の先後は皆、随宜の一説なり。法華経に來らざるより前は、

か げどう せつ おな

たと

こうが たいかい おもむ

みんしん

彼の外道の説に同じ。譬えば、江河の大海に趣かず、民臣

だいおう したが

み くる ぎよう な

の大王に随わざるがごとし。身を苦しめ行を作すとも、

ほつけ ねはん いた

いちぶん

りやくな ういんむか げどう

法華・涅槃に至らずんば一分の利益無く、有因無果の外道な

ざいせ めつご

きようあ

にんな

ぎようあ

しやうな

り。在世・滅後、ともに教有つて人無く、行有つて証無

しよもく か

しやうはく しほ

しゆそう ち

きなり。諸木は枯るといえども松柏は萎まず、衆草は散る

きくたけ　へん　ほけきよう

といえども菊竹は変ぜず。法華經もまたまたかくのごとし。

しやくそん　さんせつ　たほう　しようみよう　しよぶつ　ぜつそう　りようぼう

釈尊の三説、多宝の証明、諸仏の舌相、ひとえに令法

くじゆう　あ　ゆえ

久住に在るが故なり。

と　い　しよきようめつじん　のち　ひと　ほけきよう　とど

問うて云わく、諸經滅尽の後、特り法華經のみ留まるべ

しようもん

き証文いかん。

こた　い　ほけきよう　ほつしほん　しやくそんみずか　るつう

答えて云わく、法華經の法師品に釈尊自ら流通せしめ

のたま　わ　と　きようてん　むりようせんまんおく　すで

て云わく「我が説くところの經典は無量千万億にして、已

と　いま　と　まさ　と　なか

に説き、今説き、当に説くべし。しかもその中において、

ほけきよう　もつと　なんしんなんげ　うんぬん　もん　こころ

この法華經は最もこれ難信難解なり」云々。文の意は、

いちだいごじゆうねん

い

こん

とう

さんせつ

さいだいいち

きよう

一代五十年の已・今・当の三説において最第一の経なり。

はちまんしようぎよう

なか

こと

みらい

とど

ほつ

と

八万聖教の中に殊に未来に留めんと欲して説きたまいし

ゆえ

つぎ

ほん

たほうによらい

ち

ゆじゆつ

ふんじん

しよぶつ

なり。故に、次の品に多宝如来は地より涌出し、分身の諸仏

じつぼう

いつしよ

らいじゆう

しやかによらい

しよぶつ

おんつか

は十方より一処に来集し、釈迦如来は諸仏を御使いとして

はつぼう

しひやくまんおくなゆた

せかい

じゆうまん

ぼさつ

にじよう

八方の四百万億那由他の世界に充滿せる菩薩・二乗・

にんてん

はちぶとう

せ

たほうによらい

じつぼう

しよぶつ

人天・八部等を責めて「多宝如来ならびに十方の諸仏、

ゆじゆつ

らいじゆう

いしゆ

りようぼうくじゆう

おのおの

涌出・来集の意趣は、ひとえに令法久住のためなり。各

さんせつ

しよきようめつじん

のち

みらい

ごじよく

なんしん

せかい

三説の諸経滅尽の後、たしかに未来の五濁・難信の世界に

きよう

ひろ

せんごん

た

のたま

とき

においてこの経を弘めんと誓言を立てよ」と云える時に、

にまん ぼさつ はちじゅうまんおくな ゆた ぼさつ おののせいじよう た い

二万の菩薩、八十万億那由他の菩薩、各誓状を立てて云

われ しんみよう あい むじようどう お せん

わく「我は身命を愛せず、ただ無上道を惜しむのみ」。千

せかい みじん ぼさつ もんじゆとう みなちか い われ ほとけめつ

世界の微塵の菩薩、文殊等、皆誓つて云わく「我らは仏滅

のち ないしまさ ひろ きよう と うんぬん

して後において乃至当に広くこの経を説くべし」云々。そ

のち ほとけじゆうゆ あ だいいち たと せんるこうが

の後、仏十喩を挙げたもう。その第一の喩えは、川流江河

しじゆうよねん しよきよう たと ほけきよう たいかい たと

をもつて四十余年の諸経に譬え、法華経をもつて大海に譬

まつだいじよくあく むざん むき だいかんぼつ とき しみ せんるこうが

う。末代濁悪の無慙・無愧の大旱魃の時、四味の川流江河

は竭くといえども、法華経の大海は減少せず等と説き了わ

つぎしも まさ と のたま われめつど のち のち

つて、次下に正しく説いて云わく「我滅度して後、後の

つて、次下に正しく説いて云わく「我滅度して後、後の

ごひやくさい　うち　えんぶだい　こうせん　る　ふ　だんぜつ
五百歳の中、閻浮提に広宣流布して、断絶せしむることな

けん」と定め了わんぬ。
さだ　お

つらつら文の次第を案ずるに、「我滅度して後」の次の「後」
もん　しだい　あん　われめつど　のち　つぎ　のち

の字は、四十余年の諸経滅尽の後の「後」の字なり。故に、
じ　しじゅうよねん　しよきようめつじん　のち　のち　じ　ゆえ

法華經の流通たる涅槃經に云わく「応に無上の仏法をもつ
ほけきよう　るつう　ねはんぎよう　い　まさ　むじよう　ぶつぽう

て諸の菩薩に付すべし。諸の菩薩は、よくかくのごと
もろもろ　ぼさつ　ふ　もろもろ　ぼさつ

き法宝を問答すれば、則ち無量千世に久住し増益熾盛にし
ほうほう　もんどう　すなわ　むりようせんぜ　くじゆう　ぞうやくしじよう

て衆生を利安することを得るをもつてなり」已上。これら
しゅじよう　りあん　う　いじよう

の文のごとくんば、法華・涅槃は無量百歳にも絶ゆべから
もん　ほつけ　ねはん　むりようひやくさい　た

きよう

ぎし

せけん

がくしや

だいじゅうごんもん

ざる経なり。この義を知らざる世間の学者は、大集権門の

ごごひやくさい

もん

きよう

どう

じょうどさんぶきよう

「五の五百歳」の文をもつてこの経に同じ、浄土三部経よ

いぜんめつじん

りゅうぎそん

いつきよう

せんご

きじん

り已前に滅尽すべしと立義を存して、一経の先後・起尽を

わす

忘れたるなり。

と い

かみ あ

どんらん

どうしやく

ぜんどう

問うて云わく、上に挙ぐるところの曇鸞・道綽・善導・

えしんとうしよし

みな

ほっけ

しんごんとう

しよきよう

まつだい

恵心等の諸師は、皆、法華・真言等の諸経において末代

ふそうおうしやくつく

よ

げんくう

しよけ

不相応の釈を作る。これに依つて、源空ならびに所化の

でしほっけしんごんとう

ぞうぎよう

た

なんぎようどう

うと

弟子、法華・真言等をもつて雑行と立て、難行道と疎み、

ぎようじや

ぐんぞく

あくしゆ

あっけん

ひととう

の

そふ

行者をば群賊・悪衆・悪見の人等と罵り、あるいは祖父が

くつ るい しようこうぼう ことば げんかとう おと い

履に類し 〔聖光房の語〕、あるいは絃歌等にも劣ると云う

なむぼう ことば いしゆ たず じきふそうおう

〔南無房の語〕。その意趣を尋ねれば、ひとえに時機不相応

ぎ そんな ゆえ にんし しゃく

の義を存するが故なり。これらの人師の釈をば、いかにこ

え

れを会すべきや。

こた い しゃかによらいいちだいごじゅうねん せつきよう いちぶつ きんげん

答えて云わく、釈迦如来一代五十年の説教、一仏の金言

ごんじつにきよう わ ごんきよう す じつきよう い

において、権実二教を分かち、権経を捨てて実経に入ら

ぶつごけんねん ぶつじよう ほ

しむる仏語顯然たり。ここにおいて「もしただ仏乗を讃む

しゆじよう く もつ どうり おそ

るのみならば、衆生は苦に没す」の道理を恐れ、しばらく

しじゆうにねん ごんきよう と しようじよう

四十二年の権経を説くといえども、「もし小乗をもつて

ないしいちにん

け

われ

すなわ

けんどん

だ

とが

のが

乃至一人をも化せば、我は則ち慳貪に堕せん」の失を脱れ

だいじよう

い

ほん

ぎ
そん

んがために、「大乘に入るることを本となす」の義を存し、

ほんい

と

ほけきよう

と

本意を遂げ、法華經を説きたもう。

ねはんぎよう

いた

われめつど

かなら

しえ

い

しかるに、涅槃經に至つて、我滅度せば必ず四依を出だ

ごんじつにきよう

ぐつう

やくそく

お

ゆえ

して權実二教を弘通せしめんと約束し了わんぬ。故に、

りゆうじゆぼさつ

によらい

めつごはつぴやくねん

よ

い

じゆうじゆうびばしや

竜樹菩薩は如来の滅後八百年に世に出で、十住毘婆沙

とう ごんろん

つく

けごん

ほうどう

はんにやとう

こころ

の

だいろん

等の權論を造つて華嚴・方等・般若等の意を宣べ、大論を

つく

はんにや

ほつけ

さべつ

わ

てんじんぼさつ

によらい

めつご

造つて般若・法華の差別を分かち、天親菩薩は如来の滅後

くひやくねん

よ

い

くしやろん

つく

しやうじよう

こころ

の

九百年に世に出で、俱舍論を造つて小乗の意を宣べ、

ゆいしきろん つく ほうどうぶ こころ の さいご ぶつしようろん つく

唯識論を造つて方等部の意を宣べ、最後に仏性論を造つ

ほつけ ねはん こころ の りようきよう ふりようきよう わ

て法華・涅槃の意を宣べ、了教・不了教を分かちて、

ほとけ ゆいごん たが まつ ろんじ やくしや とき いた

あえて仏の遺言に違わず。末の論師ならびに訳者の時に至

いつこう ごんきよう しゅう ゆえ じつきよう え ごんきよう

つては、一向に権経に執するが故に、実経を会して権経

い ごんじつぞうらん とがしゅつたい にんし とき いた

に入れ、権実雑乱の失出来せり。また人師の時に至つては、

おのおのえびよう きよう ほん ゆえ よきよう

各 依憑の経をもつて本となすが故に、余経をもつて

ごんきよう ぶつ い そむ

権経となす。これよりいよいよ仏意に背く。

じようど さんし らん しゃく にし じゅうじゅう

しかるに、浄土の三師においては、鸞・綽の二師は十住

びばしやろん よ なんい しょうじよう にどう た ほんろん い

毘婆沙論に依つて難易・聖浄の二道を立つ。もし本論に違

ほつけ しんごんとう

なんい うち

い

しんよう

およ

して法華・真言等をもつて難易の内に入れば、信用に及ば

じょうどろんちゆう

あんらくしゆう

み

たぶん

じ。したがって、浄土論註ならびに安樂集を見るに、多分

ほんろん

こころ

たが

ぜんどうおしょう

じょうどさんぶきよう

よ

は本論の意に違わず。善導和尚はまた浄土三部經に依つて

みだしようみようとう

いちぎよういちがん

おうじよう

た

とき

りよう

ちん

ずい

弥陀称名等の一行一願の往生を立つる時、梁・陳・隋・

とう

しだい

しょうろんじ

そう

いちだいししょうぎよう

べつじいしゆ

唐の四代の撰論師は総じて一代聖教をもつて別時意趣と

さだ

ぜんどうおしょう

ぞんねん

い

ゆえ

しょうろんじ

は

とき

定む。善導和尚の存念に違するが故に、撰論師を破する時、

か

ひと

ぐんぞくとう

たと

じゆんじおうじよう

くどく

ぬす

ゆえ

彼の人を群賊等に譬う。順次往生の功德を賊むが故に。そ

しよぎよう

ぞうぎよう

しよう

かなら

まんぎよう

おうじよう

そかい

の所行を雜行と称す。必ず万行をもつて往生の素懷

と

ゆえ

ひと

せ

とき

せんちゆうむいち

きら

を遂ぐるが故に。この人を責むる時に千中無一と嫌えり。

この故に、善導和尚も難行の言の中にあえて法華・真言等
を入れず。

にほんこく げんしんそうず

日本国の源信僧都は、また叡山第十八代の座主・慈恵

だいし みでし おお

しよ つく

みな ほっけ ひろ

大師の御弟子なり。多くの書を造れることは、皆、法華を弘

おうじようようしゅう つく こころ

にぜん

めんがためなり。しかるに、往生要集を造る意は、爾前

しじゅうよねん しよきよう

おうじよう じようぶつ

にぎあ

じようぶつ

四十余年の諸経において往生・成仏の二義有り。成仏の

なんぎよう たい

おうじよういぎよう

ぎ そん

おうじよう

ごう

なか

難行に対して往生易行の義を存し、往生の業の中におい

ぼだいしんかんねん ねんぶつ

さいじよう

ゆえ

だいもんだいじゅう

て菩提心観念の念仏をもつて最上となす。故に、大文第十

もんどうりようけん

なか

だいしち

しよきようしようれつもん

ねんぶつ

の問答料簡の中、第七の諸行勝劣門においては、念仏を

さいしやう

つぎしも

に ぜんさいしやう

ねんぶつ

もつて最勝となし、次下に爾前最勝の念仏をもつて

ほけきやう

いちねんしんげ

くどく

たい

しやうれつ

はん

とき

いちねんしん

法華經の一念信解の功德に対して勝劣を判ずる時、一念信

げ くどく

ねんぶつざんまい

すぐ

ひやくせんまんばい

さだ

解の功德は念仏三昧より勝るること百千万倍なりと定め

まさ し

おうじやうようしゆう

こころ

に ぜんさいじやう

たまえり。当に知るべし、往生要集の意は、爾前最上の

ねんぶつ

ほつけさいげ

くどく

たい

ひと

ほけきやう

念仏をもつて法華最下の功德に対して、人をして法華經に

い

つく

しよ

ゆえ

おうじやうようしゆう

入らしめんがために造るところの書なり。故に、往生要集

のち

いちじやうようけつ

つく

じしん

ないしやう

の

とき

ほけきやう

の後に一乗要決を造つて自身の内証を述ぶる時、法華經

ほんい

をもつて本意となすなり。

げんくう

しよけ

しゆ

ぎ

し

ゆえ

しかるに、源空ならびに所化の衆、この義を知らざるが故

ほつけ しんごん

さんし

げんしんは

に、法華・真言をもつて三師ならびに源信破するところの

なん しょう ぞう

おうじょうようしゅう

じよ

けんみつ

なか い

難・聖・雑ならびに往生要集の序の顕密の中に入れて、

さんし げんしん

ほつけ

しんごん

ほうぼう

ひと な

うえ

三師ならびに源信を法華・真言の謗法の人と作す。その上、

にほんこく

いつさい

どうぞく

け

ほつけ

しんごん

じき

日本国の一切の道俗を化して、法華・真言において時機

ふそうおう

むね

なら

ざいけ

しゅつけ

しよにん

ほつけ

不相応の旨を習わしめ、在家・出家の諸人において法華・

しんごん

けちえん

とど

ほとけ

しる

あくせ

真言の結縁を留む。あに、仏の記したもうところの「悪せ

なか

びく

じゃち

くろてんく

ひと

の中の比丘は、邪智にして心諂曲なり」の人にあらずや。

すなわ

いつさいせけん

ぶつしゆ

だん

とが

まぬか

また「則ち一切世間の仏種を断ぜん」の失を免るべけん

や。

うえ　さんもん　じもん　とうじ　てんだい

にほんこくじゅう

その上、山門・寺門・東寺・天台ならびに日本国中に

ほつけ　しんごんとう　なら　しよにん　ぐんぞく　あくしゅ　あつけん　ひと　とう

法華・真言等を習う諸人を「群賊」「悪衆」「悪見の人」等に

たと　げんくう　じゅうざい　こう　くか　へつ

譬うる源空が重罪、いずれの劫にかその苦果を経尽くすべ

ほけきよう　ほつしほん　じきようしゃ　の　つみ　と　い

きや。法華經の法師品に持經者を罵る罪を説いて云わく「も

あくにんあ　ふぜん　こころ　いっこう　なか

し悪人有つて、不善の心をもつて、一劫の中において、現

ぶつぜん　つね　ほとけ　きめ　つみ　かる

に仏前において、常に仏を毀罵せば、その罪はなお輕し。

ひと　ひと　あくごん　ざいけ　しゅつけ　ほけきよう　どくじゅ

もし人、一つの悪言をもつて、在家・出家の法華經を讀誦す

もの　きし　つみ　おも　いじよう　きようもん

る者を毀訾せば、その罪ははなはだ重し」〔已上、經文〕。

いちにん　じしゃ　の　つみ　しよ

一人の持者を罵る罪すら、なおかくのごとし。いわんや書を

つく にほんこく しよにん

の つみ

造り、日本国の諸人をして罵らしむる罪をや。いかにいわ

きよう せんちゆうむいち さだ

ほけきよう ぎよう ひと

んや、この経を千中無一と定めて、法華經を行ずる人に

うたが しよう つみ きよう す

疑いを生ぜしむる罪をや。いかにいわんや、この経を捨

かんぎようとう ごんきよう うつ ほうぼう つみ ねが

てて觀經等の権經に遷らしむる謗法の罪をや。願わくは、

いっさい げんくう しよけ ししゆ とみ せんちやくしゆう じやほう す

一切の源空が所化の四衆よ、頓に選択集の邪法を捨てて

ほけきよう うつ こんどあび ほのお のが

たちまちに法華經に遷り、今度阿鼻の炎を脱れよ。

と い まさ げんくう ほけきよう ひぼう しようもん

問うて云わく、正しく源空が法華經を誹謗する証文いか

ん。

こた い ほけきよう だいに い ひとしん

答えて云わく、法華經の第二に云わく「もし人信ぜずし

て、この経を毀謗せば、則ち一切世間の仏種を断ぜん」
きよう きぼう すなわ いっさいせけん ぶつしゆ だん

〈经文〉。不信の相貌は、人をして法華経を捨てしむれば
きようもん ふしん そうみよう ひと ほけきよう す

なり。故に、天親菩薩の仏性論の第一にこの文を釈して云
ゆえ てんじんぼさつ ぶつしようろん だいいち もん しゃく い

わく「もし大乘に憎背せば、これはこれ一闡提の因なり。
だいじよう ぞうはい いっせんだい いん

衆生をしてこの法を捨てしむるがための故に」〈論文〉。
しゆじよう ほう す ゆえ ろんもん

謗法の相貌は、この法を捨てしむるが故なり。選択集は
ほうぼう そうみよう ほう す ゆえ せんちやくしゆう

人をして法華経を捨てしむる書にあらずや。閣・抛の二字は
ひと ほけきよう す しょ かく ほう にじ

仏性論の「憎背」の二字にあらずや。
ぶつしようろん ぞうはい にじ

また法華経誹謗の相貌は、四十余年の諸経のごとく
ほけきよう ひぼう そうみよう しじゆうよねん しょきよう

しょうぜん じょうぶつ

べつ じい しゅ

さだ

とう

ゆえ

てんだい

小善の成仏をもつて別時意趣と定むる等なり。故に、天台、

しゃく

い

しょうぜん

じょうぶつ

しん

すなわ

せけん

釈して云わく「もし小善の成仏を信ぜずんば、則ち世間

ぶつ しゅ

だん

みょうらく かさ

ぎ の

い

の仏種を断ずるなり」。妙楽重ねてこの義を宣べて云わく

きよう

ろくどう

ぶつ しゅ

ひら

きよう

ぼう

「この経はあまねく六道の仏種を開く。もしこの経を謗

ぎ

だん

あ

しゃか

たほう

じつぼう

しよぶつ

てん

ぜば、義、断に当たるなり」。釈迦・多宝・十方の諸仏・天

じん てんだい

みょうらく

こころ

げんくう

ほうぼう

もの

親・天台・妙楽の意のごとくんば、源空は謗法の者なり。

せん

せんちやく しゅう

こころ

ひと

ほつけ

しんごん

す

詮ずるところ、選択集の意は、人をして法華・真言を捨

さだ

か お

ほうぼう

ぎ

うたが

てしめんと定めて書き了わんぬ。謗法の義、疑いなきもの

なり。

だいもん だいさん せんちやくしゅう ほうぼう えんぎ い

大文の第三に、選択集の謗法の縁起を出ださば、

と い しょうこ げんくう ほうぼう もの

問うて云わく、いずれの証拠をもつて源空を謗法の者と

しょう

称するや。

こた い せんちやくしゅう げんもん み いちだいしょうぎよう

答えて云わく、選択集の現文を見るに、一代聖教を

ふた わ いち しょうどう なんぎよう ぞうぎよう に

もつて二つに分かつ。一には聖道・難行・雜行、二には

じようど いぎよう しょうぎよう なか しょう なん ぞう

浄土・易行・正行なり。その中に、聖・難・雜というは、

けごん あごん ほうどう はんにや ほつけ なはん だいにちきようとう しゆ

華嚴・阿含・方等・般若・法華・涅槃・大日経等なり（取

い じよう い しょう じようどさんぶきよう しょうみようねんぶつとう

意）。浄・易・正というは、浄土三部経の称名念仏等な

りしゅい〈取意〉。聖・難・雑しょうなんぞうの失を判ずるには、末代の凡夫まつだいぼんぷこ

れを行ぜば「百ひやくの時に希ときまれに一・二を得、千の時に希ときまれに三・

五ごを得ん」、あるいは「千せんの中に一りも無し」、あるいは

「群賊・悪衆・邪見・悪見・邪雑の人」等と定むるなり。浄・

易・正の得を判ずるには、末代の凡夫これを行ぜば「十じゅう

は即ち十生じ、百は即ち百生ぜん」等なり。謗法ほうぼうの

邪義じゃぎこれなり。

問とうて云わく、一代聖教を聖道・浄土・難行・易行、

正行・雑行と分かち、その中に難・聖・雑をもつて時機じき

ふそうおう しょう

げんくういちにん しんぎ

不相応と称することは、ただ源空一人の新義にあらず。

どんらん どうしやく

ぜんどう

さんし

ぎ

にんし

曇鸞・道綽・善導の三師の義なり。これまたこれらの人師

わたくし あん

みなもと

りゅうじゅぼさつ

じゅうじゅうびばしやろん

の私の案にあらず。その源は竜樹菩薩の十住毘婆沙論

い

げんくう

ほうぼう

もの

しょう

りゅうじゅぼさつ

より出でたり。もし源空を謗法の者と称せば、竜樹菩薩な

さんし

ほうぼう

もの

しょう

らびに三師を謗法の者と称するにあらずや。

こた

い

りゅうじゅぼさつ

さんし

こころ

ほつけいぜん

答えて云わく、竜樹菩薩ならびに三師の意は、法華已前

しじゅうよねん

きようぎよう

なんいとう

ぎ

そん

の四十余年の経々において難易等の義を存す。しかるに、

げんくう

このかた

りゅうじゅ

さんし

なんぎようとう

ことば

か

源空より已来、竜樹ならびに三師の難行等の語を借りて、

ほつけ

しんごんとう

なん

ぞうとう

うち

い

しよけ

でし

法華・真言等をもつて難・雑等の内に入れぬ。所化の弟子、

師しの失とがを知らずして、この邪義じやぎをもつて正義しやうぎと存じ、この国くに

に流布るふせしむるが故ゆえに、国中の万民こくちゆう ばんみんことごとく法華・真言ほつけ しんごん

等とうにおいて時機不相応じきふそうおう おもの想いを作す。その上、世間うえ せけんを貪むさぼる

天台・真言てんだい しんごんの学者がくしゃ よ、世の情じように随したがわんがために、法華・真言ほつけ しんごん

等とうにおいて時機不相応じきふそうおう あくごんの悪言はを吐せんちやくしゆういて選択集じやぎの邪義たすを扶

け、一旦いったんの欲心よくしんによつて釈迦・多宝しゃか たほうならびに十方諸仏じつぽうしよぶつの

御評定ごひやうじやうの「法ほうをして久しく住せしめん」「閻浮提ひさ じゆうに広宣えんぶだい こうせん

流布るふせん」の誠言じやうごん やぶを壊いつさいしゆじやうり、一切衆生いつさい さんぜじつぽうをして一切の三世十方

の諸仏しよぶつの舌したを切る罪き つみを得せしむ。ひとえにこれ、「惡世あくせの中なか

びく

じやち

まごころてんごく

え

おも

え

の比丘は、邪智にして心諂曲に、いまだ得ざるを謂つて得

ないしあつき

み い

ほとけ

ほうべん

よろ

たりとなし乃至悪鬼その身に入つて、仏の方便、宜しきに

したが

と

ほう し

ゆえ

随つて説きたもうところの法を知らず」の故なり。

と い

りゆうじゆぼさつ

さんし

ほつけ

しんごんとう

問うて云わく、竜樹菩薩ならびに三師は法華・真言等を

なん

しょう

ぞう

うち

い

げんくうひそか

い

もつて難・聖・雑の内に入れざるを、源空私にこれを入る

なに

し

とは、何をもつてこれを知るや。

こた

い

とお

よしよ

しょうこ

たず

すなわ

答えて云わく、遠く余処に証拠を尋ぬべきにあらず。即

せんちやくしゆう

み

ち選択集にこれ見えたり。

と

い

しょうもん

問うて云わく、その証文、いかん。

こた

い

せんちやくしゅう

だいいつぺん

い

どうしやくぜんじ

答えて云わく、選択集の第一篇に云わく「道綽禅師、

しようどう

じょうど

にほん

た

しようどう

す

まさ

じょうど

き

聖道・浄土の二門を立てて、聖道を捨て正しく浄土に帰す

もん

やくそく

お

つぎしも

あんらくしゅう

ひ

わたくし

るの文」と約束し了わって、次下に安樂集を引いて私の

りょうけん

だん

い

はじ

しようどうもん

ふた

料簡の段に云わく「初めに聖道門とは、これについて二つ

あ

いち

だいいよう

に

しようじよう

だいいよう

なか

有り。一には大乘、二には小乗なり。大乘の中につい

けんみつ

ごんじつとう

ふどうあ

いま

しゅう

こころ

て顕密・権実等の不同有りといえども、今この集の意は

けんだい

ごんだい

そん

ゆえ

りやつこううえ

ぎよう

あ

ただ顕大および権大のみを存す。故に、歴劫迂回の行に当

じゆん

おも

まさ

みつだい

じつだい

たる。これに準じてこれを思うに、応に密大および実大を

そん

いじよう

せんちやくしゅう

もん

もん

こころ

どうしやく

も存すべし」已上。選択集の文なり。この文の意は、道綽

ぜんじ あんらくしゅう こころ ほっけいぜん だいしやうじやうきやう

禪師の安樂集の意は法華已前の大小乗經において

しようどう じやうど にほん わ われわたくし ほっけ しんごう

聖道・浄土の二門を分かつといえども、我私に法華・真言

とう じつだい みつだい しじゅうよねん ごんだいじやう どう

等の実大・密大をもつて四十余年の権大乘に同じて

しようどうもん しょう じゆんししし じゆん おも

聖道門と称す。「準之思之（これに準じてこれを思うに）」

しじ こころ よ ゆえ どんらん なんい

の四字これなり。この意に依るが故に、また曇鸞の難易の

にどう ひ とき わたくし ほっけ しんごん なんぎやうどう なか い

二道を引く時、私に法華・真言をもつて難行道の中に入

ぜんどうおしょう しょうぞうにぎやう わ とき わたくし ほっけ

れ、善導和尚の正雜二行を分かつ時も、また私に法華・

しんごん ぞうぎやう うち い そう せんちやくしゅう じゅうろくだん

真言をもつて雑行の内に入る。総じて、選択集の十六段

わた むりやう ほうぼう な こんげん しじ

に亘つて無量の謗法を作す根源は、ひとえにこの四字より

お 起こる。 あやま 誤れるかな、 おそ 畏ろしきかな。

げんくう もんてい し じやぎ すく い
ここに、源空の門弟、師の邪義を救つて云わく、諸宗の

つね なら きやうろん しょうもん な ぎるい おな
常の習い、たとい経論の証文無しといえども、義類の同じ

あつ いっしょ お せんちやくしゆう ところ ほつけ
きを聚めて一処に置く。しかるに選択集の意は、法華・

しんごんとう あつ ぞうぎやう うち い しょうぎやう たい す
真言等を集めて雑行の内に入れ、正行に対してこれを捨

きやう ほつたい きら ふぜいな まつだい
つ。ひとえに経の法体を嫌うにあらず。ただ風勢無き末代

しゅじやう じやうもつ ぼんぷ さだ き いぎやう ほう えら とき
の衆生を常没の凡夫と定め、この機に易行の法を撰ぶ時、

しょうみやう ねんぶつ き あ いぎやう ほう
称名の念仏をもつてその機に当て、易行の法をもつて

しよきやう すぐ た ごんじつ せんじんとう しょうれつ せん
諸教に勝ると立つ。権実・浅深等の勝劣を詮ずるにあら

ぞうぎよう

い

きら

ぞう

い

ぞう

い

ず。雑行と云うも、嫌つて雑と云うにあらず。雑と云うは、

ふじゆん

ぞう

い

うえ

もろもろ

きようろん

しよし

不純を雑と云う。その上、諸の経論ならびに諸師もこの

こころな

ゆえ

えいざん

せんとく

おうじようしゆう

こころ

意無きにあらず。故に、叡山の先徳の往生要集の意、

ひとえにこの義なり。

ぎ

おうじようしゆう

じよ

い

けんみつ

きようほう

もん

ゆえに、往生要集の序に云わく「顕密の教法、その文、

ひと

じり

ごういん

ぎよう

おお

りち

しやうじん

一つにあらず。事理の業因、その行これ多し。利智・精進

ひと

かた

よ

がんろ

もの

の人はいまだ難しとなさず、予がごとき頑魯の者、あにあ

ゆえ

ねんぶつ

いちもん

よ

うんぬん

じよ

こころ

えてせんや。この故に念仏の一門に依る」云々。この序の意

えしんのせんとく

ほつけ

しんごんとう

は

は、恵心先徳も法華・真言等を破するにあらず、ただひと

われ がんろ もの き あ ほつけ しんごん き がた ぎよう
えに我ら頑魯の者の機に当つ。法華・真言は聞き難く行じ

がた ゆえ わ みどんこん ゆえ ほつたい きら
難きが故なり、我が身鈍根なるが故なり。あえて法体を嫌う

うえ じよ いげ しょうしゅう いた じゅうもん
にはあらず。その上、序より已外、正宗に至るまで、十門

あ だいもんだいはち もん の い いま ねんぶつ すす
有り。大文第八の門に述べて云わく「今、念仏を勧むるこ

よ しゅじゅ みようぎよう しゃ
とは、これ余の種々の妙行を遮するにあらず。ただこれ

なんによ きせん ぎようじゅうざが えら じ しょ しょうえん ろん
男女・貴賤の、行住坐臥を簡ばず、時・処・諸縁を論ぜず、

しゅ かた ないしりんじゅう おうじよう がんぐ
これを修するに難からず、乃至臨終に往生を願求するに、

べんぎ う ねんぶつ いじよう
その便宜を得ること、念仏にしかざればなり」已上。これ

もん み げんくう せんちやくしゅう げんしん おうじようしゅう
らの文を見るに、源空の選択集と源信の往生要集と

いっかん さんかん ふどうあ

いちだいしろうぎよう

なか

いぎよう

一卷・三卷の不同有りといえども、一代聖教の中には易行

えら

まつだい

ぐにん

すく

ほつ

いしゆ

おな

を撰んで末代の愚人を救わんと欲する意趣はただ同じこと

げんくうしようにん

ほつけ

しんごん

なんぎよう

た

あくどう

お

なり。源空上人、法華・真言を難行と立てて悪道に墮つ

えしんのせんとく

とが まぬか

れば、恵心先徳もまたこの失を免るべからず、いかん。

こた

い

なんじ

し

ほうぼう

とが

すく

じ

答えて云わく、汝、師の謗法の失を救わんがために、事

げんしん

おうじようようしゆう

よ

ほうぼう

うえ

じゆうざい

を源信の往生要集に寄せて、謗法の上にいよいよ重罪を

まね もの

ゆえ

しやかにらいごじゆうねん

せつきよう

そう

招く者なり。その故は、釈迦如来五十年の説教に、総じて

さきしじゆうにねん

こころ

むりようぎきよう

さだ

い

けんきよう

い

先四十二年の意を無量義経に定めて云わく「陰逕を行く

るなんおお

ゆえ

むりようぎきよう

いご

さだ

い

に、留難多きが故なり」。無量義経より已後を定めて云わく

だいじきどう

い

むなんな

ゆえ

ほとけみずか

なんいしやうれつ

「大直道を行くに、留難無きが故なり」。仏自ら難易勝劣

にどう

わ

ほとけ

ほか

とうがく

いげまつだい

の二道を分かちたまえり。仏より外、等覚より已下末代の

ぼんし

いた

じぎ

なんい

にどう

わ

凡師に至るまで、自義をもつて難易の二道を分かちてこの

ぎ

そむ

もの

げどう

まおう

せつ

おな

しえ

義に背く者は、外道・魔王の説に同じきか。したがって、四依

だいじ

りゆうじゆぼさつ

じゆうじゆうびばしやろん

ほつけ

いぜん

の居士たる竜樹菩薩の十住毘婆沙論には、法華より已前に

なんい

にどう

わ

しじゆうよねん

いご

きよう

において難易の二道を分かち、あえて四十余年より已後の経

なんぎよう

ぎぞん

うえ

しゆ

やす

において難行の義を存せず。その上、もし修し易きをもつ

いぎよう

さだ

ほけきよう

ごじつてんでん

ぎよう

しやうみようねんぶつ

て易行と定めば、法華經の五十展轉の行は称名念仏より

ぎよう

やす

ひやくせんまんおくばい

しやう

いぎよう

行じ易きこと百千万億倍なり。もしまた勝をもつて易行

さだ

ぶんべつくどくほん

にぜんしじゅうよねん

はちじゅうまんおくこう

あいだ

と定めば、分別功德品に爾前四十余年の八十万億劫の間

だん

かい

にん

しん

ねんぶつざんまいとう

さき

ごはらみつ

くどく

の檀・戒・忍・進・念仏三昧等の先の五波羅蜜の功德をも

ほけきよう

いちねんしんげ

くどく

ひ

いちねんしんげ

くどく

つて法華經の一念信解の功德に比するに、一念信解の功德

ねんぶつざんまいとう

さき

ごはらみつ

すぐ

ひやくせんまんおくばい

は念仏三昧等の先の五波羅蜜に勝ること百千万億倍な

なんいしようにれつ

い

ぎようせんくじん

い

かんぎようとう

ねんぶつざんまい

り。難易勝劣と謂い、行浅功深と謂い、觀經等の念仏三昧

ほけきよう

ひ

なんぎよう

なか

ごくなんぎよう

しょうれつ

なか

を法華經に比するに、難行の中の極難行、勝劣の中の

ごくれつ

極劣なり。

うえ

あくにん

ぐにん

たす

きよう

せんじん

よ

その上、悪人・愚人を扶くること、また教の浅深に依る。

あごんじゅうにねん

かいもん

げんしん

しじゅう

ごぎやく

もの

とくどう

ゆる

阿含十二年の戒門には、現身に四重・五逆の者に得道を許さ

けごん ほうどう はんをや そうかんぎよう しょきよう あごんきよう おし

ず。華嚴・方等・般若・双観経等の諸経は、阿含経より教

ふか ゆえ かんもん とき じゅうざい もん おさ

え深き故に勧門の時は重罪の者を摂むといえども、なお

かいもん ひ しちぎやく もん げんしん じゆかい ゆる

戒門の日は七逆の者に現身の受戒を許さず。しかりといえ

けつじようしよう にじよう むしよう せんだい

ども、決定性の二乗、無性の闡提においては、戒・勧共に

ゆる ほつけ ねはんとう ぎやく しちぎやく ほうぼう

これを許さず。法華・涅槃等には、ただ五逆・七逆・謗法の

もの おさ じようしよう むしよう おさ

者を摂むるのみにあらず、また定性・無性をも摂む。な

まつぼう じようもつ せんだい おお

かんずく、末法においては、常没の闡提これ多し。あに

かんぎようとう しじゅうよねん しょきよう たす

観経等の四十余年の諸経においてこれを扶くべけんや。

むしよう じようもつ けつじようしよう にじよう ほつけ ねはんとう かぎ

無性の常没、決定性の二乗は、ただ法華・涅槃等に限れ

しじゅうよねん きょう よ にんし か きょう き と
り。四十余年の経に依る人師は、彼の経の機と取る。こ

ひと きょうそう し ゆえ
の人はいまだ教相を知らざるが故なり。

おうじようようしゅう いちおうじよぶん み とき ほつけ しんごんとう
ただし往生要集は、一往序文を見る時は、法華・真言等

けんみつ うち い まつだい き かな か
をもつて顕密の内に入れてほとんど末代の機に叶わずと書

もん い さい いちぶさんかん しまつ み
くといえども、文に入つて委細に一部三卷の始末を見るに、

だいじゅう もんどうりようけん しも まさ しよぎよう しようれつ さだ とき
第十の問答料簡の下に正しく諸行の勝劣を定むる時、

かんぶつざんまい はんじゅざんまい じゅうじゅうびばしやろん ほうしやく だいじゅうとう にぜん
観仏三昧・般若三昧・十住毘婆沙論・宝積・大集等の爾前

きようろん ひ いっさい まんぎよう たい ねんぶつざんまい
の経論を引いて、一切の万行に対して念仏三昧をもつて

おうざんまい た お さいご ひと もんどう あ にぜん
王三昧と立て了わんぬ。最後に一つの問答有り。爾前の

ぜんじよう ねんぶつざんまい

ほけきよう いちねんしんげ たい

禪定・念仏三昧をもつて法華經の一念信解に對するに、

ひやくせんまんおくばいおと

さだ ふくもん つう とき ねんぶつざんまい まんぎよう

百千万億倍劣ると定む。復問を通ずる時、念仏三昧を万行

すぐ い にぜん とうぶん うんぬん

に勝ると云うは爾前の当分なりと云々。

まさ し えしん こころ おうじようようしゆう つく まつだい

当に知るべし、恵心の意は往生要集を造つて末代の

ぐき ととの ほけきよう い れい ほとけ

愚機を調えて法華經に入れんがためなり。例せば、仏の

しじゆうよねん きよう ごんき ととの ほけきよう い

四十余年の經をもつて権機を調えて法華經に入れたもう

ゆえ さいご いちじようようけつ つく じよ い

がごとし。故に、最後に一乗要決を造る。その序に云わく

しよじよう ごんじつ こらい あらせ きようろん よ たが

「諸乗の権実は古来の諍いなり。ともに經論に拠つて互

ぜひ しゆう よ かんこうひのえうまのとし ふゆじゆうがつ びようちゆう なげ

いに是非を執す。余、寛弘丙午歳の冬十月、病中に歎

いてい曰ぶつわく、仏法ぽうに遇あうといえども、仏意ぶつを了りせず。もし

ついでむな後悔こうかい何なんぞ追おわん。ここに経論きやうろんの文もん

終しうに手を空くうしゆうせば、後悔こうかい何なんぞ追おわん。ここに経論きやうろんの文もん

ぎ けんてつ しょうしよ ひと たず みずか

義、賢哲の章疏、あるいは人をして尋ねしめ、あるいは自

しちやく まった じしゆう たしゆう へんとう す もつぱ ごんち じつち

ら思しん忖おうし、全く自宗・他宗の偏党を捨てて専ら権智・実智

しんおう さぐ いちじようしんじつ り ごじようほうべん せつ う

の深奥しんおうを探るに、ついに一乗真實の理、五乗方便の説を得

もの すで こんじよう もう ひら なん せきし うら のこ

る者なり。既に今生の蒙を開けば、何ぞ夕死の恨みを遺さ

いじよう じよ こころ えしん ほんい あらわ

ん」已上。この序の意はひとえに恵心の本意を顯すなり。

じしゆう たしゆう へんとう す とき じようど ほうもん す

自宗・他宗の偏党を捨つる時、浄土の法門を捨てざらんや。

いちじようしんじつ り う とき もつぱ ほけきよう よ

一乗真實の理を得る時、専ら法華經に依るにあらずや。

げんしんそうず えいかにねんきのえさる ふゆじゅういちがつ おうじょうようしゅう つく

源信僧都は永観二年甲申の冬十一月、往生要集を造

かんこうにねんひのえうま ふゆじゅうがつ ころ いちじょうようけつ つく

り、寛弘二年丙午の冬十月の比、一乗要決を作る。その

ちゅうかんにじゅうよねん ごん さき じつ のち ほとけ

中間二十余年なり。権を先にし実を後にす。あたかも仏の

りゅうじゆ てんじん てんだいとう なんじ おうじょうようしゅう

ごとく、また竜樹・天親・天台等のごとし。汝、往生要集

たよ し ほうぼう とが すく ほつ

を便りとして師の謗法の失を救わんと欲すれども、あえて

ぎるい に ぎるい おな いっしょ あつ

その義類に似ず。義類の同じきをもつて一处に聚むとなら

なん ぎるいおな けこんぎよう にじょうかい へだ

ば、何らの義類同じきや。華嚴經のごときは、二乗界を隔つ

ゆえ じっかいごご な ほうどう はんにや しよきよう じっかいご

るが故に十界互具無し。方等・般若の諸經は、また十界互

ぐ ゆる かんぎようとう おうじょうごくらく ほうべん おうじょう

具を許さず。觀經等の往生極樂もまた、方便の往生なり。

じようぶつ

おうじよう

ほけきよう

おうじよう

みなべつ

成仏・往生ともに法華經のごとき往生にあらず、皆、別

じいしゆ

おうじよう

じようぶつ

時意趣の往生・成仏なり。

うえ げんしんそうず

こころ

しいぎ

ぎよう

やす

ゆえ

ねんぶつ

その上、源信僧都の意は、四威儀に行じ易きが故に念仏

いぎよう

い

しいぎ

ぎよう

がた

ゆえ

ほつけ

をもつて易行と云い、四威儀に行じ難きが故に法華をもつ

なんぎよう

しよう

てんだい

みようらく

しゃく

は

ひと

ゆえん

て難行と称せば、天台・妙楽の釈を破する人なり。所以

みようらくだいし

まつだい

どんしゃ

むち

ものとう

ほけきよう

ぎよう

は、妙楽大師は末代の鈍者・無智の者等の法華經を行ず

ふげんぼさつ

たほう

じつぼう

しよぶつ

みたてまつ

いぎよう

るに、普賢菩薩ならびに多宝・十方の諸仏を見奉るを易行

さだ

い

さんしん

ほつけ

じゆ

ぜんざんまい

い

と定めて云わく「散心に法華を誦し、禪三昧に入らず、

ざりゆうぎよう

いっしん

ほつけ

もんじ

ねん

いじよう

しゃく

いしゆ

坐立行に一心に法華の文字を念ず」已上。この釈の意趣は

まつだい　ぐしや　おさ

末代の愚者を撰めんがためなり。「散心」とは定心に対す

さんしん　じようしん　たい

ことば　ほつけ　じゆ

る語なり。「法華を誦す」とは、八卷・一卷・一字・一句・

はっかん　いっかん　いちじ　いつく

いちげ　だいもく　いつしんいちねんずいき　もの　ごじつてんでんとう　ざりゆうぎよう

一偈・題目、一心一念随喜の者、五十展転等なり。「坐立行」

しいぎ　きら　いつしん　じよう　いつしん

とは四威儀を嫌わざるなり。「一心」とは定の一心にあら

り　いつしん　さんしん　なか　いつしん　ほつけ　もんじ

ず、理の一心にあらず、散心の中の一心なり。「法華の文字

ねん　きよう　しよきよう　もんじ　に　いちじ　じゆ

を念ず」とは、この経は諸経の文字に似ず、一字を誦す

はちまんほうぞう　もんじ　ふく　いつさいしよぶつ　くどく　おさ

といえども、八万宝蔵の文字を含み、一切諸仏の功德を納む

るなり。

てんだいだいし　げんぎ　はち　い　て　かん　と　つね

天台大師、玄義の八に云わく「手に巻を執らざれども常に

きよう

よ

くち

ごんじような

しゆてん

じゆ

この經を読み、口に言声無けれどもあまねく衆典を誦し、

ほとけせつぼう

ぼんのん

き

こころ

しゆい

仏説法せざれどもつねに梵音を聞き、心に思惟せざれど

ほうかい

て

いじよう

もん

こころ

て

ほけきよう

もあまねく法界を照らす」已上。この文の意は、手に法華經

いちぶはつかん

と

きよう

しん

ひと

ちゆうやじゆうにとき

一部八卷を執らざれども、この經を信ずる人は昼夜十二時

じきようしや

くち

どきよう

こえ

い

ほけきよう

しん

の持經者なり。口に読經の声を出ださざれども、法華經を信

もの

ひび

ときどき

ねんねん

いつさいきよう

よ

もの

ずる者は、日々、時々、念々に一切經を読む者なり。

ほとけ

にゆうめつ

すで

にせんよねん

へ

仏の入滅は既に二千余年を経たり。しかりといえども、

ほけきよう

しん

もの

もと

ほとけ

おんじよう

とど

ときどき

こつこく

法華經を信ずる者の許に仏の音声留めて、時々、刻々、

ねんねん

われし

よし

き

こころ

いちねんさんぜん

かん

念々に、我死せざる由を聞かしむ。心に一念三千を觀ぜざ

じつぼうほうかい て

とく

れども、あまねく十方法界を照らすものなり。これらの徳は

ほけきよう

ぎよう

もの そな

ゆえ

ひとえに法華經を行ずる者に備わるなり。この故に、

ほけきよう

しん

もの

りんじゆう

とき

こころ

ほとけ

ねん

法華經を信ずる者は、たとい臨終の時、心に仏を念ぜず、

くち

きよう

じゆ

どうじよう

い

こころな

ほうかい

口に經を誦せず、道場に入らざれども、心無くして法界

て

こえな

いつさいきよう

じゆ

かんじく

と

を照らし、音無くして一切經を誦し、卷軸を取らずして

ほけきようはつかん

にぎ

とく

あ

ごんきよう

ねんぶつしゃ

法華經八卷を拳る徳これ有り。これあに、權教の念佛者の

りんじゆうしようねん

ご

じゆうねん

ねんぶつ

とな

ほつ

もの

臨終正念を期して十念の念佛を唱えんと欲する者に

ひやくせんまんばいすぐ

いぎよう

百千万倍勝るるの易行にあらずや。

ゆえ

てんだいだいし

もんぐ

じゆう

い

しよきよう

すぐ

故に、天台大師、文句の十に云わく「すべて諸教に勝る

るが故に、随喜功德品と言う」。妙楽大師は、法華経は諸経

ゆえ ずいきくどくほん

い

みようらくだいし

ほけきよう

しよきよう

より浅機を取れども、人師この義を弁えざるが故に法華経

き ふか と

は

い

おそ

ひとあやま

の機を深く取ることを破して云わく「恐らくは、人謬つて

げ もの

しよしん

くどく

だい

はか

く

じようい

解せる者、初心の功德の大なることを測らずして、功を上位

ゆず

しよしん

あなど

ゆえ

いま

か

ぎようあさ

くふか

に推り、この初心を蔑る。故に、今、彼の行浅く功深き

しめ

きようりき

あらわ

いじよう

きようりき

ことを示して、もつて経力を顕す」已上。「もつて経力を

あらわ

しやく

いしゆ

ほけきよう

かんぎようとう

ごんきよう

すぐ

顕す」の釈の意趣は、法華経は觀経等の権経に勝れた

ゆえ

ぎようあさ

くふか

せんき

おさ

ゆえ

るが故に、行浅く功深し。浅機を撰むるが故なり。もし

えしんのせんとく

ほけきよう

ねんぶつ

なんぎよう

さだ

ぐしや

恵心先徳、法華経をもつて念仏より難行と定めて、愚者・

がんろ もの おさ い おそ ぎやくろ かやだ つみ まね

頑魯の者を摂めずと云わば、恐らくは逆路伽耶陀の罪を招

おそ ひとあなど げ うち い

かざらんや。また「恐らくは、人謬つて解す」の内に入ら

ざらんや。

そう てんだい みようらく だんだいぶ ほんまつ こころ ほけきよう

総じて天台・妙楽の三大部の本末の意には、法華経は

しよきよう も ぐしや あくにん によにん じようもつせんだいとう おさ

諸経に漏れたる愚者・悪人・女人・常没闡提等を摂めた

たし ぶつ い さと ゆえ ほけきよう しよきよう おな

もう。他師は、仏意を覚らざるが故に、法華経を諸経に同

じ じゆう き と ぼんぷ

じ、あるいは地・住の機を取り、あるいは凡夫においても

べつじいしゆ ぎ そん じやぎ は にんてん しあく

別時意趣の義を存す。これらの邪義を破して、人天・四悪を

ほけきよう き さだ じゆるい そうたい か こ ぜんあく

もつて法華経の機と定む。就類・相對をもつて過去の善惡を

おさ にんてん しょう ひと かこ ごかいじゅうぜん な

収む。「人天に生ずる人、あに過去の五戒十善無からんや」

とう さだ お えしん ぎ そむ てんだいしゅう

等と定め了わんぬ。もし恵心この義に背かば、あに天台宗

し ひと

を知れる人ならんや。

げんくう ふか ぎ まよ ゆえ おうじょうようしゅう

しかるに、源空、深くこの義に迷うが故に、往生要集に

びやつけん お みづか あやま た あやま

おいて僻見を起こし、自ら失ち他をも誤るものなり。

しゆくぜん あ じつきよう い いつさいしゆじよう け

たまたま宿善有つて実教に入りながら、一切衆生を化し

ごんきよう かえ じつきよう は あくし

て権教に還らしめ、あまつさえ実教を破せしむ。あに悪師

か くおんげしゆ だいつうけちえん もの ごひやく さんぜん

にあらずや。彼の久遠下種、大通結縁の者の、五百・三千の

じんてん ふ ほつけ だいきよう す にぜん ごんしろう

塵点を経るがときは、法華の大教を捨てて爾前の権小

うつ

ゆえ

のち

ごんきよう

す

ろくどう

めぐ

ふきよう

に遷るが故に、後には権経をも捨てて六道に回りぬ。不軽

きようき

しゆ

せんごうあびじごく

お

ごんし

しん

じつきよう

ひろ

軽毀の衆は、千劫阿鼻地獄に墮つ。権師を信じ、実経を弘

もの

ひぼう

な

ゆえ

げんくう

わ

むる者に誹謗を作したるが故なり。しかるに、源空は、我が

み

じつきよう

す

ごんきよう

い

ひと

すす

身ただ実経を捨てて権経に入るのみにあらず、人を勧め

じつきよう

す

ごんきよう

い

ごんひと

じつきよう

て実経を捨てて権経に入らしめ、また権人をして実経に

い

じつきよう

ぎようじゃ

の

つみ

えいごう

入らしめず。あまつさえ実経の行者を罵るの罪、永劫に

う

がた

も浮かび難からんか。

と

い

じゆうじゆうびばしやろん

いちだい

つうろん

なんい

問うて云わく、十住毘婆沙論は一代の通論なり。難易の

にどう

うち

なん

ほっけ

しんごん

ねはん

い

二道の内に、何ぞ法華・真言・涅槃を入れざるや。

こた

い

いちだい

しよだいじようきよう

けこんぎよう

答えて云わく、一代の諸大乘経において、華嚴経のご

しよとん

ごぶんあ

しよとん

けこん

にじよう

かい

ふじよう

ろん

ときは初頓・後分有り。初頓の華嚴は二乗の成・不成を論ぜ

ほうどうぶ

しよきよう

いつこう

にじよう

むしようせんたい

じようぶつ

きら

ず。方等部の諸経には、一向に二乗・無性闡提の成仏を斥

はんにやぶ

しよきよう

おな

そう

しじゅうよねん

う。般若部の諸経もこれに同じ。総じて四十余年の

しよだいじようきよう

こころ

ほつけ

ねはん

だいにちきようとう

諸大乘経の意は、法華・涅槃・大日経等のごとくには

にじよう

むしよう

じようぶつ

ゆる

かんが

二乗・無性の成仏を許さず。これらをもつてこれを檢う

にぜん

ほつけ

そうい

すいか

るに、爾前・法華の相違は水火のごとし。

めつご

ろんじ

りゆうじゆ

てんじん

せんぶ

ろんじ

滅後の論師たる竜樹・天親もまた、ともに千部の論師な

つく

ろん

つうべつ

にろんあ

つうろん

り。造るところの論に通別の二論有り。通論においてもま

ふた あ しじゅうよねん つうろん いちだいごじゅうねん つうろん

た二つ有り。四十余年の通論と一代五十年の通論となり。

さべつ わ けつじようしよう にじよう むしようせんたい じよう ふじよう

その差別を分かつに、決定性の二乗・無性闡提の成・不成

ろん ごんじつ さだ だいろん りゅうじゆ

をもつて論の権実を定むるなり。しかるに、大論は、竜樹

ぼさつ ぞう らじゅうさんぞう やく はんをやきよう よ とき にじようさぶつ

菩薩の造、羅什三蔵の訳なり。般若経に依る時は二乗作仏

ゆる ほけきよう よ にじようさぶつ ゆる じゅうじゅうびばしやろん

を許さず、法華経に依れば二乗作仏を許す。十住毘婆沙論も

りゅうじゆぼさつ ぞう らじゅうさんぞう やく ろん

また竜樹菩薩の造、羅什三蔵の訳なり。この論にもまた

にじようさぶつ ゆる し ほっけいぜん

二乗作仏を許さず。これをもつて知んぬ、法華已前の

しよだいじようきよう ころん

諸大乘経の意を申べたる論なることを。

と い じゅうじゅうびばしやろん ところ にじようさぶつ

問うて云わく、十住毘婆沙論のいずれの処に、二乗作仏

を許さざる文、出でたるや。

こた

い

じゅうじゅうびばしやろん

りゅうじゅぼさつぞう

らじゅうやく

答えて云わく、十住毘婆沙論へ竜樹菩薩造、羅什訳の

だいご い

しょうもんじ

びやくしふつじ

お

第五に云わく「もし声聞地および辟支仏地に堕ちなば、こ

ぼさつ

し な

すなわ

いつさい

り

うしな

じごく

れを菩薩の死と名づく。則ち一切の利を失う。もし地獄に

お

おそ

しょう

にじょうじ

お

堕つとも、かくのごとき畏れを生ぜじ。もし二乗地に堕ち

すなわ

だいふい

じごく

なか

お

ひつきよう

なば、則ち大怖畏となす。地獄の中に堕つとも、畢竟し

ほとけ

いた

う

にじょうじ

お

ひつきよう

て仏に至ることを得。もし二乗地に堕ちなば、畢竟して

ぶつどう

さえぎ

いじよう

もん

にじょうさぶつ

ゆる

仏道を遮る」已上。この文、二乗作仏を許さず。あたかも

じようみようとう

ぶつぼう

なか

はいしゆ

もん

浄名等の「仏法の中において、もつて敗種のごとし」の文

のごとし。

と

い

だいろん

はんにやきよう

よ

にじようさぶつ

ゆる

問うて云わく、大論は般若経に依つて二乗作仏を許さず

ほけきよう

よ

にじようさぶつ

ゆる もん

法華経に依つて二乗作仏を許す文、いかん。

こた

い

だいろん

りゆうじゆぼさつぞう

らじゆうさんぞうやく

いつぴやく

答えて曰わく、大論へ竜樹菩薩造、羅什三蔵訳の一百

い

と

い

ほう

じんじん

に云わく「問うて曰わく、さらにいずれの法か甚深にして

はんにや

すぐ

あ

はんにや

あなん

ぞくろい

般若に勝れたるもの有つて、般若をもつて阿難に囑累し、

よきよう

ぼさつ

ぞくろい

こた

い

はんにやはらみつ

余経をもつて菩薩に囑累するや。答えて曰わく、般若波羅蜜

ひみつ

ほう

ほつけとう

しよきよう

あらかん

は秘密の法にあらず。しかるに、法華等の諸経は阿羅漢の

じゆけつさぶつ

と

だいぼさつよ

う

じゆう

たと

受決作仏を説く。ゆえに大菩薩能く受けて持用す。譬えば、

だいやくし よ どく

くすり

くじゅうさん

大薬師の能く毒をもつて薬となすがごとし。また九十三

い あらかん じょうぶつ ろんぎしや し

に云わく「阿羅漢の成仏は、論義者の知るところにあらず。

ほとけ よ りよう

いじよう

もん

ただ仏のみ能く了したもう」已上。これらの文をもつて

おも

ろんじ ごんじつ

ほとけ ごんじつ

これに思うに、論師の権実^{ごんぎよう}はあたかも仏の権実のごとし。

ごんぎよう

よ にんし

ほつけとう

かんぎよう

しかるを、権経に依る人師、みだりに法華等をもつて観経

とう ごんせつ どう ほつけ はんにやとう ぎ か じようどさんぶきよう とく

等の権説に同じ、法華・涅槃等の義を仮りて浄土三部経の徳

な けつじようしよう にじよう むしようせんたい じようもつとう おうじよう ゆる

と作し、決定性の二乗、無性闡提、常没等の往生を許す。

ごんじつぞうらん とがのが がた れい げてん じゆしや ないてん ぬす

権実雑乱の失脱れ難し。例せば、外典の儒者の内典を賊ん

げてん かぎ

ほうぼう とがまぬか がた

で外典を莊るがごとし。謗法の失免れ難きか。

ほとけ みずか ごんじつ わ

仏、自ら権実を分かちたもう。その詮せんをさぐるに、

けつじようしよう にじよう むしよううじよう じよう ふじよう

決定性の二乗、無性有情の成・不成これなり。しかるに、

ぎ わきま やくしや にぜん きようぎきよう やく とき にじよう

この義を弁えざる訳者、爾前の経々を訳する時、二乗の

さぶつ むしよう じようぶつ ゆる ぎ し やくしや にぜん きよう

作仏、無性の成仏を許す。この義を知る訳者は、爾前の経

やく とき にじよう さぶつ むしよう じようぶつ ゆる

を訳する時、二乗の作仏、無性の成仏を許さず。これによ

ぶつ い さと にんし にぜん きよう

って、仏意を覚らざる人師も、また爾前の経において

けつじようしよう むしよう じようぶつ あ み ほつけ にぜん おな

決定性・無性の成仏を明かすと見て、法華と爾前と同じ

おも な にぜん きよう けつじよう むしよう

との思いを作し、あるいは爾前の経において決定・無性を

きら もん み ぎ りようぎききよう ほつけ はんや

嫌う文を見て、この義をもつて了義経となし、法華・涅槃

ふりようぎきよう

とも ぶつ い

さと

ごんじつにきよう

まよ

をもつて不了義經となす。共に仏意を覺らず、権実二經に迷

あやま

い

げんくういちにん

かぎ

えり。これらの誤りを出ださば、ただ源空一人のみに限る

てんじく

ろんじ

やくしや

とうど

にんし

いた

にあらず。天竺の論師ならびに訳者より唐土の人師に至る

ぎあ

じろんし

しょうろんじ

いちだい

べつじ

まで、その義有り。いわゆる、地論師・撰論師の一代の別時

いしゆ

ぜんどう

えかん

ほけきよう

ひと

なむぶつ

とな

べつじ

意趣、善導・懷感の法華經の「一たび南無仏と称う」の別時

いしゆ

みな

ごんじつ

わきま

ゆえ

しゆつたい

意趣、これらは皆、権実を弁えざるが故に出来するところ

あやま

ろん

つく

ぼさつ

きよう

やく

やくしや

さんまいほつとく

ろの誤りなり。論を造る菩薩、經を訳する訳者、三昧發得

にんし

の人師、なおもつてかくのごとし。いかにいわんや末代の凡

し

師においてをや。

まつだい

ぼん

と い なんじ まつがく み なん ろんじ
問うて云わく、汝、末学の身として、何ぞ論師ならびに

やくしや にんし は
訳者・人師を破するや。

こた い なん いた しやうろんじ
答えて云わく、あえてこの難を致すことなかれ。撰論師な

ぜんどうとう しやく ごんじつにきよう わきま
らびに善導等の釈は、権実二教を弁えずしてみだりに

ほけきよう べつじいしゆ た ゆえ てんだい みようらく しやく
法華經をもつて別時意趣と立つるが故に、天台・妙樂の釈

すいか な にんし そうい さしお きやうろん
と水火を作すあいだ、しばらく人師の相違を閣いて經論

っ ぜ ひ かんが とき ごんじつ にきよう ぶつせつ い
に付いて是非を檢うる時、権実の二教は仏説より出でたり。

てんじん りゆうじゆかさ さだ ぎ じゆん にんし
天親・竜樹重ねてこれを定む。この義に順ずる人師をば

あお ぎ じゆん にんし
しばらくこれを仰ぎ、この義に順ぜざる人師をばしばらく

これを用もちいず。あえて自義じぎをもつて是非ぜひを定さだむるにあらず、
ただ相違そういを出だすばかりなり。

大文だいもんの第四だいしに、謗法ほうぼうの者ものを対治たいじすべき証文しょうもんを出ださば、
これに二ふたつ有あり。一いちには仏法ぶつぼうをもつて国王こくおう・大臣だいじんならびに四し
衆しゆに付嘱ふぞくすることを明あかし、二にには正まさしく謗法ほうぼうの人ひとの王地おうじ
に処おるをば対治たいじすべき証文しょうもんを明あかす。

第一だいいちに、仏法ぶつぼうをもつて国王こくおう・大臣だいじんならびに四衆ししゆに付嘱ふぞく
ることを明あかさば、

にんのうきよう

い

ほとけ

はしのくおう

つ

ないし

仁王経に云わく「仏、波斯匿王に告げたまわく乃至こ

ゆえ

もろもろ

こくおう

ふぞく

びく

びくに

しょうしんなん

の故に諸の国王に付嘱して、比丘・比丘尼・清信男・

しょうしんによ

ふぞく

なに

ゆえ

おう

いりきな

ゆえ

清信女に付嘱せず。何をもつての故に。王の威力無きが故

ないし

きよう

さんぼう

もろもろ

こくおう

しぶ

でし

ふぞく

に乃至この経の三宝をば、諸の国王・四部の弟子に付嘱

いじよう

だいじつきようにじゆうはち

い

こくおうあ

わ

す」已上。大集経二十八に云わく「もし国王有つて、我が

ほう

めつ

み

す

おうご

むりようせ

法の滅せんを見て、捨てて擁護せずんば、無量世において

せ

かい

え

しゆ

めつしつ

くにさんしゆ

施・戒・慧を修すとも、ことごとく滅失して、その国三種の

ふじよう

こと

い

ないしみようじゆう

だいじごく

しろう

不祥の事を出ださん乃至命終して、大地獄に生ぜん」

いじよう

已上。

仁王のうきよう もん

ぶつぼう

こくおう ふぞく

仁王経の文のごとくんば、仏法をもつてまず国王に付嘱

つぎ ししゆ およ おうい い くん くに おさ しん ぶつぼう

し、次に四衆に及ぼす。王位に居る君、国を治むる臣は、仏法

さき くに おさ だいじつきよう もん

をもつて先となし国を治むべきなり。大集経の文のごとく

おうしんとう ぶつどう むりようこう あいだ とうもくとう せ ほどこ

んば、王臣等、仏道のために無量劫の間、頭目等の施を施

はちまん かいぎよう たも むりよう ぶつぼう まな くに

し八万の戒行を持ち無量の仏法を学ぶといえども、国に

るふ ほう じゃしよう ただ こくちゆう おおかぜ

流布するところの法の邪正を直さざれば、国中に大風・

かんぱつ おおあめ さんさい お ばんみん ちようだつ とうしんさだ

旱魃・大雨の三災起こつて万民をして逃脱せしめ、王臣定

さんあく お

めて三悪に堕ちん。

そうりんさいご ねはんぎよう だいさん い いま しょうほう

また双林最後の涅槃経の第三に云わく「今、正法をもつ

しょう だいじん さいしょう びく びくに うばそく うばい ふぞく
て諸王・大臣・宰相・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に付嘱

ないしほう まも

もの

とくこじ

な

い

す乃至法を護らざる者をば、禿居士と名づく」。また云わく

ぜんなんし

しょうほう

ごじ

もの

ごかい う

いぎ

「善男子よ。正法を護持せん者は、五戒を受けず、威儀を

しゆ

まさ

とうけん

きゆうせん

むさく

じ

い

修せず、応に刀剣・弓箭・鉾槩を持すべし」。また云わく

ごかい う

しょうほう

まも

すなわ

だいじよう

「五戒を受けざれども、ために正法を護るを乃ち大乘と

な

しょうほう

まも

もの

まさ

とうけんきじよう

しゆうじ

名づく。正法を護る者は、応に刀剣器械を執持すべし」

うんぬん

云々。

しじゆうよねん

うち

ぼんもうとう

かい

こくおう

だいじん

四十余年の内にも梵網等の戒のごとくんば、国王・大臣の

しよにんとう

いっさい

とうじよう

きゆうせん

むふ

とうせん

ぐ

たくわ

諸人等も一切の刀杖・弓箭・矛斧・鬪戦の具を畜うるこ

とを得ず。えもしこれを畜たくわえば、定めて現身げんしんに国王こくおうの位くらい・

比丘比丘尼びくびくにの位くらいを失うしない、後生ごしょうは三惡道さんあくどうの中に墮おつべしと

比丘比丘尼きくひくにの位くらを失うしない、後生ごしょうは三惡道さんあくどうの中に墮おつべしと

定さだめ了おわんぬ。しかるに、今の世は道俗いまだをよどうぞくえらきゆうせんず、弓箭きゆうせん・

刀杖とうじようを帶たいせり。梵網經ぼんもうきようの文もんのごとくんば、必ず三惡道さんあくどうに

刀杖とうじようを帶たいせり。梵網經ぼんもうきようの文もんのごとくんば、必ず三惡道さんあくどうに

墮おちんこと疑うたがいなきものなり。涅槃經ねはんぎようの文もん無なくんば、いか

墮おちんこと疑うたがいなきものなり。涅槃經ねはんぎようの文もん無なくんば、いか

にしてかこれを救すくわん。また涅槃經ねはんぎようの先後せんごの文もんのごとくん

ば、弓箭きゆうせん・刀杖とうじようを帶たいして惡法あくほうの比丘びくを治じし正法しょうほうの比丘びくを

守護しゆごせば、先世せんぜの四重五逆しじゆうごぎやくを滅めつして必ず無上道むじようどうを証しょうせん

守護しゆごせば、先世せんぜの四重五逆しじゆうごぎやくを滅めつして必ず無上道むじようどうを証しょうせん

と定さだむ。

と定さだむ。

こんこうみようきよう

だいろうく

い

ひとあ

こくど

また金光明經の第六に云わく「もし人有つて、その国土

きようあ

るふ

において、この經有りといえども、いまだかつて流布せし

しやり

こころ

しょう

ちようもん

ねが

めず、捨離の心を生じて聴聞せんことを樂わず、また

くよう

すうちよう

さんたん

しぶ

しゆ

じきよう

ひと

み

供養・尊重・讚歎せず。四部の衆・持經の人を見て、また

すうちようないしくよう

あた

われ

よ

尊重乃至供養すること能わず。ついに、我らおよび余の

けんぞく

むりよう

しよてん

じんじん

みようほう

き

え

眷属の無量の諸天をして、この甚深の妙法を聞くことを得

かんろ

あじ

そむ

しょうほう

なが

うしな

いこう

せいりき

ず、甘露の味に背き、正法の流れを失い、威光および勢力

あ

あくしゆ

ぞうちよう

にんてん

そんめつ

しょうじ

有ることなからしむ。悪趣を増長して人天を損減し、生死

かわ

お

ねはん

みち

そむ

せそん

われ

しおう

の河に墜ちて、涅槃の路に乖かん。世尊よ。我ら四王なら

もろもろ けんぞく

やくしやとう

じ み

びに諸の眷属および薬叉等、かくのごとき事を見て、そ

こくど す

おうご こころな

われ おう

の国土を捨てて擁護の心無けん。ただ我らのみこの王を

しやき

むりよう こくど しゆご

しよだいぜんじんあ

捨棄するにあらず、また無量の国土を守護する諸大善神有

す さ

すで しやり お

くに まさ

らんも、みな捨て去らん。既に捨離し已われれば、その国、当

しゆじゆ さいかあ

こくい そうしつ

いっさい にんしゆ みなぜんしん

に種々の災禍有つて国位を喪失すべし。一切の人衆、皆善心

な けばく

さつがい しんじよう

あ

ざんてん

無く、ただ繫縛・殺害・瞋諍のみ有つて、たがいに讒諂し、

ま つみな

およ

えきびようるぎよう

すいせい

い

枉げて辜無きに及ぼさん。疫病流行し、彗星しばしば出で、

りようじつなら げん

はくしよくつねな

こくびやく

に こうふしよう

そう

あらわ

両日並び現じ、薄蝕恒無く、黒白の二虹不祥の相を表し、

ほしなが

じうご

い うち

こえ おこ

星流れ地動き、井の内に声を発し、

ぼうう あくふう じせつ よ つね ききん あ みようじつ な

暴雨・悪風、時節に依らず、常に飢饉に遭つて苗実成らず、

おほ たほう おんぞくあ こくない しんりやく にんみん もろもろ くのう

多く他方の怨賊有つて国内を侵掠し、人民は諸の苦悩を

う とち たの ところあ いじよう

受け、土地に樂しむところの処有ることなけん」已上。

きようもん み せけん あんのん いの くに さんさいお

この経文を見るに、世間の安穩を祈るとも国に三災起こ

あくほうる ふ ゆえ し とうせい

るは、悪法流布する故なりと知るべし。しかるに、当世は

ずいぶん こくど あんのん いの い しょうかがんねん

随分国土の安穩を祈るといへども、去ぬる正嘉元年には

だいじ おほ うご どうにねん おおあめ おおかせみようじつ うしな さだ

大地大いに動き、同二年に大雨・大風苗実を失えり。定め

くに ほろ あくほう くに あ かんが

て国を喪ぼす悪法この国に有るかと勘うるなり。

せんちやくしゆう だん い だいいち どくじゆぞうぎよう かみ

選択集のある段に云わく「第一に読誦雑行とは、上の

かんぎようとう おうじようじようど きよう のぞ いげ だいしよう けんみつ

観経等の往生浄土の経を除いてより已外、大小・顕密の

しよきよう じゆじ どくじゆ どくじゆぞうぎよう な

諸経において受持・読誦するを、ことごとく読誦雑行と名

か お つぎ か い つぎ にぎよう とくしつ

づく」と書き了わって、次に書いて云わく「次に二行の得失

はん ほつけ しんごんとう ぞうぎよう しつ じようどさんぶきよう とく

を判ずれば、法華・真言等の雑行は失、浄土三部経は得な

つぎしも ぜんどうおしよう おうじようらいさん じつそくじつしよう ひやくそくひやく

り」。次下に善導和尚の往生礼讃の「十即十生、百即百

しよう せんちゆうむいち もん か の い わたくし い

生」「千中無一」の文を書き載せて云わく「私に云わく、

もん み ぞう す せん しゆ

この文を見るに、いよいよすべからく雑を捨てて専を修す

ひやくそくひやくししよう せんじゆししようぎよう す かた

べし。あに百即百生の専修正行を捨てて、堅く

せんちゆうむいち ぞうしゆぞうぎよう しゆう ぎようじやよ しりよう

千中無一の雑修雑行を執せんや。行者能くこれを思量せ

いじよう　もん　み　せけん　どうぞく　しよきよう　しん
よ」已上。これらの文を見るに、世間の道俗あに諸経を信
ずべけんや。

つぎしも

か

ほけきようとう

ぞうぎよう

ねんぶつ

しようぎよう

次下にまた書いて、法華経等の雑行と念仏の正行との

しようれつなんい

さだ

い

いち

しようれつ

ぎ

に

なんい

勝劣難易を定めて云わく「一には勝劣の義、二には難易の

ぎ

はじ

しようれつ

ぎ

ねんぶつ

しよう

よぎよう

義なり。初めに勝劣の義とは、念仏はこれ勝、余行はこ

れつ

つぎ

なんい

ぎ

ねんぶつ

しゆ

やす

しよぎよう

しゆ

れ劣なり。次に難易の義とは、念仏は修し易く、諸行は修

がた

つぎしも

ほつけ

しんごんとう

しつ

さだ

い

し難し」と。また次下に法華・真言等の失を定めて云わく

ゆえ

し

しよぎよう

き

とき

うしな

ねんぶつおうじよう

「故に知んぬ、諸行は機にあらず、時を失う。念仏往生

き

あ

とき

え

つぎしも

ほつけ

しんごんとう

のみ機に当たり、時を得たり」。また次下に法華・真言等の

ぞうぎようもん　と　い　ずいた　まえ　じようさん

雑行の門を閉じて云わく「随他の前にはしばらく定散の

もん　ひら　ずいじ　のち　かえ　じようさん　もん　と

門を開くといえども、随自の後には還つて定散の門を閉ず。

ひと　ひら　い　ご　なが　と　ねんぶつ

一たび開いてより以後永く閉じざるは、ただこれ念仏の

いちもん　いじよう

一門のみなり」已上。

さいご　ほんかい　い　そ　すみ　しやうじ　はな　ほつ

最後の本懷に云わく「夫れ、速やかに生死を離れんと欲せ

にしゆ　しやうほう　なか　しやうどうもん　さしお　えら

ば、二種の勝法の中に、しばらく聖道門を閣いて、選ん

じようどもん　い　じようどもん　い　ほつ　しやう　ぞう　にぎよう

で浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲せば、正・雑の二行

なか　もろもろ　ぞうぎよう　なげう　えら　まさ　しやうぎよう

の中に、しばらく諸の雑行を抛つて、選んで応に正行

き　いじよう

に帰すべし」已上。

もんてい

しよ つた

にほんろくじゆうよしゆう

じゆうまん

ゆえ

門弟、この書を伝えて日本六十余州に充滿するが故に、

もんじん

せけん

むち

もの

かた

い

しようにん

ち えだいいち

門人、世間の無智の者に語って云わく「上人は智慧第一の

み

しよ つく

しんじつ

ぎ

さだ

ほつけ

しんごん

もん

身としてこの書を造り、真実の義を定め、法華・真言の門を

と

のち

ひら

もんな

なげう

のち

かえ

と

もんな

とう

閉じて後に開く文無く、抛つて後に還つて取る文無し」等

た

せけん

どうぞくいちどう

こうべ

かたむ

ぎ

たず

と立つるあいだ、世間の道俗一同に頭を傾け、その義を訪

もの

かな

せんちやく

こころ

の

ほうねん

ぬる者には仮字をもつて選択の意を宣べ、あるいは法然

しようにん

ものがたり

か

ほつけ

しんごん

なん

つ

上人の物語を書くあいだ、法華・真言において難を付け

こぞ

こよみ

そふ

くつ

たと

ほけきよう

て、あるいは去年の暦、祖父の履に譬え、あるいは法華経

よ

かんげん

おと

を読むは管絃より劣るとす。

かくのごとき悪書、あくしよ 国中に充満するが故に、こくちゆう 法華・真言じゆうまん

とうくに

あ

ちようもん

ねが

等国に在りといえども聴聞せんことを樂わず、ねが たまたま

ぎよう

ひとあ

そんちよう

しよう

いつこうねんぶつ

もの

行ずる人有りといえども尊重を生ぜず。一向念仏の者は、

ほつけとう

けちえん

な

おうじよう

さわ

な

い

ゆえ

法華等の結縁を作すをば往生の障りと成ると云うが故に、

しやり

こころ

しよう

ゆえ

しよてん

みようほう

き

え

捨離の意を生ず。この故に、諸天、妙法を聞くことを得

ほうみ

な

いこうせいりよくあ

してんのう

ず、法味を嘗めざれば、威光勢力有ることなし。四天王な

けんぞく

くに

す

にほんこくしゆご

ぜんじん

しやり

お

らびに眷属はこの国を捨て、日本国守護の善神も捨離し已

ゆえ

しょうかがんねん

だいじおお

ふる

どうにねん

はる

わんぬ。故に、正嘉元年に大地大いに震い、同二年に春の

おおあめなえ

うしな

なつ

だいかんばつそうもく

か

あき

おおかげかじつ

大雨苗を失い、夏の大旱魃草木を枯らし、秋の大風菓実を

うしな

けかち

お

ばんみん

ちようだつ

失い、飢渴たちまちに起こつて万民をして逃脱せしむる

こんこうみようきよう

もん

せんちやくしゆう

とが

こと、金光明經の文のごとし。あに選択集の失にあら

ぶつごむな

ゆえ

あくほう

るふあ

すでくに

ずや。仏語虚しからざるが故に、悪法の流布有つて、既に国

さんさいお

あくぎ

たいじ

ほとけ

に三災起これり。しかるに、この悪義を対治せずんば、仏

と

さんあく

のが

の説くところの三悪を脱るべけんや。

さんねん

よ

われ

しんみよう

あい

むじようどう

しかるに、近年より、予、「我は身命を愛せず、ただ無上道

お

もん

み

せつせん

じようたい

こころ

お

を惜しむのみ」の文を瞻るあいだ、雪山・常啼の心を起こ

いのち

だいじよう

るふ

か

ごうごん

は

い

し、命を大乘の流布に替え、強言を吐いて云わく

せんちやくしゆう

しん

ごせ

ねが

ひと

むけんじごく

お

「選択集を信じて後世を願わんの人は、無間地獄に墮つ

ときほうねんしょうにん

もんてい

せんちやくしゅう

かみ

い

べし」。その時法然上人の門弟、選択集における上に出だ

あくぎ

かく

しよぎようおうじよう

た

すところの悪義を隠し、あるいは諸行往生と立て、ある

せんちやくしゅう

ほつけ

しんごんとう

やぶ

よし

しよう

いは選択集において法華・真言等を破らざる由を称し、

ざいぞく

せんちやくしゅう

じやぎ

し

あるいは在俗において選択集の邪義を知らしめざらんが

もうご

かま

い

にちれん

ねんぶつ

とな

ひと

さん

ために、妄語を構えて云わく「日蓮は、念仏を称うる人は三

あくどう

お

い

悪道に堕ちんと云う」。

と

い

ほうねんしょうにん

もんてい

しよぎようおうじよう

た

問うて云わく、法然上人の門弟、諸行往生を立つるに

とがあ

いな

失有りや否や。

こた

い

ほうねんしょうにん

もんてい

しよう

しよぎようおうじよう

答えて曰わく、法然上人の門弟と称して諸行往生を

た

ぎやくろかやだ

もの

とうせい

しよぎようおうじよう

立つるは、逆路伽耶陀の者なり。当世もまた、諸行往生の

ぎ た

ないしん

いつこう

ねんぶつおうじよう

ぎ そんな

そと

義を立て、しかも内心には一向に念仏往生の義を存し、外

しよぎようふぼう

よし

き

には諸行不謗の由を聞かしむるなり。そもそも、この義を

た

もの

せんちやくしゆう

ほつけ

しんごんとう

とが

つ

立つる者は、選択集の法華・真言等において失を付けし

しゃへいかくほう

ぐんぞく

じゃけん

あつけん

じゃぞうにん

せんちゆうむいちとう

ことば

捨閉閣抛・群賊・邪見・悪見・邪雜人・千中無一等の語を

み

いな

見ざるや否や。

だいに

まさ

ほうぼう

ひと

おうじ

お

たいじ

第二に、正しく謗法の人の人王地に処るをば対治すべき

しようもん

い

証文を出ださば、

ねはんぎようだいさん

い

けたい

かい

は

しようほう

そし

もの

涅槃経第三に云わく「懈怠にして戒を破し正法を毀る者

をば、王者・大臣・四部の衆は応当に苦治すべし。善男子よ。

おうじゃ だいじん しぶ まさ くじ ぜんなんし
もろもろ こくおう しぶ しゅ まさ つみあ いな

この諸の国王および四部の衆は、当に罪有るべきや不や。

いな せそん ぜんなんし もろもろ こくおう しぶ しゅ

不なり、世尊よ。善男子よ、この諸の国王および四部の衆

つみあ

だいじゅうに い

われむかし

は、なお罪有ることなし」。また第十二に云わく「我往昔を

おも えんぶだい

たいこく おう な

せんよ い

念うに、閻浮提において大国の王と作り、名づけて仙予と曰

だいじようきようてん あいねん きようじゅう

こころじゆんぜん

いき。大乘經典を愛念し敬重し、その心純善にして、

そあく しつと けんりん あ

ないしぜんなんし われ

とき

麤悪・嫉妬・慳悋有ることなし乃至善男子よ。我はその時に

こころ だいじよう おも

ばらもん ほうどう ひぼう

き

おいて心に大乘を重んず。婆羅門の方等を誹謗するを聞

き お そくじ

みようこん だん ぜんなんし

き、聞き已わって即時にその命根を断ず。善男子よ。この

いんねん

このかた

じごく

お

いじょう

因縁をもつて、これより已来、地獄に堕ちず」已上。

と

い

ぼんもうきよう

もん

み

びくとう

ししゅ

問うて云わく、梵網經の文を見るに、比丘等の四衆を

ひぼう

はらいざい

げんくう

ほうぼう

とが

あらわ

誹謗するは波羅夷罪なり。しかるに、源空が謗法の失を顕

あび

ごう

すは、あに阿鼻の業にあらずや。

こた

い

ねはんぎよう

もん

い

かしようぼさつ

せそん

もう

答えて曰わく、涅槃經の文に云わく「迦葉菩薩、世尊に言

によらい

なに

ゆえ

かれ

まさ

あびじごく

お

き

さく『如来よ。何が故ぞ彼は当に阿鼻地獄に堕つべしと記す

ぜんなんし

ぜんしやうびく

おお

けんぞくあ

みな

ぜんしやう

るや』と。『善男子よ。善星比丘は多く眷属有り。皆、善星

あらかん

どうか

え

おも

われ

か

あくじゃ

はこれ阿羅漢なり、これ道果を得つと謂えり。我、彼が悪邪

こころ

やぶ

ほつ

ゆえ

か

ぜんしやう

ほういつ

の心を壊らんと欲するが故に、彼の善星は放逸をもつて

ゆえ じごく お き いじよう もん ほういつ
の故に地獄に堕ちんと記す』と」已上。この文に「放逸」

ほうぼう な げんくう か ぜんしよう ほうぼう
とは、謗法の名なり。源空もまた、彼の善星のごとく、謗法

をもつての故に無間に堕つ。所化の衆、この邪義を知らざ
ゆえ げんくう いっさいちじん ごう せいしぼさつ
るが故に、源空をもつて一切智人と号し、あるいは勢至菩薩、

あるいは善導の化身なりと云う。彼の悪邪の心を壊らんが
ぜんどう けしん い か あくじや こころ やぶ
ための故に、謗法の根源を顕す。

ゆえ ほうぼう こんげん あらわ
ぼんもうきよう せつ ほうぼう もの ほか ししゆ ほとけいまし のたま
梵網經の説は謗法の者の外の四衆なり。仏誠に云

わく「謗法の人を見てその失を顕さざれば、仏弟子にあら
ほうぼう ひと み とが あらわ ぶつでし
ず」。故に涅槃經に云わく「我涅槃して後、その方面に随い、

ゆえ ねはんぎよう い われねはん のち ほうめん したが

じかい びく あ いぎぐそく しょうほう ごじ ほう やぶ もの
持戒の比丘有らん。威儀具足し正法を護持し、法を壊る者

み すなわ よ くけん かしやく ちようじ まさ し
を見て即ち能く驅遣し呵責し徴治せん。当に知るべし、こ

ひと ふく え むりよう しょうけ
の人は福を得んこと無量にして称計すべからず」。また云わ

ぜんびく ほう やぶ もの み お かしやく
く「もし善比丘あつて、法を壊る者を見て、置いて、呵責し

くけん こしよ まさ し ひと ぶつぼう なか あだ
驅遣し挙処せずんば、当に知るべし、この人は仏法の中の怨

よ くけん かしやく こしよ わ でし しん
なり。もし能く驅遣し呵責し挙処せば、これ我が弟子、真の

しょうもん いじよう
声聞なり」已上。

よ ぶつでし いちぶん い しよ つく ほうぼう
予、仏弟子の一分に入らんがために、この書を造り、謗法

とが あらわ せけん る ふ ねが じつぼう ぶつだ しょ
の失を顕し、世間に流布す。願わくは十方の仏陀、この書

にちからおいて力を副え、大悪法の流布を止め、一切衆生のだいあくほう謗法るふとどを救わしめたまえ。いっさいしゆじようほうぼう
すく

大文の第五に、善知識ならびに真実の法には値い難きこ
だいもん だいご ぜんちしき しんじつ ほう あ がた
とを明かさば、これについて三つ有り。一には受け難き人身、
あ がた ぶつぽう あ みつ あ いち う がた じんしん
値い難き仏法なることを明かし、二には受け難き人身を受
あ がた ぶつぽう あ あ う がた じんしん う
け値い難き仏法に値うといえども、悪知識に値うが故に三
あくどう お あ さん まさ まつだいほんぷ
悪道に墮つることを明かし、三には正しく末代凡夫のため
ぜんちしき あ
の善知識を明かす。

第一に、受け難き人身、値い難き仏法なることを明かさ

ば、

ねはんぎようさんじゆうさん い とき せそん じ すこ ど

涅槃經三十三に云わく「その時、世尊は、地の少しの土

と そうじよう お かしよう つ のたま

を取ってこれを爪上に置いて、迦葉に告げて言わく『こ

ど おお じつぼうせかい じ ど おお かしようばさつ ほとけ もう

の土多しや、十方世界の地の土多しや』。迦葉菩薩、仏に白

もう せそん そうじよう ど じつぼう ど ひ

して言さく『世尊よ。爪上の土は十方のあらゆる土に比せ

ぜんなんし ひとあ み す かえ じんしん

ざるなり』と。『善男子よ。人有つて、身を捨てて還つて人身

え さんあく み す じんしん う え しよこんまつた

を得、三悪の身を捨てて人身を受くることを得、諸根完く

ぐ ちゆうこく う しょうしん ぐそく よ どう しゆじゆう

具して中国に生まれ、正信を具足して能く道を修習し、

どう しゅじゅう お よ しやうどう しゅ しやうどう しゅ お

道を修習し已わつて能く正道を修し、正道を修し已わつ

よ げだつ え げだつ え お よ ねはん い そうじよう

て能く解脱を得、解脱を得已わつて能く涅槃に入るは爪上

ど じんしん す お さんあく み え さんあく み

の土のごとく、人身を捨て已わつて三悪の身を得、三悪の身

す さんあく み え しよこんぐ へんち しよう じゃとう

を捨てて三悪の身を得、諸根具せずして辺地に生じ、邪倒

み しん じゃとう しゅじゅう げだつ じようらく ねはん え

の信を信じ、邪道を修習し、解脱・常楽の涅槃を得ざる

じっぽうかい じ ど げだつ じようらく ねはん いじよう きようもん

は十方界のあらゆる地の土のごとし』と『已上、經文』。

もん おお ほうもん あつ いちぐ じんしん す

この文は、多く法門を集めて一具となせり。人身を捨て

かえ じんしん う そうじよう ど じんしん す

て還つて人身を受くるは爪上の土のごとく、人身を捨てて

さんあくどう お じっぽう ど さんあく み す

三悪道に墮つるは十方の土のごとし。三悪の身を捨てて

じんしん

う

そうじよう

ど

さんあく

み

す

かえ

人身を受くるは爪上の土のごとく、三悪の身を捨てて還つ

さんあく

み

う

じつぼう

ど

じんしん

う

て三悪の身を得るは十方の土のごとし。人身を受くるは

じつぼう

ど

じんしん

う

ろっこんか

そうじよう

ど

十方の土のごとく、人身を受けて六根欠けざるは爪上の土

じんしん

う

ろっこんか

へんち

しろう

のごとし。人身を受けて六根欠けざれども辺地に生ずるは

じつぼう

ど

ちゅうこく

しろう

そうじよう

ど

十方の土のごとく、中国に生ずるは爪上の土のごとし。

ちゅうこく

しろう

じつぼう

ど

ぶつぼう

あ

そうじよう

中国に生ずるは十方の土のごとく、仏法に値うは爪上の

ど

土のごとし。

い

いっせんたい

な

ぜんこん

だん

また云わく「一闡提と作らず、善根を断ぜず、かくのご

とう

ねはんきようてん

しん

そうじよう

ど

ないし

とき等の涅槃經典を信ずるは、爪上の土のごとし乃至

いっせんだい な もろもろ ぜんこん だん きょう しん もの

一闡提と作って、諸の善根を断じ、この経を信ぜざる者

じつぼうかい

じ ど

いじよう

きようもん

は、十方界のあらゆる地の土のごとし」〈已上、经文〉。こ

もん

ほつけ

ねはん

しん

いっせんだい

な

の文のごとくんば、法華・涅槃を信ぜずして一闡提と作る

じつぼう

ど

ほつけ

ねはん

しん

そうじよう

ど

は十方の土のごとく、法華・涅槃を信ずるは爪上の土のご

きようもん

み

かんるいお

がた

とし。この经文を見て、いよいよ感涙押さえ難し。

いま

にほんこく

しよにん

けんもん

たぶん

ごんきよう

ぎよう

今、日本国の諸人を見聞するに、多分は権教を行ず。

み

くち

じつきよう

ぎよう

こころ

たとい身・口には実教を行ずといえども、心にはまた

ごんきよう

そん

ゆえ

てんだいだいし

まかしかん

ご

い

権教を存す。故に、天台大師、摩訶止観の五に云わく「そ

ちどん

もの

どつけふか

い

ほんしん

うしな

ゆえ

すで

の癡鈍なる者は、毒氣深く入って本心を失うが故に、既に

しん

すなわ て い

ないしだいさいじゅ

ひと

ないし

それ信ぜざれば、則ち手に入らず乃至大罪聚の人なり乃至

よ

いと

もの

げれつ

じよう

もてあそ

しよう

はんぷ

いぬ

たとい世を厭う者も下劣の乗を翫び、枝葉に攀附し、狗

さむ

な

みこう

うやま

たいしやく

がりやく

あが

の作務に狎れ、獼猴を敬って帝釈となし、瓦礫を崇めて

みようじゅ

こくあん

ひと

どう

ろん

これ明珠なりとす。この黒闇の人、あに道を論ずべけんや」

いじよう

げんくう

しよけ

しゅ

ふか

さんどく

さけ

よ

だいっう

已上。源空ならびに所化の衆、深く三毒の酒に酔って大通

けちえん

ほんしん

うしな

ほっけ

ねはん

ふしん

おも

な

結縁の本心を失う。法華・涅槃において不信の思を作し、

いっせんだい

な

かんぎようとう

げれつ

じよう

よ

ほうべん

しようみようとう

一闡提と作り、観経等の下劣の乗に依って方便・称名等

がりやく

もてあそ

ほうねんぼう

みこう

うやま

ち えだいいち

たいしやく

の瓦礫を翫び、法然房の獼猴を敬って智慧第一の帝釈

おも

ほっけ

ねはん

によいしゅ

す

によらい

しようぎよう

さみ

と思ひ、法華・涅槃の如意珠を捨てて如来の聖教を編す

るは、権実二教を弁えざるが故なり。

ぐんじつにきよう わきま ゆえ
ぐけつ だいいち い えんどん き すうちよう

故に、弘決の第一に云わく「この円頓を聞いて崇重せざ

まこと きんだい だいいよう なら もの ぞうらん よ ゆえ

るは、良に近代に大乘を習う者の雑濫に由るが故なり。

だいいよう ぐんじつにきよう わきま ぞうらん い

大乘において権実二教を弁えざるを「雑濫」と云うなり。

ゆえ まっだい ほけきよう しん もの そうじよう ど

故に、末代において法華経を信ずる者は爪上の土のごとく、

ほけきよう しん ぐんきよう だらく もの じつぼう みじん

法華経を信ぜずして権教に墮落する者は十方の微塵のご

ゆえ みようらくなげ い ぞうまつ じよううす しんじん かはく

とし。故に、妙楽歎いて云わく「像末は情澆く信心寡薄に

えんどん きようほうくら あふ はこ み

して、円頓の教法蔵に溢れ函に盈つれども、しばらくも

しゆい すなわ みようもく いた しよう

思惟せず、便ち瞑目に至る。いたずらに生じ、いたずら

に死す。し 一に何ぞ痛ましきや」已上。いつ なん いた いじよう この釈は、ひとえに

みようらくだいし こんしゃ とお にほんこく とうだい かんが

妙楽大師、権者たるのあいだ、遠く日本国の当代を鑑み

て記し置くところの未来記なり。き お みらいき

と い ほうねんしょうにん もんてい うち いっさいきようぞう

問うて云わく、法然上人の門弟の内にも、一切経蔵を

あんち ほけきよう ぎよう もの あ なん みなほうぼう もの しよう

安置し法華經を行ずる者有り。何ぞ皆謗法の者と称せん

や。

こた い いっさいきよう ひら み ほけきよう よ

答えて曰わく、一切経を開き見て法華經を読むは、

なんぎようどう よし しょう せんちやくしゆう あくぎ たす

難行道の由を称し、選択集の悪義を扶けんがためなり。

きようろん ひら っ ほうぼう ま れい

經論を開くに付いていよいよ謗法を増すこと、例せば、

ぜんしよう じゅうにぶきよう だいばだつた ろくまんぞう ちしや よし

善星が十二部經、提婆達多が六万蔵のごとし。智者の由を

しよう じしん おも あくほう たす

称するは、自身を重くし惡法を扶けんがためなり。

だいに う がた じんしん う あ がた ぶつぽう あ

第二に、受け難き人身を受け値い難き仏法に値うといえ

あくちしき あ ゆえ さんあくどう お あ

ども、惡知識に値うが故に三惡道に墮つることを明かさば、

ぶつぞうきよう い だいしようこんぶつ めつご ごびく いちにん

仏藏經に云わく「大莊嚴仏の滅後に五比丘あり。一人は

しようどう し たおく ひと ど しにん じゃけん じゅう

正道を知つて多億の人を度し、四人は邪見に住す。この

しにん みようじゅう のち あびじごく お あお ふ うつぶ

四人、命終の後、阿鼻地獄に墮つ。仰ぎ臥し、伏しに臥

ひだりわき ふ みぎわき ふ おのおのくひやくまんおくさい ないし

し、左脇に臥し、右脇に臥すこと、各九百万億歳なり乃至

ざいけ しゅつけ ひと しんごん もろもろ

もしは在家・出家のこの人に親近せしもの、ならびに諸の

だんおつ

ろっぴやくしまんおく

ひと

しし

共

しょう

檀越、およそ六百四万億の人あり。この四師とともに生じ

共 し

だいじごく

あ

もろもろ

しょうしや

う

だいこう

ともに死して、大地獄に在って諸の焼煮を受く。大劫も

っ

しあくにん

ろっぴやくしまんおく

ひと

あびじごく

し尽けば、この四悪人および六百四万億の人、この阿鼻地獄

たほう

だいじごく

なか

てんしょう

いじよう

より他方の大地獄の中に転生す」已上。

ねはんぎようさんじゆうさん

い

とき じようちゆう

ひと

にけんあ

涅槃經三十三に云わく「その時に城中に一りの尼乾有

な

くとか

い

ないしぜんしょう

くとか

と

こた

い

り、名づけて苦得と曰う乃至善星、苦得に問う。答えて曰

われ

じきとき

み

え

ぜんしょう

あき

き

わく『我は食吐鬼の身を得たり。善星よ。諦らかに聴け』

ないし

とき

ぜんしょう

すなわ

わ

もと

かえ

ことば

乃至その時、善星は即ち我が所に還ってかくのごとき言

な

せそん

くとかにけん

みようじゆう

のち

さんじゆうさんてん

しょう

を作す。『世尊よ。苦得尼乾は命終の後に三十三天に生

ないし　とき　によらい　すなわ　かしよう　ぜんしよう　もと　ゆ

ぜり』乃至その時、如来は即ち迦葉とともに善星の所に往

きたもう。善星比丘は遙かに我が来るを見、見已わつて即

ち悪邪の心を生ず。悪心をもつての故に、生身にして陥

ち入つて阿鼻地獄に墮つ」已上。

善星比丘は仏の菩薩たりし時の子なり。仏に随い

奉り、出家して十二部經を受け、欲界の煩惱を壊り、四

禅定を獲得せり。しかりといえども、悪知識たる苦得外道

に値い、仏法の正義を信ぜざるによつて、出家の受戒・

十二部經の功德を失い、生身に阿鼻地獄に墮つ。苦岸等の

十二部經の功德を失い、生身に阿鼻地獄に墮つ。苦岸等の

十二部經の功德を失い、生身に阿鼻地獄に墮つ。苦岸等の

十二部經の功德を失い、生身に阿鼻地獄に墮つ。苦岸等の

十二部經の功德を失い、生身に阿鼻地獄に墮つ。苦岸等の

十二部經の功德を失い、生身に阿鼻地獄に墮つ。苦岸等の

十二部經の功德を失い、生身に阿鼻地獄に墮つ。苦岸等の

十二部經の功德を失い、生身に阿鼻地獄に墮つ。苦岸等の

十二部經の功德を失い、生身に阿鼻地獄に墮つ。苦岸等の

し びく しんごん ろつぴやくしまんおく ひと し し じつぼう

四比丘に親近せし六百四万億の人は、四師とともに十方の

だいあびじごく ふ いま よ どうぞく せんちやくしゅう たつと ゆえ

大阿鼻地獄を経。今の世の道俗は、選択集を貴ぶが故に、

げんくう ようぞう はい いっさいきよう なんぎよう じゃぎ よ

源空の影像を拝して一切経は難行なりとの邪義を読む。

れい にけん しよけ でし にけん いこつ らい さんあくどう お

例せば、尼乾の所化の弟子、尼乾の遺骨を礼して三悪道に墮

ねが いま よ どうぞく せんちやくしゅう じゃしよう

ちしがごとし。願わくは、今の世の道俗、選択集の邪正

し のち くよう くぎよう いた

を知つて後に供養・恭敬を致せ。しからずんば、定めて後悔

あ 有らん。

あ

ゆえ ねはんぎよう い ぼさつ まかさつ あくどうとう

故に、涅槃経に云わく「菩薩摩訶薩は、悪象等において

こころ ふい な あくちしき ふい こころ しよう なに

は心に怖畏無く、悪知識においては怖畏の心を生ず。何

ゆえ

あくぞうとう

よ

み

やぶ

をもつての故に。この悪象等はただ能く身を壊るのみにし

こころ

やぶ

あた

あくちしき

ふた

やぶ

ゆえ

て、心を壊ること能わず、悪知識は二つともに壊るが故に。

あくぞうとう

いっしん

やぶ

あくちしき

むりよう

この悪象等はただ一身を壊るのみにして、悪知識は無量の

ぜんしん

むりよう

ぜんしん

やぶ

あくぞうとう

よ

ふじよう

くさ

善身、無量の善心を壊る。この悪象等はただ能く不浄の臭き

み

はえ

あくちしき

よ

じようしん

じようしん

身を破壊するのみにして、悪知識は能く浄身および浄心

やぶ

あくぞうとう

よ

にくしん

やぶ

あくちしき

ほっしん

やぶ

を壊る。この悪象等は能く肉身を壊り、悪知識は法身を壊る。

あくぞう

ころ

さんしゅ

いた

あくゆう

ころ

かなら

さん

悪象に殺されては三趣に至らず、悪友に殺されては必ず三

しゅ

いた

あくぞうとう

み

あだ

あく

趣に至る。この悪象等はただ身の怨となるのみにして、悪

ちしき

ぜんぼう

あだ

ゆえ

ぼさつ

つね

まさ

もろもろ

知識は善法の怨とならん。この故に、菩薩は、常に当に諸

あくちしき おんり

いじよう

の悪知識を遠離すべし」已上。

こ ねが

いま よ どうぞく

しよ じゃぎ

請い願わくは、今の世の道俗、たといこの書を邪義なり

おも

ねん なげう

じゅうじゅうびばしやろん

と思うといえども、しばらくこの念を抛つて十住毘婆沙論

ひら

なんぎよう

うち

ほけきよう

にゆう

ふにゆう

かんが

を開き、その難行の内に法華經の入・不入を撿え、

せんちやくしゆう

じゆんししし

しじ

あん

のち

ぜひ

いた

選択集の「準之思之」の四字を案じて後に、是非を致せ。

あやま

あくちしき

しん

じゃほう

なら

しよう

むな

謬つて悪知識を信じ、邪法を習い、この生を空しゆうす

ることなかれ。

だいさん

まさ

まつだい

ぼんぷ

ぜんちしき

あ

第三に、正しく末代の凡夫のための善知識を明かさば、

と い

ぜんざいどうじ

ごじゆうよ

ちしき

あ

なか

問うて云わく、善財童子は五十余の知識に値いき。その中

に普賢・文殊・観音・弥勒等有り。常啼・班足・妙莊嚴・

あじゃせとう ふげん もんじゅ かのん みろくとう あ じょうたい はんそく みょうしようごん

阿闍世等は、曇無竭・普明・耆婆・二子・夫人に値い奉つ

しょうじ はな みな だいしょう ほとけ よ さ

て生死を離れたり。これらは皆、大聖なり。仏、世を去つ

のち し う かた めつご

ての後、かくのごときの師を得ること難しとなす。滅後に

りゅうじゅ てんじん さ なんがく てんだい あ

おいてまた竜樹・天親も去りぬ。南岳・天台にも値わず。

しょうじ はな

いかにしてか生死を離るべきや。

こた い まっだい しんじつ ぜんちしき あ

答えて曰わく、末代において真実の善知識有り。いわゆ

ほつけ ねはん

る法華・涅槃これなり。

と い ひと ぜんちしき つね なら

問うて云わく、人をもつて善知識となすは常の習いなり。

法をもつて知識となす証有りや。
ほう ちしき しょうあ

答えて云わく、人をもつて知識となすは常の習いなり。
こた い ひと ちしき つね なら

しかりといえども、末代において真の知識無ければ、法を
まつだい まこと ちしき な ほう

もつて知識となすに多くの証有り。摩訶止観に云わく「あ
ちしき おお しょうあ ま か し かん い

るいは知識に従い、あるいは経巻に従い、上に説くところ
ちしき したが きょうがん したが かみ と

ろの一実の菩提を聞く」已上。この文の意は、経巻をも
いちじつ ぼだい き いじょう もん こころ きょうがん

つて善知識となす。
ぜんちしき

法華経に云わく「もし法華経の閻浮提に行わるるを受持
ほけきょう い ほけきょう えんぶだい おこな じゆじ

することあらば、応にこの念を作すべし、『皆これ普賢の威
まさ ねん な みな ふげん い

じん ちから

いじよう

もん

こころ

まつだい

ほんぷ

ほけきよう

神の力なり』と」已上。この文の意は、末代の凡夫、法華經

しん

ふげん

ぜんちしき

ちから

を信ずるは普賢の善知識の力なり。

い

ほけきよう

じゆじ

どくじゆ

しようおくねん

また云わく「もしこの法華經を受持・読誦し、正憶念し、

しゆじゆう

しよしや

まさ

し

ひと

すなわ

修習し書写することあらば、当に知るべし、この人は則ち

しやかむにぶつ

み

ほとけ

くち

きようてん

き

釈迦牟尼仏を見る。仏の口よりこの經典を聞くがごとし。

まさ

し

ひと

しやかむにぶつ

くよう

いじよう

もん

当に知るべし、この人は釈迦牟尼仏を供養す」已上。この文

み

ほけきよう

しやかむにぶつ

ほけきよう

しん

ひと

を見るに、法華經は釈迦牟尼仏なり。法華經を信ぜざる人の

まえ

しやかむにぶつにゆうめつ

と

きよう

しん

もの

まえ

前には釈迦牟尼仏入滅を取り、この經を信ずる者の前に

めつご

ほとけ

ざいせ

は滅後たりといえども仏の在世なり。

い われじようぶつ

めつど

のち じつぼう

こくど

また云わく「もし我成仏して、滅度するの後、十方の国土

ほけきよう

と

ところあ

わ

とうみよう

きよう

において、法華經を説く処有らば、我が塔廟はこの經を

き

ゆえ

まえ

ゆげん

しようみよう

聴かんがための故に、その前に涌現して、証明をなさん」

いじよう

もん

こころ

われ

ほつけ

みようごう

とな

たほう

已上。この文の意は、我ら法華の名号を唱うれば、多宝

によらい

ほんがん

ゆえ

かなら

きた

如来は本願の故に必ず来りたもう。

い

しよぶつ

じつぼう

せかい

いま

せつぼう

また云わく「諸仏の十方の世界に在して説法したもうを、

いっしよ

かえ

あつ

いじよう

しやか

たほう

じつぼう

ことごとく一処に還し集めたもう」已上。釈迦・多宝・十方

しよぶつ

ふげんぼさつとう

われ

ぜんちしき

ぎ

よ

の諸仏・普賢菩薩等は、我らが善知識なり。もしこの義に依

われ

しゆくぜん

ぜんざい

じようたい

はんそくとう

すぐ

らば、我らはまた宿善、善財・常啼・班足等にも勝れた

かれ ごんきよう ちしき あ われ じつきよう ちしき あ

り。彼は権經の知識に値い、我らは実經の知識に値え

かれ ごんきよう ぼさつ あ われ じつきよう ぶつぼさつ あ

なり。彼は権經の菩薩に値い、我らは実經の仏菩薩に値い

たてまつ

奉ればなり。

ねはんきよう い ほう よ にん よ ち よ しき

涅槃經に云わく「法に依つて人に依らざれ。智に依つて識

よ いじよう ほう よ い ほつけ ねはん

に依らざれ」已上。「法に依つて」と云うは、法華・涅槃の

じようじゆう ほう にん よ ほつけ ねはん よ

常住の法なり。「人に依らざれ」とは、法華・涅槃に依ら

にん ぶつぼさつ ほつけ ねはん よ

ざる人なり。たとい仏菩薩たりといえども、法華・涅槃に依

ぶつぼさつ ぜんちしき ほつけ ねはん よ

らざる仏菩薩は善知識にあらず。いわんや、法華・涅槃に依

ろんじ やくしや にんし ち よ

らざる論師・訳者・人師においてをや。「智に依つて」とは、

ほとけ よ しき よ

仏に依る。「識に依らざれ」とは、等覺より已下なり。

いま よ せけん どうぞく げんくう ほうぼう とが かく

今の世の世間の道俗、源空の謗法の失を隠さんがために、

とく てんか あ ごんけ しょう えゆう

徳を天下に挙げて権化なりと称す。依用すべからず。外道

ごつう え よ やま かたむ うみ つ じんずう な

は、五通を得て能く山を傾け海を竭くすとも、神通無き

あごんきよう ぼんぷ およ らかん え ろくつう げん にじよう

阿含經の凡夫に及ばず。羅漢を得、六通を現ずる二乗は、

けごん ほうどう はんやや ぼんぷ およ けごん ほうどう はんやや とうがく

華嚴・方等・般若の凡夫に及ばず。華嚴・方等・般若の等覺

ぼさつ ほけきよう みようじ かんぎよう ぼんぷ およ

の菩薩も、法華經の名字・觀行の凡夫に及ばず。たとい

じんずう ちえ あ ごんきよう ぜんちしき もち

神通・智慧有りといえども、權教の善知識をば用いるべか

らず。

われ じょうもつ いっせんだい ほんぷ ほけきよう しん ほと

我ら常没の一闡提の凡夫の法華經を信ぜんと欲するは、

ぶつしよう あらわ せんびよう ゆえ みようらくだいしい

仏性を顕さんがための先表なり。故に、妙樂大師云わ

ないくん なん よ さと しよう ゆえ

く「内薫にあらざるよりは、何ぞ能く悟りを生ぜん。故に

し さと しよう ちから しんによ あ ゆえ みようくん

知んぬ、悟りを生ずること、力は真如に在り。故に、冥薫

げご いじよう ほけきよう ほか しじゅうよねん

をもつて外護となすなり」已上。法華經より外の四十余年の

しよきよう じっかいご ぐ な じっかいご ぐ と ないしん

諸經には、十界互具無し。十界互具を説かざれば、内心の

ぶっかい し ないしん ぶっかい し そと しようぶつ あらわ

仏界を知らず。内心の仏界を知らざれば、外の諸仏も顕れ

ゆえ しじゅうよねん ごんぎよう もの ほとけ み ほとけ

ず。故に、四十余年の權行の者は仏を見ず。たとい仏を

み たぶつ み にじよう じぶつ み

見るといえども、他仏を見るなり。二乗は自仏を見ざるが故

ゆえ

じようぶつな

にぜん ぼさつ

じしん じっかいごぶ み

に成仏無し。爾前の菩薩もまた、自身の十界互具を見ざれ

にじようかい じようぶつ み

ば、二乗界の成仏を見ず。

ゆえ しゅじようむへんせいがんど がん まんぞく ゆえ ぼさつ ほとけ

故に、衆生無辺誓願度の願も満足せず。故に、菩薩も仏を

み ぼんぶ じっかいごぶ し

見ず。凡夫もまた、十界互具を知らざるが故に、自身の仏界

あらわ ゆえ あみだによらい らいごう

も顕れず。故に、阿弥陀如来の来迎もなく、諸仏如来の加護

たと もうじん じしん かげ み

もなし。譬えば、盲人の自身の影を見ざるがごとし。

いま ほけきよう いた くかい ぶっかい ひら ゆえ しじゅうよねん

今、法華經に至つて九界の仏界を開くが故に、四十余年の

ぼさつ にじよう ろくぼん はじ じしん ぶっかい み

菩薩・二乗・六凡、始めて自身の仏界を見る。この時、こ

ひと まえ はじ ほとけ ぼさつ にじようた とき

の人の前に始めて仏・菩薩・二乗立ちたもう。この時に

にじよう ぼさつはじ じようぶつ ほんぷ はい おうじよう ゆえ

二乗・菩薩始めて成仏し、凡夫も始めて往生す。この故に、

ざいせ めつご いっさいしゆじよう まこと ぜんちしき ほけきよう

在世・滅後の一切衆生の誠の善知識は、法華經これなり。

じようず てんだいしゆう がくしや にぜん とうぶん とくどう ゆる

常途の天台宗の学者は、爾前において当分の得道を許せど

じぎ とうぶん とくどう ゆる

も、自義においてはなお当分の得道を許さず。しかりとい

しよ ぎ っ りやく

えども、この書においてはその義を尽くさず。略してこれ

き お き

を記せば、追つてこれを記せん。

だいもん だいろうく ほつけ ねはん よ ぎようじや ようじん あ

大文の第六に、法華・涅槃に依る行者の用心を明かさば、

いちだいきようもん しようれつ せんじん なんいとう さき だん すで

一代教門の勝劣・浅深・難易等においては、先の段に既に

これを出だす。この一段においては、一向に後世を念う末代

じようもつ ぎやく ほうぼう いっせんだいとう ぐにん しる

の常没の五逆・謗法・一闡提等の愚人のためにこれを注す。

りやく みつ あ いち ざいけ しょにん しょうほう ぐじ

略して三つ有り。一には在家の諸人、正法を護持するを

しょうじ はな あくほう たも さんあくどう お

もって生死を離れ、悪法を持つによって三悪道に墮つべき

あ に ほけきよう みようじ とな さん

ことを明かし、二にはただ法華經の名字ばかりを唱えて三

あくどう はな あ さん ねはんきよう ほけきよう

悪道を離るべきことを明かし、三には涅槃經は法華經のた

るつう な あ

めの流通と成ることを明かす。

だいいち ざいけ しょにん しょうほう ぐじ しょうじ はな

第一に、在家の諸人、正法を護持するをもって生死を離

あくほう たも さんあくどう お あ

れ、悪法を持つによって三悪道に墮つべきことを明かさば、

ねはんぎようだいさん

い

ほとけ

かしよう

つ

よ

涅槃經第三に云わく「仏、迦葉に告げたまわく『能く

しようほう

ごじ

いんねん

ゆえ

こんごうしん

じようじゆ

正法を護持する因縁をもつての故に、この金剛身を成就

え

い

とき

こくおうあ

な

することを得たり』と。また云わく「時に国王有り。名づ

うとく

い

ないしごほう

ゆえ

ないし

はかい

もろもろ

けて有徳と曰う乃至護法のための故に乃至この破戒の諸

あくびく

きわ

とも

せんとう

ないしおう

とき

ほう

の悪比丘と極めて共に戦鬪す乃至王、この時において法を

き

えお

こころおお

かんぎ

すなわ

聞くことを得已わつて、心大いに歡喜し、ついで即ち

みようじゆう

あしゆくぶつ

くに

しよう

いじよう

もん

命終して阿閼仏の国に生ず」已上。この文のごとくんば、

ざいけ

しよにん

べつ

ちぎような

ほうぼう

もの

たいじ

在家の諸人、別の智行無しといえども、謗法の者を対治す

くどく

しようじ

はな

る功德によつて生死を離るべきなり。

と い ざ い け し ょ に ん ぶ っ ぽ う ご じ よ う
問うて云わく、在家の諸人、仏法を護持すべき様、いか

ん。

こ た い ね は ん ぎ よ う い し ゅ じ よ う あ ざ い も つ

答えて曰わく、涅槃經に云わく「もし衆生有つて財物に

と ん じ ゃ く わ れ ま さ た か ら ほ ど こ の ち だ い ね は ん ぎ よ う

貪著せば、我当に財を施し、しかして後、この大涅槃經

す す よ な い し さ き あ い こ

をもつてこれを勧め読ましむべし乃至先に愛語をもつてそ

こ こ ろ し た が の ち よ う や ま さ だ い じ よ う だ い ね は ん ぎ よ う

の意に随い、しかして後、漸く当にこの大乘大涅槃經を

す す よ ぼ ん し ょ も の ま さ

もつてこれを勧め読ましむべし。もし凡庶の者ならば、当に

い せ い せ ま よ ぼ く し な こ こ ろ ず い じ ゅ ん

威勢をもつてこれに逼つて読ましむべし。もし憍慢なる者

わ れ ま さ ぼ く し な こ こ ろ ず い じ ゅ ん

ならば、我当にそれがために僕使と作り、その意に随順し、

かんぎ

それをして歡喜せしむべし。しかして後、また当に大涅槃を

きようどう

だいじようきよう

ひぼう

ものあ

もつてこれを教導すべし。もし大乘經を誹謗する者有ら

まさ せいりき

くだ

ふく

すで

ざいぶく

お

ば、当に勢力をもつてこれを摧いて伏せしめ、既に摧伏し已

のち

すす

だいねはん

よ

わつて、しかして後、勸めて大涅槃を讀ましむべし。もし

だいじようきよう

あいぎよう

ものあ

われみずか

まさ

い

くぎよう

大乘經を愛樂する者有らば、我躬ら当に往つて恭敬・

くよう

そんちよう

さんだん

いじよう

供養・尊重・讚歎すべし」已上。

と

い

いま

よ

どうぞく

せんちやくしゆう

しゆう

問うて云わく、今の世の道俗、ひとえに選択集に執し

ほつけ

ねはん

じしんふそうおう

ねん

な

て、法華・涅槃においては自身不相応の念を作すのあいだ、

ごしやくこんりゆう

ごころな

じやぎ

よし

しよう

ひとあ

護惜建立の心無く、たまたま邪義の由を称する人有らば、

ねんぶつひぼう　もの　しょう　あくみよう　てんか　ふ
念仏誹謗の者と称して悪名を天下に雨らす。これらはい
かん。

こた

い

じとう

そん

ほとけみずか

答えて曰わく、自答を存すべきにあらず。仏自らこの

しる

のたま

にんのうきよう

い

だいおう

われめつど

ことを記して云わく、仁王経に云わく「大王よ。我滅度し

のち

みらいせ

なか

しぶ

でし

もろもろ

しょうこく

おう

たいし

て後、未来世の中の四部の弟子、諸の小国の王・太子・

おうじすなわ

じゅうじ

さんぽう

まも

もの

うた

さんぽう

めつ

王子乃ちこれ住持して三宝を護る者、転たさらに三宝を滅

は

しししんちゆう

むし

みずか

しし

ほ

し破せんこと、師子身中の虫の自ら師子を食むがごとし。

げどう

おお

わ

ぶつぽう

やぶ

だいざいか

え

外道にはあらざるなり。多く我が仏法を壊り、大罪過を得ん。

しょうぎようすいはく

たみ

しょうぎような

ようや

あく

正教衰薄し、民に正行無く、漸く悪をなすをもつて、

その寿日じゆひに滅げんじて百歳ひやくさいに至いたらん。人ひと、仏教ぶつぎようを壊やぶらば、ま

た孝子こうしな無く、六親ろくしん不和ふわにして天神てんじんも祐たすけず、疾疫しつえき・悪鬼あつき、日ひ

に來きたつて侵害しんがいし、災怪さいけしゆび首尾れんかし、連禍れんかじゆうおう縦横しし、死じごくして地獄・

餓鬼がき・畜生ちくしように入いらん。また次下つぎしもに云いわく「大王だいおうよ。未來世みらいせ

の中の諸なかの小国もろもろの王しようこく、四部おうの弟子しぶ、自みづからこの罪つみを作る

は、破国はこくの因縁いんねんなり乃至ないし諸もろもろの悪比丘あくびくは、多おほく名利みようりを求め、

国王こくおう・太子たいし・王子おうじの前まえにおいて、自みづから破仏法はぶつぽうの因縁いんねん、破国はこく

の因縁いんねんを説とかん。その王おうわきま別ことばえずしてこの語しんちようを信聴ないしし乃至

その時ときに當あたつて正法将しようほうまさに滅めつせんとすること久ひさしからず」

いじよう

已上。

よ せんちやくしゆう

み

もん みらいき たが

余、選択集を見るに、あえてこの文の未来記に違わず。

せんちやくしゆう ほつけ

しんごんとう

しやうほう

さだ

ぞうぎよう

なんぎよう

い

選択集は法華・真言等の正法を定めて雑行・難行と云

まつだい

われ

じきそうおう

ぎよう

もの

い、末代の我らにおいては時機相応せず、これを行ずる者

せんちゆうむいち

ほとけかえ

ほつけとう

と

は千中無一にして、仏還つて法華等を説くといえども、

ほつけ

しんごん

しよぎよう

もん

と

ねんぶつ

いちもん

ひら

まつだい

法華・真言の諸行の門を閉じて念仏の一門を開く。末代に

ぎよう

もの

ぐんぞく

とう

さだ

とうせい

いっさい

においてこれを行ずる者を「群賊」等と定め、当世の一切の

どうぞく

しよ しん

ぎ

によらい

きんげん

おも

道俗をしてこの書を信じ、この義をもつて如来の金言と思

ゆえ

せけん

どうぞく

ぶつぼうこんりゆう

こころ な

わしむ。この故に、世間の道俗に仏法建立の意無く、

ほつけ しんごん しょうほう ほつすい っ てんにんげんしょう さん

法華・真言の正法の法水たちまちに竭き、天人減少して三

あくひ ぞうちよう せんちやくしゅう あくほう もよお

悪日に増長す。ひとえに、選択集の悪法の催すところ、

お じゃけん

起こすところの邪見なり。

きようもん ほとけしる われめつど のち のたま

この経文に仏記して「我滅度して後」と云えるは、

しょうほう すえはちじゅうねん ぞうほう すえはつぴやくねん まつぼう すえはつせんねん

正法の末八十年、像法の末八百年、末法の末八千年なり。

せんちやくしゅう い とき ぞうほう まつ まつぼう はじ

選択集の出ずる時は、像法の末・末法の始めなれば、

はつぴやくねん うち にんのうきよう き じせつ あ

八百年の内なり。仁王経に記するところの時節に当たれ

もろもろ しょうこく おう にほんこく おう ちゅう げぼん

り。「諸の小国の王」とは、日本国の王なり。中・下品の

ぜん ぞくさんおう しし しんちゅう むし

善は粟散王これなり。「師子身中の虫のごとし」とは、

ぶつでし げんくう

もろもろ あくびく

しよけ しゆ

仏弟子の源空これなり。「諸の悪比丘」とは、所化の衆こ

はぶつぼう いんねん はこく いんねん と

かみ あ

れなり。「破仏法の因縁、破国の因縁を説く」とは、上に挙

せんちやくしゆう ことば

おうわきま

ぐるところの選択集の語これなり。「その王別えずして

ことば しんちよう

いま よ どうぞく じゃぎ わきま

この語を信聴す」とは、今の世の道俗、邪義を弁えずし

しん

てみだりにこれを信ずるなり。

こ ねが どうぞく ほう じゃしよう ふんべつ

のちしようほう

請い願わくは、道俗、法の邪正を分別して、その後正法

つ ごせ ねが こんどじんしん うしな さんあくどう お のち

に付いて後世を願え。今度人身を失い、三悪道に堕ちて後

こうかい なん およ

に後悔すとも、何ぞ及ばん。

だいに ほつけ だいもく とな さんあくどう はな

第二に、ただ法華の題目ばかりを唱えて三悪道を離るべ

きことを明かさば、

ほけきよう だいご い もんじゆしり

ほけきよう むりよう

法華經の第五に云わく「文殊師利よ。この法華經は無量の

くに なか ないしみようじ き

国の中において、乃至名字をも聞くことを得べからず」。

だいはい い なんだち よ ほつけ みな じゆじ もの

第八に云わく「汝等はただ能く法華の名を受持せん者を

おうご ふく はか だいばほん い

擁護せんすら、福は量るべからず」。提婆品に云わく

みようほけきよう だいばだつたほん き じようしん しんぎよう ぎわく

「妙法華經の提婆達多品を聞いて、淨心に信敬して、疑惑

しよう じごく が き ちくしよう お だいばつねはんぎよう

を生ぜずんば、地獄・餓鬼・畜生に堕ちず」。大般涅槃經

みようじくどくほん い ぜんなんし ぜんによん あ きよう

名字功德品に云わく「もし善男子・善女人有つて、この經

みな き あくしゆ しよう ことわり あ

の名を聞いて惡趣に生ぜば、この処有ることなけん」

ねはんぎよう ほけきよう るつう ゆえ ひ
《涅槃経は法華経の流通なるが故に、これを引く》。

と い ほけきよう だいもく き げしん
問うて云わく、ただ法華経の題目を聞くといえども、解心

な さんあくしゅ のが
無くんば、いかにして三悪趣を脱れんや。

こた い ほけきよう る ふ くに う きよう
答えて云わく、法華経流布の国に生まれて、この経の

だいみよう き しん しょう しゆくぜん じんこう
題名を聞き信を生ずるは、宿善の深厚なるによれり。た

こんじよう あくにん むち かなら かこ しゆくぜん
とい今生は悪人・無智なりといえども、必ず過去の宿善

あ ゆえ きよう みな き しん いた もの ゆえ
有るが故に、この経の名を聞いて信を致す者なり。故に

あくどう お
悪道に堕ちず。

と い かこ しゆくぜん
問うて云わく、過去の宿善とはいかん。

こた

い

ほけきよう

だいに

い

きようぼう

答えて曰わく、法華經の第二に云わく「もしこの經法を

しんじゆ

ひと

かこ

ほとけ

信受することあらば、この人はすでにかつて、過去の仏を

み

くぎよう

くよう

ほう

き

見たてまつりて、恭敬・供養し、またこの法を聞けり」。

ほっしほん

い

によらいめつど

のち

にんあ

法師品に云わく「また如来滅度するの後に、もし人有つて

みようほけきよう

ないしいちげいっく

き

いちねん

ずいき

ないしまさ

妙法華經の乃至一偈一句を聞いて、一念も随喜せば乃至当

し

しよにんとう

じゅうまんおく

ほとけ

に知るべし、この諸人等は、すでにかつて十萬億の仏を

くよう

るつう

ねはんぎよう

い

しゆじようあ

供養せしなり」。流通たる涅槃經に云わく「もし衆生有つ

きれんがしやとう

しよぶつ

ぼだいしん

おこ

すなわ

よ

て、熙連河沙等の諸仏において菩提心を發さば、乃ち能く

あくせ

きようてん

じゆじ

ひぼう

この惡世において、かくのごとき經典を受持して誹謗を

しょう ぜんなんし よ いちごうがしやとう しよぶつせそん

生ぜず。善男子よ。もし能く一恒河沙等の諸仏世尊におい

ぼだいしん おこ のち すなわ よ あくせ なか

て菩提心を発することあらば、しかる後に乃ち能く悪世の中

ほう ぼう ふみ あいぎよう いじよう

において、この法を謗ぜず、この典を愛敬せん」へ已上、

きようもん

経文。

もん さき げしん な

これらの文のごとくんば、たとい先に解心無くとも、こ

ほけきよう き ぼう だいぜん しよしよう そ さん

の法華経を聞いて謗ぜざるは、大善の所生なり。夫れ、三

あく しょう う だいじ みじん おお にんげん しょう う

悪の生を受くるは大地の微塵より多く、人間の生を受く

そうじよう ど すく ないし しじゅうよねん しよきよう あ

るは爪上の土より少なし。乃至、四十余年の諸経に値う

だいじ みじん おお ほつけ ねはん あ そうじよう ど

は大地の微塵よりも多く、法華・涅槃に値うは爪上の土よ

すく

かみ あ

ねはんぎよう

さんじゆうさん

もん

み

り少なし。上に挙ぐるところの涅槃經の三十三の文を見る

いちじいつく

きよう

しん

べし。たとい一字一句なりといえども、この經を信ずるは

しゆくえんたこう

宿縁多幸なり。

と い

ほけきよう

しん

あくえん

したが

問うて云わく、たとい法華經を信ずといえども惡縁に随

なん

さんあくどう

お

わば、何ぞ三惡道に墮ちざらんや。

こた

い

げしんな

もの

ごんきよう

あくちしき

あ

じつきよう

答えて曰わく、解心無き者、權教の惡知識に遇つて実教

たい

あくし

しん

とが

かなら

さんあくどう

お

を退せば、惡師を信ずる失によつて、必ず三惡道に墮つべ

か

ふきようきようき

しゆ

ごんにん

だいふうけちえん

もの

さんぜん

きなり。彼の不輕輕毀の衆は權人なり。大通結縁の者の三千

じんてん

へ

ほけきよう

たい

ごんきよう

うつ

ゆえ

塵点を歴しは、法華經を退して權教に遷りしが故なり。

ほけきよう しん やから ほけきよう しん す ごんにん したが

法華經を信ずるの輩は、法華經の信を捨てて權人に随わ

ほか せけん あくごう ほつけ くだく およ

んより外は、世間の惡業においては法華の功德に及ばざる

ゆえ さんあくどう お

が故に、三惡道に墮つべからざるなり。

と い にほんこく ほつけ ねはんうえん じ いな

問うて云わく、日本国は法華・涅槃有縁の地なりや否や。

こた い ほけきようだいはいち い によらいめつ のち

答えて云わく、法華經第八に云わく「如来滅して後にお

えんぶだい うち ひろ る ふ だんぜつ

いて、閻浮提の内に、広く流布せしめて、断絶せざらしめ

しち まき い えんぶだい こうせんる ふ だんぜつ

ん」。七の卷に云わく「閻浮提に広宣流布して、断絶せしむ

ねはんぎようだい い だいじようきようてん

ることなけん」。涅槃經第九に云わく「この大乘經典

だいねはんぎよう なんぼう もろもろ ぼさつ

大涅槃經もまたかくのごとし。南方の諸の菩薩のための

ゆえ まさ ひろ る ふ いじよう きようもん さんぜんせかいひろ

故に、当に広く流布すべし」〈已上、經文〉。三千世界広し

ほとけみずか ほつけ ねはん なんぼう る ふ ところ

といえども、仏自ら法華・涅槃をもつて南方を流布の処

さだ なんぼう しょこく なか にほんこく こと ほけきよう

と定む。南方の諸国においては、日本国は殊に法華經の

る ふ ところ

流布すべき処なり。

と い しょう

問うて云わく、その証いかん。

こた い じようこう ほつけほんぎようごき い らじゅうさんぞう

答えて曰わく、肇公の法華翻經後記に云わく、羅什三蔵、

しゆりやそまさんぞう あ たてまつ ほけきよう さず とき ことば

須利耶蘇摩三蔵に値い奉つて法華經を授かる時の語に

い ぶつにちせいざん かく いようとうほく て ふみ とうほく

云わく「仏日西山に隠れ、遺耀東北を照らす。この典、東北

しょこく うえん なんじ つつし でんぐ いじよう とうほく

の諸国に有縁なり。汝、慎んで伝弘せよ」已上。「東北」

とは、日本なり。西南の天竺より東北は、日本を指すなり。

ゆえ えしん いちじようようけつ い にほんいつしゆう えんきじゆんいち

故に、恵心、一乗要決に云わく「日本一州、円機純一な

ちようや えんきんおな いちじよう き しそ きせん

り。朝野・遠近同じく一乗に帰し、緇素・貴賤ことごとく

じようぶつ ご いじよう ねが にほんこく いま よ どうぞく

成仏を期す」已上。願わくは、日本国の今の世の道俗、

せんちやくしゆう くじゆう す ほつけ ねはん げんもん よ じようこう

選択集の久習を捨てて法華・涅槃の現文に依り、肇公・

えしん にほん き たの ほつけしゆぎよう あんじん くわだ

恵心の日本の記を侍んで法華修行の安心を企てよ。

と い ほけきようしゆぎよう もの じようど

問うて云わく、法華経修行の者、いずれの浄土を期すべ

きや。

こた い ほけきようにじゆうはつぽん かんじん じゆりようほん つた

答えて曰わく、法華経二十八品の肝心たる寿量品に云わ

く「我は常にこの娑婆世界に在り」。また云わく「我は常に

われ つね

わ

しやばせかい

あ

い

われ

つね

ここに住す」。また云わく「我がこの土は安穩なり」文。

もん

い

わ

ど

あんのん

もん

この文のごとくんば、本地久成の円仏はこの世界に在せり。

ど す

ど

ねが

ゆえ

ほけきよう

この土を捨てていずれの土を願うべきや。故に、法華經

しゆぎよう

もの

じゆう

ところ

じようど

おも

なん

修行の者の住するところの処を浄土と思ふべし。何ぞ

わずら

たしよ

もと

ゆえ

じんりきほん

い

煩わしく他処を求めんや。故に、神力品に云わく「もし

きようがん

じゆう

ところ

おんちゆう

經卷の住するところの処ならば、もしは園中において

りんちゆう

じゆ

もと

も、もしは林中においても、もしは樹の下においても、も

そうぼう

びやくえ

いえ

でんどう

しは僧坊においても、もしは白衣の舎にても、もしは殿堂に

あ

せんごくこうや

ないしまさ

し

在っても、もしは山谷曠野にても乃至当に知るべし、この

ところ

すなわ

どうじよう

ねはんぎよう

い

ぜんなんし

処は即ちこれ道場なり」。涅槃経に云わく「善男子よ。

だいねはんみみよう

きようてん

るふ

ところ

まさ

し

この大涅槃微妙の經典の流布するところの処は、当に知

じ

すなわ

こんごう

なか

しよにん

るべし、その地は即ちこれ金剛なり。この中の諸人もまた

こんごう

いじよう

ほつけ

ねはん

しん

ぎようじゃ

よしよ

金剛のごとし」已上。法華・涅槃を信ずる行者は、余処を

もと

きよう

しん

ひと

じゆう

求むべきにあらず。この経を信ずる人の住するところの

ところ

すなわ

じようど

処は、即ち浄土なり。

と

い

けごん

ほうどう

はんにや

あごん

かんぎようとう

しよきよう

問うて云わく、華嚴・方等・般若・阿含・觀経等の諸経

み

とそつ

さいほう

じつぼう

じようど

すす

うえ

ほけきよう

を見るに、兜率・西方・十方の浄土を勧む。その上、法華経

の文を見るに、また兜率・西方・十方の浄土を勧む。何ぞ、
これらの文に違して、ただこの瓦礫・荊棘の穢土を勧むる
や。

こた い にぜん じょうど く おんじつじょう しゃかによらい あらわ
答えて曰わく、爾前の浄土は久遠実成の釈迦如来の現

すところの浄土にして、実には皆穢土なり。法華経はまた

ほうべん じゅりよう にほん じゅりようほん いた じつ じょうど さだ
方便・寿量の二品なり。寿量品に至つて実の浄土を定む

とき ど すなわ じょうど さだ お とそつ
る時、この土は即ち浄土と定め了わんぬ。ただし、兜率・

あんよう じつぽう なん いた にぜん みようもく あらた
安養・十方の難に至つては、爾前の名目を改めずして、

ど とそつ あんようとう な つ れい きよう
この土において兜率・安養等の名を付く。例せば、この経

さんじよう

な あ

さんじようあ

に三乗の名有りといえども、三乗有らざるがごとし。「さ

かんぎようとう

さ

もち

しやく

こころ

らに觀經等を指すを須いざるなり」の釈の意これなり。

ほけきよう

けちえんな

しゆじよう

とうせい

さいほうじようど

ねが

がりやく

法華經に結縁無き衆生の当世に西方浄土を願うは、瓦礫の

ど

ねが

ほけきよう

しん

しゆじよう

まこと

ぶんでん

土を樂うこれなり。法華經を信ぜざる衆生は、誠に分添の

じようどな

浄土無きものなり。

だいさん

ねはんぎよう

ほけきようるつう

と

第三に、涅槃經は法華經流通のためにこれを説きたもう

あ

ことを明かさば、

と

い

こうたく

ほううんほつし

どうじよう

え かんとう

問うて云わく、光宅の法雲法師ならびに道場の慧觀等の

せきとく

ほけきよう

だいしじ

きよう

さだ

むじよう

じゆくそみ

碩徳は、法華經をもつて第四時の經と定め、無常の熟蘇味

と立つ。た 天台智者大師は法華・涅槃は同味なりと立つといてんだいちしやだいし ほつけ ねはん どうみ た

えども、また拈拾の義を存す。くんじゆう ぎ そんなに しとも ごんげ たが 二師共に権化なり、互いに

徳行を具せり。とくぎよう ぐ いずれを正として我らが迷心を晴らすべしょう われ めいしん は

きや。

答えて曰わく、こた い たとい論師・訳者たりといえども、仏のほとけ

教えに違して、おし い 権実二教を判ぜずんば、しばらく疑いを加くわ

うべし。え かん ちごん かじよう ぜんどうとう しゃく いかにいわんや、唐土の人師たる天台・南岳・光宅・

慧観・智儼・嘉祥・善導等の釈においてをや。まっだい たとい末代

の学者たりといえども、がくしや 「法に依つて人に依らざれ」の義をぎ

存して、本經・本論に違わずんば、信用を加うべし。

問うて云わく、涅槃經の第十四卷を開きたるに、五十年の

諸大乘經を挙げて前四味に譬え、涅槃經をもつて醍醐味

に譬う。諸大乘經は涅槃經より劣ること百千万倍なりと

定め了わんぬ。その上、迦葉童子の領解に云わく「我、今日

より始めて正見を得たり。これよりの前は我らことごとく

邪見の人と名づく」と。この文の意は、涅槃經より已前の

法華等の一切の衆典を皆「邪見」と云うなり。当に知るべ

し、法華經は邪見の經にして、いまだ正見の仏性を明ら

めざるなり。故に、天親菩薩の涅槃論に諸経と涅槃との

しょうれつ

さだ

ゆえ

てんじんぼさつ

ねはんろん

しよきよう

ねはん

勝劣を定むる時、法華経をもつて般若経に同じて、同じ

だいいしじ

おき

しょうけん

ねはんぎよう

どう

じやけん

く第四時に摂めたり。あに正見の涅槃経をもつて邪見の

ほけきよう

るつう

法華経の流通とせんや、いかん。

こた

い

ほけきよう

げんもん

み

ほとけ

ほんかいのこ

答えて曰わく、法華経の現文を見るに、仏の本懐残すこ

ほうべんぼん

い

いままさ

とき

となし。方便品に云わく「今正しくこれその時なり」。

じゆりようほん

い

つね

みずか

ねん

な

なに

寿量品に云わく「毎に自らこの念を作す。何をもつてか

しゆじよう

むじようどう

い

すみ

ぶつしん

じようじゆ

衆生をして、無上道に入り、速やかに仏身を成就するこ

え

じんりきほん

い

よう

い

とを得しめんと」。神力品に云わく「要をもつてこれを言わ

によらい　いつさい　しょう　ほうないしみな　きよう　せんじけんぜつ

ば、如来の一切の所有の法乃至皆この経において宣示顕説

いじよう　げんもん　しゃかによらい　ないしよう　みな　きよう

す」已上。これらの現文は、釈迦如来の内証は皆この経に

っ　うえ　たほう　じつぼう　しよぶつ　らいじゆう

尽くしたもう。その上、多宝ならびに十方の諸仏、来集の

にわ　しゃかによらい　いこんとう　ことば　しょう　ほけきよう

庭において、釈迦如来の已今当の語を証し、法華経のご

きような　さだ　お　たほう　しよぶつ　ほんど

とき経無しと定め了わんぬ。しかるに、多宝・諸仏、本土

かえ　のち　しゃかいちぶつ　いへん　そん　かえ

に還つて後に、ただ釈迦一仏のみ異変を存して、還つて

ねはんぎよう　と　ほけきよう　いや　たればと　しん　ふか

涅槃経を説いて法華経を卑しめば、誰人かこれを信ぜん。深

ぎ　そん　ねはんぎよう　だいく　み

くこの義を存せよ。したがって涅槃経の第九を見るに、

ほけきよう　るつう　と　い　きよう　よ　い

法華経を流通して説いて云わく「この経、世に出ずるは、

か かじつ りやく おお いっさい あんらく

彼の菓実の利益するところ多く一切を安樂ならしむるがご

よ しゅじよう ぶっしよう み ほっけ なか はっせん

とく、能く衆生をして仏性を見せしむ。法華の中の八千の

しょうもん きべつ さず え だいかじつ じよう

声聞の記別を授かることを得て大菓実を成ずるがごとし。

しゅうしゅうとうぞう

しよさ

秋収冬蔵して、さらに所作なきがごとし」。

もん ほけきよう じゃけん ねはんぎよう

この文のごとくんば、法華経もし邪見ならば、涅槃経も

じゃけん ほけきよう だいしゅう ねはんぎよう くんじゅう

あに邪見にあらずや。法華経は大収、涅槃経は拈拾なり

み お ねはんぎよう みずか ほけきよう おと よし しょう

と見え了わんぬ。涅槃経は自ら法華経より劣るの由を称

ほけきよう とうせつ もん そうい かしよう りようげ

す。法華経の当説の文、あえて相違なし。ただし、迦葉の領解

だいじゅうし もん ほけきよう くだ もん かしよう

ならびに第十四の文は、法華経を下す文にあらず。迦葉、

じしん

しよけ

しゅ

いまはじ

ほけきよう

と

自身ならびに所化の衆、今始めて法華經に説くところの

じようじゆうぶつしよう

くおんじつじよう

さと

ゆえ

わ み さ

常住仏性・久遠実成を覚るが故に、我が身を指して、

いぜん

じゃけん

い

ほけきよう

いぜん

これより已前は邪見なりと云う。法華經より已前の

むりようぎきよう

きら

しよきよう

ねはんぎよう

かさ

あ

無量義經に嫌うところの諸經を、涅槃經に重ねてこれを挙

きら

ほけきよう

きら

ねはんろん

げて嫌うなり。法華經を嫌うにはあらざるなり。また涅槃論

いた

ろん

か っ

てんじんぼさつ

に至つては、これらの論は書き付くるがごとく、天親菩薩の

ぞう ぼだいるし

やく

ほつけろん

てんじんぼさつ

ぞう

ぼだい

造、菩提流支の訳なり。法華論もまた、天親菩薩の造、菩提

るし やく

きようもん

い

おお

ねはんろん

流支の訳なり。經文に違することこれ多し。涅槃論もまた

ほんきよう

い

まさ

し

やくしや

あやま

しんよう

およ

本經に違す。当に知るべし、訳者の誤りなり。信用に及ば

ず。

と い さき おし も のち おし
問うて云わく、先の教えに漏れたる者を、後の教えにこ

う と とくどう るつう しょう あごんきよう

れを承け取って得道せしむるを流通と称せば、阿含経は

けごんきよう るつう な ないし ほけきよう ぜんしみ るつう

華嚴経の流通と成るべしや。乃至、法華経は前四味の流通と

な

成るべしや、いかん。

こた い ぜんしみ しよきよう ぼさつ にんてんとう とくどう ゆる

答えて曰わく、前四味の諸経は菩薩・人天等の得道を許

けつじようしよう にじよう むしようせんだい じようぶつ ゆる

すといえども、決定性の二乗、無性闡提の成仏を許さず。

うえ ぶつ い さぐ じつ かんが

その上、仏意を探つて実をもつてこれを檢うるに、また

ぼさつ にんてんとう とくどう じっかいごぐ と ゆえ

菩薩・人天等の得道もなし。十界互具を説かざるが故に。

くおんじつじよう

ゆえ

久遠実成なきが故に。

と い

しようもん

問うて云わく、証文いかん。

こた

い

ほけきようほうべんぼん

い

しようじよう

答えて云わく、法華経方便品に云わく「もし小乗をも

ないしいちにん

け

われ すなわ

けんどん

だ

じ

つて乃至一人をも化せば、我は則ち慳貪に堕せん。この事

ふか

いじよう

もん

こころ

いませんちやくしゆう

じやぎ

は不可となす」已上。この文の意は、今選択集の邪義を

は

よじ

せん

ゆえ

にぜん

破せんがために余事をもつて詮となさざるが故に、爾前

とくどう

うむ

じつぎ

い

お

かんが

得道の有無の実義はこれを出ださず。追つてこれを撿えん。

しじゆうよねん

しよきよう

じつ

ぼんぷ

とくどうな

ゆえ

ただし、四十余年の諸経は実には凡夫の得道無きが故に、

ほけきよう

にぜん

るつう

ほけきよう

じつかいご

法華経は爾前の流通とはならず。法華経において十界互

ぐ くおんじつじょう あらわ お
具・久遠実成を顕し了わんぬ。 故に涅槃経は法華経のた
るつう な
めに流通と成るなり。

だいもん だいしち と したが こた
大文の第七に、問いに随つて答えば、

まつだい ぐにん かみ ろくもん まん いち ほけきよう しん
もし末代の愚人、上の六門によつて万が一も法華経を信

ごんしゅう しよにん じわく へんしゅう
ぜば、権宗の諸人、あるいは自惑により、あるいは偏執に

ほけきよう ぎようじや は おお しじゅうよねん
よつて、法華経の行者を破せんがために、多く四十余年な

ねはんとう しよきよう ひ なん
らびに涅槃等の諸経を引いてこれを難ぜん。しかるに、

ごんきよう しん ひと おお いせい
権教を信ずる人はこれ多く、あるいは威勢により、あるい

せけん しえん

ひと こころ したが

せろ わた

は世間の資縁により、人の意に随つて世路を亘らんがた

ごんぎよう

かくしやおお

じつきよう

ちしやすく

めに、あるいは権教には学者多く、実教には智者少なし、

ぜひ

まん

いち

じつきよう

しん

もの

是非について万が一も実教を信ずる者あるべからず。この

ゆえ

いちだん

えら

ごんにん

じやなん

ふせ

故に、この一段を撰んで権人の邪難を防がん。

と い

しよしゆう

かくしやなん

い

けごんぎよう

ほうしん

問うて云わく、諸宗の学者難じて云わく「華嚴経は報身

によらい

と

しちしよはちえ

みな

とんごく

とんしよう

ほうもん

如来の説くところなり。七処八会、皆、頓極・頓証の法門

ほけきよう

おうじんによらい

と

きようしゆすで

ゆうれつ

なり。法華経は応身如来の説くところなり。教主既に優劣

あ

ほうもん

なん

せんじん な

たいごうしゆ

有れば、法門において何ぞ浅深無からん。したがって対告衆

ほうえ

くどくりん

ごんごうどうとう

なが

にじよう

まじ

ほけきよう

も法慧・功德林・金剛幢等なり。永く二乗を雑えず。法華経

しやりほつとう

は舍利弗等をもつて

たいごうしゆ

けごんしゆう

なん

対告衆となす」〔華嚴宗の難〕。

ほつそうしゆう

げじんみつきようとう

えびよう

なん

法相宗のごときは解深密経等をもつて依憑となし、難を

くわ

い

げじんみつきよう

もんじゆ

かんのんとう

たいごうしゆ

加えて云わく「解深密経は文殊・観音等をもつて対告衆と

しょうぎしょうぼさつ

りようげ

いちだい

う

くう

ちゆう

せん

なす。勝義生菩薩の領解には、一代を有・空・中と詮ず。

なか

ちゆう

けごん

ほつけ

ねはん

じんみつとう

ほけきよう

その中の中とは、華嚴・法華・涅槃・深密等なり。法華経の

しんげほん

ごじ

りようげ

しだいしようもん

ぼさつ

しょうもん

信解品の五時の領解は、四大声聞なり。菩薩と声聞との

しょうれつ

てんち

勝劣は天地なり」。

じようどしゆう

どうり

た

い

われ

ほつけとう

浄土宗のごときは道理を立てて云わく「我らは法華等の

しよきよう

ひぼう

かれ

しよきよう

しよう

だいにん

諸経を誹謗するにあらず。

彼らの諸経は正には大人のた

ぼう

ほんぷ

だんわくりようり

りじん

おし

め、傍には凡夫のためなり。

断惑証理、理深の教えにして、

まつだい

われ

ぎよう

せんにん

なか

いちにん

か

き

あ

末代の我らこれを行ずるに、千人の中に一人も彼の機に当

ざいけ

しよにん

たぶん

もんじ

み

けごん

ほっそうとう

たらず。在家の諸人、多分は文字を見ず。また華嚴・法相等

な

き

ぎ

し

じようどしゆう

こころ

の名を聞かず。いわんや、その義を知らんや。浄土宗の意

われ

ほんぷ

くち

まか

ろくじ

みようごう

とな

は、我ら凡夫はただ口に任せて六字の名号を称うれば、

げんざい

あみ

だによらい

にじゆうご

ぼさつとう

つか

み

かげ

したが

現在に阿弥陀如来は二十五の菩薩等を遣わし、身に影の随

ひやくじゆうせんじゆう

ぎようじゃ

いによう

まも

うがごとく百重千重に行者を圍繞してこれを守りたも

ゆえ

げんせ

しちなん

すなわ

めつ

しちふく

すなわ

しよう

ないし

う。故に、現世には七難は即ち滅し七福は即ち生じ、乃至、

りんじゆう　とき　かなら　らいごう

かんのん　れんだい　じよう

しゆゆ

臨終の時は必ず来迎あつて、観音の蓮台に乗じ、須臾の

あいだ　じようど　いた　ごう　したが　れんげあ　ほけきよう　き

間に浄土に至り、業に随つて蓮華開け、法華経を聞いて

じつそう　さと　なん　わずら　えど　よぎよう　ぎよう　なん

実相を覚る。何ぞ煩わしく穢土において余行を行じて何

せん　あ　ばんじ　なげう　いつこう　みようごう　とな　うんぬん

の詮か有る。ただ万事を抛つて一向に名号を称えよ」云々。

ぜんしゆうとう　ひと　いちだいしろうぎよう　つき　さ　ゆび

禅宗等の入云わく「二代聖教は月を指す指なり。

てんち　にちがつとう　なんだち　もうしん　い　じつぼう　じようど

天地・日月等も汝等が妄心より出でたり。十方の浄土も

しゆうしん　ようそう　しゃか　じつぼう　ぶつだ　なんじ　かくしん　へん

執心の影像なり。釈迦・十方の仏陀は汝が覚心の変ずる

もんじ　しゆう　もの　くいぜ　まも　ぐにん　わ

ところなり。文字に執する者は株を守る愚人なり。我が

だるまだいし　もんじ　た　ほうべん　か　いちだいしろうぎよう　ほか

達磨大師は文字を立てず、方便を仮らず。一代聖教の外に、

ほとけ かしよう いん ほう つた ほけきやうとう しんじつ

仏、迦葉に印してこの法を伝う。法華経等はいまだ真実を

の いじよう

宣べず」已上。

しよしゆう なん いち ほけきよう しんじん

これらの諸宗の難、一にあらず。いかんぞ法華経の信心

やぶ

を壊らざるべきや。

こた い ほけきよう ぎようじや しんちゆう しじゆうよねん い

答えて云わく、法華経の行者は心中に「四十余年」「已

こんとう みな しんじつ ほう よ にん よ とう もん

今当」「皆これ真実なり」「法に依って人に依らざれ」等の文

そん そと ことば い なん したが

を存し、しかも外に語にこれを出ださず、難に随ってこ

と た しゆうぎ

れを問うべし。「そもそも立つるところの宗義はいずれの

きよう よ かれ きよう ひ ひ したが

経に依るや」と。彼、経を引かば、引くに随ってまたこ

れを尋ねよ。二代五十年の間の説の中に法華經より先か、

のち たず いちだいごじゅうねん あいだ せつ なか ほけきよう さき

後か、同時なるか、また先後不定なるか」と。もし「先」

のち どうじ せんごふじよう さき

と答えば、「いまだ眞実を顕さず」の文をもつてこれを責め

こた しんじつ あらわ もん せ

よ。あえて彼の經の説相を尋ぬることなかれ。「後」と答え

か きよう せつそう たず のち こた

ば、「当説」の文をもつてこれを責めよ。「同時」と答えば、

とうせつ もん せ どうじ こた

「今説」の文をもつてこれを責めよ。「不定」と答えば、「不定

こんせつ もん せ ふじよう こた ふじよう

の經は大部の經にあらず。一時一会の説にして、また物の

きよう だいぶ きよう いちじいちえ せつ もの

数にあらず。その上、不定といえども三説を出でず」と。

かず うえ ふじよう さんせつ い

たとい百千万の義を立つといえども、「四十余年」等の文

ひやくせんまん ぎ た しじゅうよねん とう もん

の こもう しょう

ほか もち

ほとけ

を載せて虚妄と称せざるより外は用いるべからず。仏の

ゆいごん ふりようぎきよう よ

い ゆえ

ちごん

遺言に「不了義経に依らざれ」と云うが故なり。また智儼・

かじよう じおん ぜんどうとう ひ

とく た なん

嘉祥・慈恩・善導等を引いて徳を立てて難ずといえども、

ほつけ ねはん い

にんし

もち

ほう

法華・涅槃に違する人師において是用いるべからず。「法に

よ にん よ

きんげん あお ゆえ

依つて人に依らざれ」の金言を仰ぐが故なり。

ほけきよう しん

ぐしや

にしゆ しんじん た

いち

また法華経を信ぜん愚者のために、二種の信心を立つ。一

ほとけ っ

しん た

に

きよう

っ

しん た

には仏に就いて信を立て、二には経に就いて信を立つ。

ほとけ

っ

しん た

ごんしゆう

かくしやきた

なん

い

仏に就いて信を立つとは、権宗の学者来り難じて云わ

ぜんどうおしよう

さんまいほつとく

にんし

ほんじみだ

けしん

ん。「善導和尚は三昧発得の人師にして、本地弥陀の化身な

じおんだいし

じゅういちめんかんのん

けしん

ひつたん

り。慈恩大師は十一面観音の化身にして、また筆端より

しやり ふ

しよにん みなかれがれ

きようぎよう

よ

みな

舍利を雨らす。これらの諸人は皆彼々の経々に依つて皆

しようあ

なん

なんじ

か

きよう

よ

か

し

ぎ

証有り。何ぞ、汝、彼の経に依らず、また彼の師の義を

もち

用いざるや」と。

こた

い

なんじき

いっさい

ごんしゆう

だいし

せんとか

答えて曰わく、汝聞け。一切の権宗の大師・先徳なら

しやりほつ

もくれん

ふげん

もんじゆ

かんのん

ないし

あみだ

やくし

びに舍利弗・目連、普賢・文殊・観音、乃至、阿弥陀・薬師・

しやかによらい

われ

まえ

あつ

と

ほけきよう

なんだち

き

釈迦如来、我らの前に集まつて説いて「法華経は汝等が機に

かな

ねんぶつとう

ごんきよう

ぎよう

しゆ

おうじよう

と

のち

叶わず。念仏等の権経の行を修して往生を遂げ、後に

ほけきよう

さと

い

せつ

き

法華経を覚れ」と云わん。かくのごとき説を聞くといえど

も、あえて用いるべからず。もち

その故は、四十余年の諸の経には法華經の名字を呼ばゆえ しじゅうよねん もろもろ きよう ほけきよう みようじ よ

ず。いずれの処にか機の堪・不堪を論ぜん。法華經においところ き かん ふかん ろん ほけきよう

ては釈迦・多宝・十方の諸仏、一処に集まつて撰定して云しゃか たほう じつぼう しょぶつ いっしょ あつ せんてい のたま

わく「法をして久しく住せしむ」「如来滅して後において、ほう ひさ じゅう によらいめつ のち

閻浮提の内に、広く流布せしめて、断絶せざらしめん」。こえんぶだい うち ひろ る ふ だんぜつ

の外に今仏出来して法華經を末代不相応と定むれば、既にほか こんぶつしゅつたい ほけきよう まっだいふそうおう さだ すで

法華經に違す。知んぬ、この仏は涅槃經に出だすところのほけきよう い し ほとけ ねはんぎよう い

滅後の魔仏なり。これを信用すべからず。その已下の菩薩・めつご まぶつ しんよう いげ ぼさつ

しようもん びくとう

ごんろん

およ

ふしん

声聞・比丘等は、また言論するに及ばず。これらは不審な

ねはんぎよう き

めつご ま へん

し。涅槃經に記するところの滅後の魔の変ずるところの

ぼさつとう

ゆえ

ほけきよう

ざ

さんぜんだいせんせかい

ほか

菩薩等なり。その故は、法華經の座は三千大千世界の外、

しひやくまんおくあそぎ

せかい

なか

じゆうまん

ぼさつ

四百万億阿僧祇の世界なり。その中に充滿せる菩薩・

にじよう

にんてん

はちぶとう

みな

によらい

ごうちよく

こうむ

おのおの

あ

二乗・人天・八部等、皆、如来の告勅を蒙り、各々の在る

こくど

ほけきよう

ひろ

よし

がん

ぜんどうとう

ところの国土に法華經を弘むべき由、これを願じぬ。善導等

ごんじや

なん

りゆうじゆ

てんじんとう

ごんきよう

ひろ

もし権者ならば、何ぞ竜樹・天親等のごとく権教を弘め

のち

ほけきよう

ひろ

ほけきよう

ごうちよく

かず

い

て後に法華經を弘めざるや、法華經の告勅の数に入らざる

なん

ほとけ

ごんきよう

ひろ

のち

ほけきよう

ひろ

や、何ぞ仏のごとく権教を弘めて後に法華經を弘めざる

や。もしこの義ぎなくんば、たとい仏ほとけたりといえども、これを信しんずべからず。今は法華經の中の仏ほとけを信しんず。故に、仏ほとけに就ついて信しんを立たつと云いうなり。

問とうて云いわく、釈迦如来しゃかによらいの説とくところを他たぶつ仏しんこれを証しょうするを實まことの説せつと称しょうせば、何ぞ阿彌陀經なん あみだきようを信しんぜざるや。

答こたえて云いわく、阿彌陀經あみだきようにおいてほけきようは法華經のごとき証明しょうみような無ゆえきが故とに、これを信しんぜず。

問とうて云いわく、阿彌陀經あみだきようを見るに、釈迦如来しゃかによらいの説とくところの一日七日の念仏いちにちしちにち ねんぶつを、六方の諸仏ろっぽう しょぶつ、舌したを出いだし三千さんぜんを覆おおつ

てこれを証明せり。何ぞ証明無しと云うや。

こた

い

あみだきよう

まった

ほけきよう

答えて云わく、阿弥陀経においては全く法華経のごとき

しようみような

しやかいちぶつ

しやりほつ

む

と

のたま

証明無し。ただ釈迦一仏、舍利弗に向かつて説いて言わ

われいちにんあみだきよう

と

ろつぼう

しよぶつ

した

く「我一人阿弥陀経を説くのみにあらず、六方の諸仏、舌を

い

さんぜん

おお

あみだきよう

と

のたま

出だし三千を覆つて、阿弥陀経を説く」と云うといえども、

しやかいちぶつ

せつ

しよぶつきた

これらは釈迦一仏の説なり。あえて諸仏来りたまわず。こ

ごんもん

しじゆうよねん

あいだ

きようしゆ

ごんぶつ

しかく

ほとけ

これらの権文は、四十余年の間は教主も権仏の始覚の仏な

ほとけごん

ゆえ

しよせつ

ごん

ゆえ

しじゆうよねん

り。仏権なるが故に、所説もまた権なり。故に四十余年の

ごんぶつ

せつ

しん

いま

ほつけ

ねはん

くおん

権仏の説はこれを信ずべからず。今の法華・涅槃は、久遠

じつじよう えんぶつ じつせつ じつかいごぐ じつこん たほう

実成の円仏の実説なり。十界互具の実言なり。また多宝・

じつぽう しょうぶつきた しょうみよう ゆえ しん

十方の諸仏来つてこれを証明したもう。故にこれを信ず

あみだきよう せつ むりようぎきよう しんじつ あらわ

べし。阿弥陀経の説は、無量義経の「いまだ真実を顕さず」

ことば やぶ お まった しゃかいちぶつ ことば しょうぶつ

の語に壊れ了わんぬ。全く釈迦一仏の語にして諸仏の

しょうみよう

証明にはあらざるなり。

に きよう つ しん た むりようぎきよう しじゅうよねん

二には経に就いて信を立つとは、無量義経に四十余年の

しよきよう あ い しんじつ あらわ ねはんぎよう い

諸経を挙げて云わく「いまだ真実を顕さず」。涅槃経に云

によらい こもう ことば な しめじよう こもう

わく「如来には虚妄の言無しといえども、もし衆生、虚妄

せつ よ ほうり う し よろ したが ほうべん

の説に因つて法利を得と知らば、宜しきに随つて方便して、

すなわ

則ちためにこれを説きたもう。と また云わく「了義經に依いりようぎきよう

ふりようぎきよう

よ

いじよう

もん ひと

つて不了義經に依らざれ」已上。かくのごとき文、一つに

みな

しじゆうよねん

じせつ

しよきよう

こもう

ほうべん

あらず。皆、四十余年の自説の諸經を、虚妄・方便・

ふりようぎきよう

ませつ

しよう

みな

ひと

きよう

す

不了義經・魔説と称す。これ皆、人をしてその經を捨て

ほつけ

ねはん

い

なん

たの

あ

て法華・涅槃に入らしめんがためなり。しかるに何の恃み有

もうご

きよう

とど

ぎようぎ

くわだ

とくどう

ご

いま

つて、妄語の經を留めて行儀を企て、得道を期するや。今、

ごんきよう

じようしゆう

す

じつきよう

しん

ゆえ

きよう

権教の情執を捨てて、ひとえに実經を信ず。故に、經

つ

しん

た

い

に就いて信を立つと云うなり。

と

い

ぜんどうおしよう

にん

つ

しん

た

ぎよう

つ

問うて云わく、善導和尚も人に就いて信を立て、行に就

いて信しんを立たつ。何なんの差別さべつあらんや。

答こたえて曰いわく彼は阿弥陀経等の三部さんぶに依よつてこれを立たて、

いちだい きよう りようぎきよう ふりようぎきよう わ

一代の経きようにおいて了義経・不了義経を分わかたずしてこれ

た ゆえ ほつけ ねはん ぎ たい なん とき

を立たつ。故ゆえに、法華・涅槃の義ぎに對してこれを難なんずる時ときは、

ぎやぶ お

その義ぎ壞やぶれ了おわんぬ。